

樺太に向ひ
進發

雨に遭うて佐渡に避泊し、三十日朝大湊に入港した。

北遣艦隊は諸般の準備を整へ、七月四日午前九時を以て行動を開始し、陸軍運送船を護衛して樺太に向ひしが、北進するに従ひ、寒氣次第に加はり、海上冷霧深くして、親王は痼疾の兩脚神経痛に悩まれたるも、何の苦痛も訴へられず、病を力めて日々軍務に精勵せられたるこそ、誠に恐懼の至りであつた。七月七日樺太コルサコフ港に著し、掃海の終るを待つて各艦船豫定の揚陸錨地に進入し、直に陸戦隊を揚げて何等敵の抵抗を受くることなく、揚陸地點を占領し、陸軍の揚陸を開始した。敵は我掃海艇に對して砲撃を加へたるも、我掩護艦の應戦に依つて忽ち沈黙し、自ら砲臺及建築物等を燒棄して逃走した。

コルサコフ
占領

上陸軍は直に前進を開始し、翌八日未明砲火を交へずして燒燼したるコルサコフ市を占領し、千代田は須磨及第九艇隊と共に陸軍歩兵一小隊を乗せて、十日朝西能登呂岬に到り、掃海の後須磨、千代田の聯合陸戦隊を揚げて能登呂燈臺を占領し、陸軍守備隊を残して夕刻コルサコフに歸著した。敵は我軍の優勢に恐れて、内地深く逃入し、南樺太の沿岸は一兵を舳らすして我有に歸し、艦

敵艦ノロー
キクの殘骸
視察

第二作戦

隊は更に第二作戦に移ることゝなつた。親王は一日汽艇を舩して灣内を巡視し、昨年千歳の擊破したるノローキクの殘骸を視察して、敵ながら勇艦の最期を弔はれ、又上陸しては全市燒土と化せるコルサコフの町を視察して敗戦の悲惨を痛切に感ぜられ、戦争は敗くべきものにあらずとの言葉を洩らされた。

やがて艦隊は第二次陸軍輸送に従事する爲め、七月十二日函館に向ひコルサコフを出發し、途中濃霧に塞かれて航海頗る困難を極めしも、十四日函館に入港し、十七日同地に集合せる陸軍運送船を護衛して函館出發、翌十八日輸送基地たる小樽に著した。尋で七月二十一日北遣艦隊は北樺太占領の目的を以て、第二次陸兵運送船を掩護し、小樽出發、二十四日朝陸軍揚陸地點アルコア沖に達し、掃海並に威嚇砲撃の後、陸上敵なきを確め、直に陸軍の揚陸を開始したるに、敵は頻りに火を村落等に放ちて建築物を燒燬しつゝ、退却し、炎燄天に冲する光景誠に凄愴であつた。此間に於て千代田及須磨は命を受けて、對岸なる沿海洲インペラートルスカヤ及コンスタンチノープスキの偵察に赴き、二十五日同港口に進み、先づ驅逐艦をして港内を偵察せしめたるに、敵の隻影を認

北樺太の攻
略

めざるを以て、千代田及須磨は港内に進入し、陸戰隊を上げて敵情を探らしめたるも何等得るところなく、二十六日はアラスカヤ湖及其附近の偵察竝に測量を行ひ、二十七日アレキサンドロスキーに歸著した。

尋で命に依り千代田は他の諸艦と共に八月一日コルサコフに向つて歸航の途に就き、途中アレキサンドロスカヤの偵察を試みたるも、濃霧に會して咫尺を辨せず、加ふるに風雨さへ加はりて艦位確ならず、數回往返したるも遂に港口を發見せざるを以て偵察を中止した。而かも霧は尙ほ晴れず、艦位は確かならず、霧中に彷徨する艦長の苦心甚だ大なるに加へて、親王は脚部の神経痛に悩まねながら、艦橋に在つて指揮せらるゝこと三晝夜、四日午後に至りて霧漸く霽れ、五日コルサコフに歸著した。濃霧の中に編隊航行する艦長の苦心と憂慮とは、陸上人の到底想像し得ざるところである。

濃霧咫尺を辨せず

爾後千代田は秋津洲、八重山及第五驅逐隊と共に、稚内を根據として宗谷海峽の哨戒に従事することとなり、親王は先任艦長として哨戒全般の指揮に任せられた。尋で同月二十七日千代田は津輕海峽の哨戒勤務に服することとなり、

宗谷海峽の哨戒

横須賀に回航

館に向ひしが、翌二十八日更に横須賀に回航し完全なる修理を行ふべき命を受け、三十一日同港に入港した。是より先き、米國大統領の仲介により同國ポーツマウスに於て、日露講和會議開始せられしが、九月一日兩交戰國間に休戰條約締結せられ、茲に一先づ戰鬪行爲の終結を告げた。

戰局の大勢定まる

昨年二月、日露兩國初めて戦を開きてより以來、休戰條約締結に至る迄正に一年七ヶ月、其間、海に、陸に、我軍連戦連勝、向ふ處敵無きの概があつた。陸軍は、前に旅順の堅塞を陥れて、敵艦隊の根據を覆へし、後に奉天の會戰に大捷して、敵軍南下の大計を挫き、海軍は、初めに旅順に敵の第一艦隊を屠り、終りに日本海に敵の第二、第三艦隊を撃滅し、我海權を確立して滿洲軍後顧の憂を絶ち、更に海陸協同して樺太を占領し、戰局の大勢既に畧ぼ定つた。

是より先き、日本海々戰に於て露國艦隊の全滅するや、亞米利加合衆國大統領セオドール・ルーズヴェルトは日露兩國の間に調停を試み、兩國相互間に直接講和談判を開始せんことを希望する旨兩國政府に通告した。帝國政府は深く合衆國大統領の好意を諒として之に同意し、露國も亦其勸告に應じたるを以て、

米國大統領の調停

講和談判開始

帝國は七月三日外務大臣男爵小村壽太郎及合衆國駐劄特命全權公使高平小五郎を、露國は國務尙書兼大臣委員會議長セルジウキツテ及合衆國駐劄特命全權大使男爵ローマン・ロマノウキツチ・ローゼンを、夫々講和全權委員に任命し、兩國委員は合衆國ニユール・ハンブッシュ州ポーツマウスに於て會合、講和談判を開始することゝなつた。會議は八月十日を以てポーツマウス鎮守府所屬の一館に於て正式に開始せられ、兩國全權互に委任狀の査閲交換を了へて直に本會議に移り、帝國全權委員より、十二箇條より成る講和條約基礎案件を提示した。爾後幾たびか會合交渉を重ね、時に或は交渉決裂の虞ありしも、合衆國大統領の調停と兩國の互譲とに依り、八月二十九日を以て講和條件に關する一切の要領を協定し、更に休戦に關する商議を遂げ、九月一日を以て休戦議定書を締結し、茲に戰鬪行爲の休止を見るに至つたのである。

講和條約の成立

斯くて九月五日を以て兩國全權委員の間に、本文十五條、追加約款二項より成る日露講和條約書の調印を終り、十月十五日兩國の批准を経て愈條約の成立を見、二十ヶ月に亙る日露戰爭は帝國の勝利を以て光榮ある終局を告げ、兩國

休戦議定書の締結

平和克復の詔勅煥發

國交の回復を見るに至つた。講和條約は翌十六日を以て公布せられ、帝國は茲に交戦の目的を達すると共に、東洋治平の宏圖も亦確立せられたるを以て、同日日露國交回復に關し、國民に對して優渥なる詔勅を煥發せられ、同時に、陸海軍に對しても亦勅語を賜つた。

聯合艦隊東京灣集合

戰爭既に局を結ぶ、東郷聯合艦隊司令長官は大本營の命令に基き、麾下全艦隊に對し凱旋觀艦式に參列する爲め東京灣に回航すべき旨を令し、各艦艇は逐次東京灣に到着し、横須賀、横濱、館山等の諸港灣には大小の艦艇群集輻湊して、檣桁林立、煤煙空に漲り、光景壯觀を極めた。是より先き、船體修理の爲め横須賀に歸港したる親王乘艦千代田は、十月十四日横須賀より館山に回航して第六戰隊に合し、同月二十日館山拔錨即日横濱に投錨し、其他の諸艦も亦二十一日までに全部横濱沖なる觀艦式錨地に就いた。尋で二十二日東郷聯合艦隊司令長官は各艦隊司令長官並に幕僚を從へて參内し、宮中千種間に於て天皇に拜謁し、親しく海戦の經過を奏上せしが、親王は此日貞愛親王、威仁親王、載仁親王と共に陛下に扈從せられた。

聯合艦隊司令長官の海戦經過奏上

聯合艦隊司令長官復命の翌日十月二十三日を以て車駕親臨、凱旋觀艦式を横濱沖に舉行せられ、參列の艦艇は御召艦並に供奉艦以下百六十五隻、其排水量三十萬八千五百餘噸に達し、英國支那艦隊及米國軍艦も亦式場に參列した。東西約五海里、南北約二海里三分の一に互る式場に、帝國艦艇は錨位正しく六列に整列し、二十五隻の拜觀船亦後方に一列を成し、雄風堂々、艦舷海を掩ふの概があつた。

凱旋觀艦式

錦旗金風に翻る

大元帥には此日午前八時十分宮城出御、各皇族、大臣其他多數の文武高官を從へて、新橋停車場を發せられ、午前九時二十分横濱著、御出迎への東郷聯合艦隊司令長官以下に謁を賜ひ、嚙唳たる奏樂と殷々たる禮砲との裡に汽艇に召されて、御召艦淺間に乗御あれば、菊花金紋の天皇旗は燦として檣頭に翻へされた。斯くて聯合艦隊參謀の御職務を以て先著の皇太子を始め、各皇族に御對顔の上、大勳位以下文武の高官に賜謁終つて、午前十時十五分御召艦は錨を抜き、八重山の先導、龍田、千早、滿州丸の供奉に依りて式場に向進した。朝來滿艦飾を施し、序列を整へて親閱を待ちたる參列軍艦は、再び禮砲を放ち、登

曠古の盛儀

舷禮式を行つて奉迎し、やがて御召艦の列中に進むや、東郷司令長官は玉座の側に侍立して、順次に艦艇の戰歴、艦艇長以上の官氏名を奏上し、艦艇に在つては君々代を吹奏し、總員登舷、奉賀を三唱して最敬禮を行つた。此日薄雲空を掩ひ、海上稍や濛氣ありしも、仲秋の氣爽かにして、風軽く、波和かに、海は拜觀の舟を以て滿され、陸は拜觀の人を以て埋められ、鹵簿の艦隊肅々として御召艦の過ぐる處、軍樂響き、喇叭鳴り、歡聲擧がり、誠に曠古の盛儀であつた。親王は千代田艦長として之に參列せられ、妃にも亦此日千代田に來艦、觀艦式を陪覽せられ、夜は亦汽艇に御同乗、艦列の間を縫うて電燈飾を觀覽後、御同列にて東京に歸邸せられた。

此日觀艦式に列したる帝國の艦艇は左の通りである。

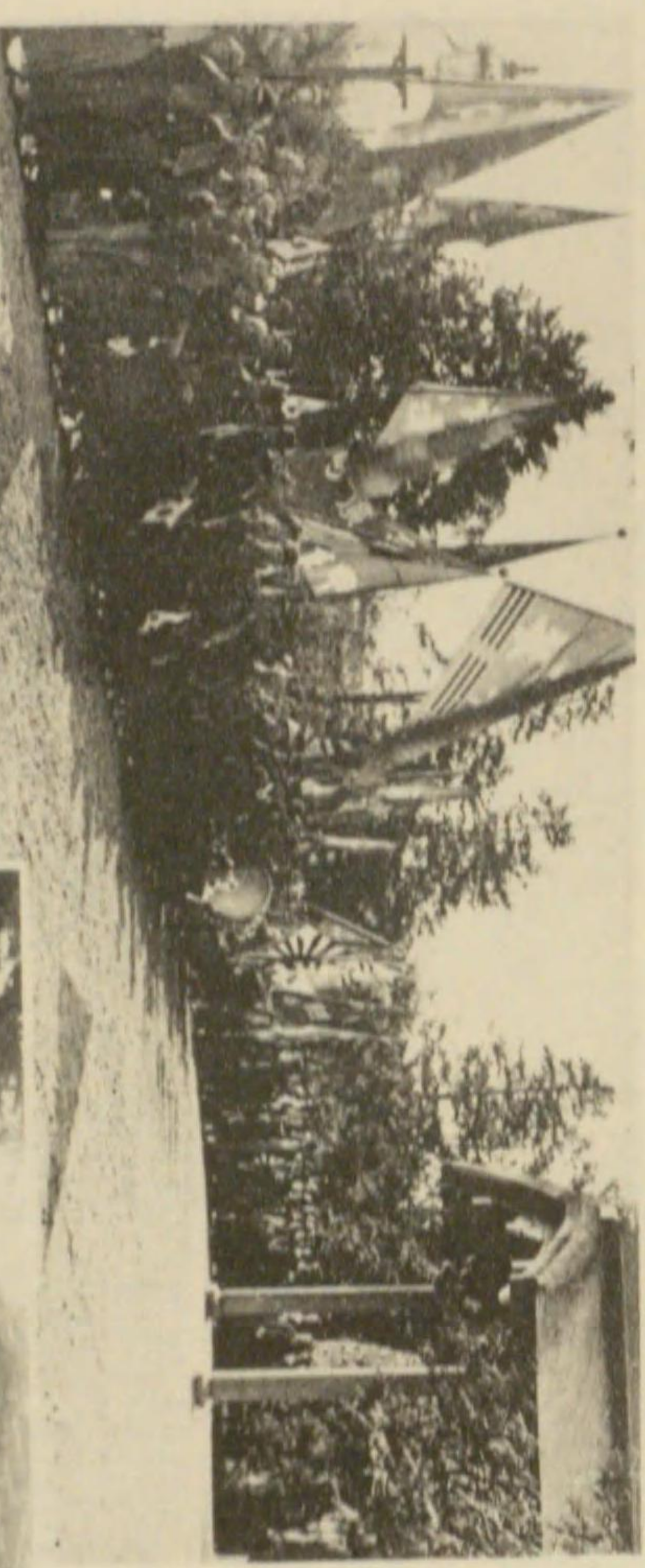
- 御召艦 淺間
- 供奉艦 龍田、千早、八重山、滿州丸(舊名マンチユリヤ)
- 參列艦船艇

- 軍艦 敷島、富士、朝日、相模(舊名ベレスウエート)、丹後(舊名ボルトワ)

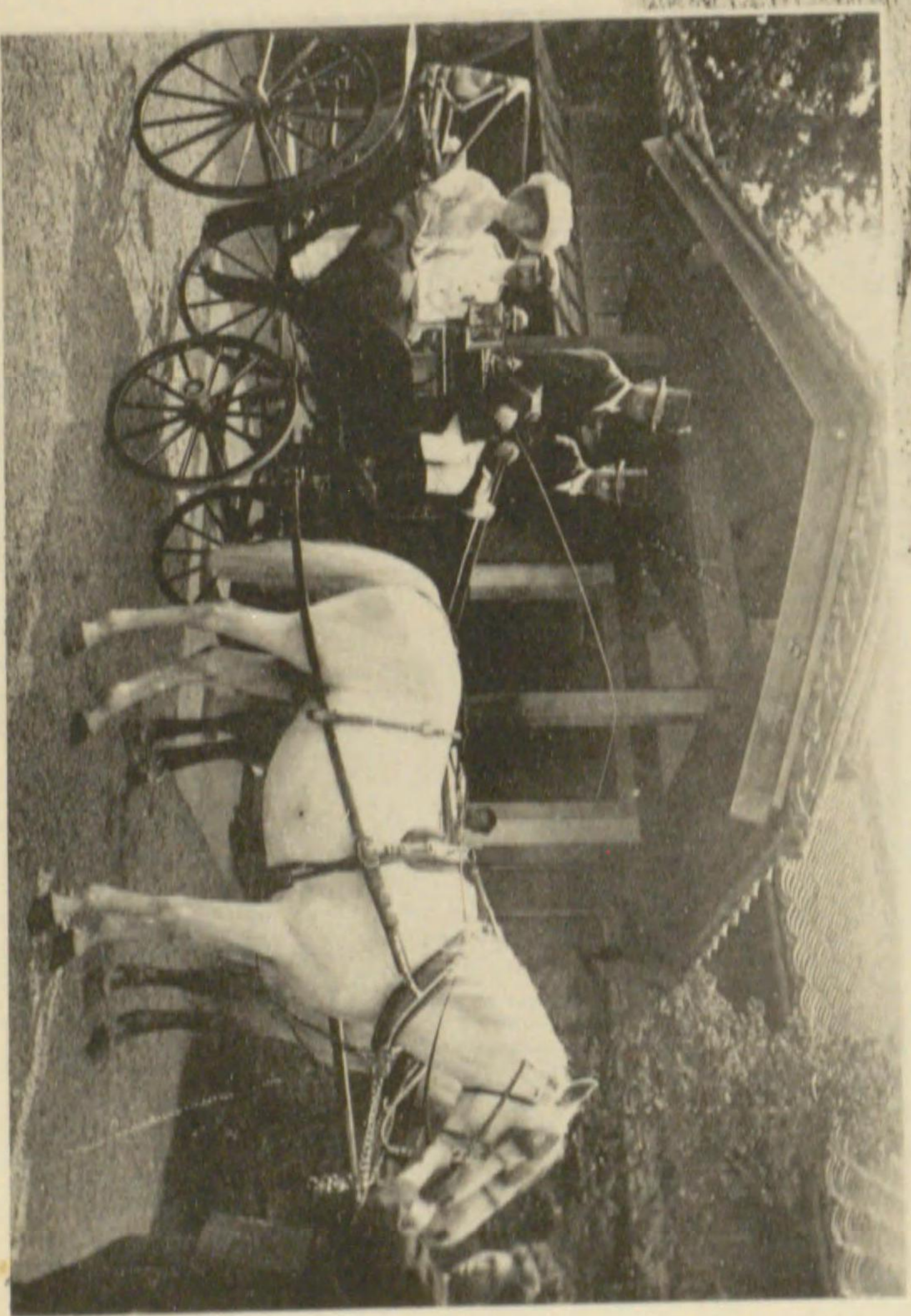
観艦式参列
艦艇

- 扶桑、鎮遠、壹岐(舊名ニコライ一世)、出雲、常磐、八雲、
- 吾妻、磐手、春日、日進、浪速、高千穂、嚴島、
- 橋立、笠置、千歳、和泉、千代田、秋津洲、須磨、
- 明石、新高、對馬、音羽、沖島(舊名アブラクシン)、
- 見島(舊名セニヤウイン)、高雄、筑紫、磐城、摩耶、鳥海、
- 赤城、宇治、
- 假裝巡洋艦 姉川丸(舊名アンガラ)、松江丸(舊名スンガリー)、日本丸、香港丸、
- 八幡丸、臺中丸、臺南丸、豊橋、春日丸、日光丸、熊野丸、
- 韓崎丸(舊名エカテリノスラフ)
- 驅逐艦 二十八隻
- 水雷艇 五十九隻
- 潜水艇 五隻(但戰役ニ參加セズ)

曩に日露の風雲漸く急なるや、依仁親王は親ら望んで海上勤務に就かれ、千歳副長として昨年二月九日劈頭第一の旅順口攻撃より、十一月下旬修理の爲め



下殿蘭ノ上車馬御



迎奉旋凱御年八十三治明
(ヲニ前邸御町葵)

海上御從軍
二十箇月

勇烈英武

横須賀歸還に至る迄、専ら旅順方面の作戰に従事し、其間北海にノーウキクを撃碎し、不撓不屈幾多の險難を凌がれ、本年一月第二期作戰に入るや、更に自ら進んで千代田艦長として戦線に立たれ、遂に敵の増遣艦隊を日本海に撃滅し、續いて樺太占領に従事せられ、前後二十箇月間、終始一貫海上に在つて奮闘し、士卒と勞を共にせられたるは、海軍出身の皇族中、親王唯一人にして、其勇烈英武誠に讃仰の至りである。皇軍の士氣旺盛にして連戦連勝したるも亦故ありと謂ふべきである。

功に依り功三級金鷄勳章及年金七百圓を授け賜はつた。

第十一章 艦長及軍令部出仕時代

千歳副長として明治三十七年二月初て出征の途に就かれてより、千代田艦長として翌三十八年十月東京灣に凱旋せらるゝ迄、征戰殆ど二閱年、金枝玉葉の御身を以て、黄海に、日本海に、又北海に、赫々の偉勳を樹てられたる親王には、海風に濕ひたる征衣を干すの遑もなく、同年十二月二十日更に南清艦隊の一艦高千穂の艦長に轉補せられ、又もや辛勞多き海上の勤務に就かるゝ事となつた。精勵恪勤なる親王に於ては素より本懐とせられたる處なりとは云へ、引續きての御勞務は誠に恐懼の至りであつた。

當時高千穂は浦賀に於て修理中なりしが爲め、親王は十二月二十七日同地に於て乘艦せられ、戰勝の榮光に輝く明治三十九年の新春を同艦上に迎へられしが、艦は修理中のことゝて艦務比較的閑散なりければ、一月十三日より二月十五日迄の期間、妃を伴ひて葉山なる岩倉公爵別邸に、暫し寛ぎの日を過ぎられた。然かも此間と雖も、宮中の儀式、饗宴等には參列を缺かせられず、又葉山に御滯

高千穂艦長
に轉補皇太子と御
親交

南清警備

春日艦長に
轉補

在中は同地御用邸に在したる皇太子の許に屢參候せられ、皇太子亦親王を訪はせらるゝ事數回あり、其御親交の程も量られて、床しくも亦畏き極みであつた。かくて高千穂は三月十二日、愈南清に向け横須賀軍港を發し、津を経て二十日佐世保に寄港、超えて二十四日上海に向ひ發航したるも、途中荒天の爲め無線電信装置を損し、一旦佐世保に引還し修理の上、更に二十七日發、三十日上海著、南清艦隊司令官海軍少將武富邦鼎(旗艦千歳に座乗)の麾下に入つた。當時千歳が旗艦として南清に在りし事は、對露戰爭の前半、其副長として活躍せられたる親王の御身に取、定めし思出多き御事であつたであらう。

然るに親王の上海に於ける勤務は極めて短く、著後僅に一週日にして、四月七日春日艦長に轉補の命に接したるが爲め、高千穂を率ゐる同月二十一日佐世保に向け歸航の途に就かれた。僅々三週日の短時日の間に於ても、親王の精勵なる、銳意清國の水陸官憲と交際を重ね、兩國々交上に貢獻せられたるのみならず、流暢なる英佛語を操りて外人に應對し、其尊敬を集められたるは、當時の我在留官民の大に肩身廣く感じた處であつたと傳へられて居る。

艦橋上の勇姿

斯くて四月二十五日吳に於て春日(豫備艦)に御乗艦、翌二十六日吳發品川に向はれたるに、偶海上大に荒れて、土佐沖の怒濤、遠州灘の狂浪は、洶湧澎湃、艦はさながら木の葉の波に揺ぐが如く、若き水兵等は船暈に惱まされて、甲板の一隅に只悄然たるばかりなりしが、艦橋を仰いで、其處に自若として艦を操縦せらるゝ剛毅なる艦長宮の勇姿を拜しては、心忽ち奮ひ起ち、互に相勵まして働いたのであつた。

二十八日品川灣入泊後は凱旋祝賀の催多く、殆んど連日各種會合の席に參列せられ、然かも其間に於て五月六日には、妃と共に春日艦上に親しく士卒を犒ひ、又八日には艦を清水港に回航せらるゝ等、公私共に多忙を極め、常人の經驗し難き勞苦に面して出精せられたるは、日頃精勵なる御資質の致す處なりとは云へ、さるにても亦畏き次第であつた。

第一艦隊編入

五月十日春日は、出雲、磐手、八雲、淺間、日進、音羽等の諸艦並に第一、第五、第十一、第十三の諸驅逐隊と共に第一艦隊に編入せられしが、折柄艦内に腸窒扶斯患者發生したる爲め、暫時親王の歸艦御見合せを願ひ、艦は副長に

日本海巡航

依つて清水より似ノ島消毒所に回航せられ、艦内の大消毒を行ひたる上、六月十日宮島に於て親王の御歸艦を迎へ、同月二十一日吳發、佐世保に於て第一艦隊司令長官海軍中將片岡七郎麾下の諸艦と會し、爾後日本海を巡航し、青森灣内に於ける艦隊諸訓練等に參加し、九月十五日横須賀に入港した。戦後引續きての南航北巡、繁劇なる海上勤務に、些か御安息の暇もなく、皇族の御身を以て、一般士卒と共に無味索寞たる艦内生活の辛勞を願たれしは、到底陸上に在る人々の想像だも爲し得ざる處である。

吳及佐世保方面に行動

今次の横須賀御在泊中、少しく休養の機會を有たれしも、十月八日再び出航、岸和田、高松を経て十三日吳入港、其後同方面に於て屢出動諸訓練に従事せられ、十一月に入りては、第一艦隊、佐世保鎮守府及竹敷要港部聯合小演習に參加、朝鮮海峽方面に行動の後、長崎を経て月末吳に歸港せられしに、艦内に再び腸窒扶斯患者發生したる爲め、副長より暫時御上陸を願ひ出で、十二月一日一先づ歸京あらせられた。

海軍々令部出仕に轉補

此御滯京中、明治三十九年十二月二十四日附を以て海軍軍令部出仕に補せら

れ、茲に多年の海上生活を離れて、陸上勤務に轉せらるゝ事となつた。抑親王是迄の御勤勞を回想するに、明治二十五年佛國より御歸朝、高千穂分隊士の職に就かれし以來、二十六年歐米差遣の約一箇年、二十八年横須賀敷設隊勤務の四箇月及三十年軍令部課報課在勤の一箇年以外は、總て浪荒ぶ海上の勤務に服せられ、浪速、千代田、扶桑、松島、高砂、八島、吾妻、千歲、高千穂、及春日の諸艦を通じて、前後約十二箇年半の長期間、職は分隊士より艦長に至る各階級に涉り、常に將士と勞苦を俱にし、具に海上の經驗を積まれたるは、竹の園生のやんごとなき御方として、眞に空前と云ふを妨げず、其御奉公の勳績や寔に甚大なるものであつた。然るに今や陸上勤務に轉せられたれば、此際御休養あつて然るべきを、精勵なる親王は益精進の御志厚く、此機會に於て其御素志たる學術の研鑽に力を注がれ、本務として軍令部第四班に在つて外國事情を調査研究ある外、海軍大學校に於て甲種學生の課程を聽講せられ、更に前年來經書の進講を承れる元海軍編修杉山令吉に就き、毎火曜日午後漢文及書法を修められ、大體に於て海軍軍令部及海軍大學校の雙方に毎日出勤せられたれども、

海軍大學校
にて聽講漢文及書法
御修業海上御勤務
十二箇年半

公私御多忙

時に艦船進水式、諸學校卒業式或は競馬會等に、御名代として又は勅命に依り御差遣の事もあり、又皇族講話會、各種饗宴等に列席、各國大公使引見等の御用頗る繁劇であつた。之が爲め已むを得ず御缺勤の場合には、力めて御附武官を遣はされ、之を通じて研究を進められたるは、其御用意の尋常ならざるのみならず、向上心の旺盛と御勉勵の並々ならぬを拜するに難くないのである。

海軍少將に
昇進

海軍々令部に職を執らるゝ事三年にして、明治四十二年十二月一日現職のまま海軍少將に昇進せられた。

御健康狀態

親王は生來頑健なる御體質にはあらざりしも、御自身の攝生と修練とに依り、御留學時代以來頗る壯健に在らせられ、多年一般將士と何等異なるところなき海上の劇務に鞅掌せられたるも、疾病の爲め勤務を缺かれたることは極めて稀であつた。對露戰爭後に於ても、明治四十年初、四十一年末及四十二年春の頃、約一二週間感冒、腸加答兒或は下腿神經痛等の爲め引籠られたるのみにして、御健康狀態は概して良好なりしが、明治四十二年十一月に至り右側肺炎竝に肋膜炎に罹られ、遂に引入療養せらるゝの已むなきに至られた。幸に速に輕快に

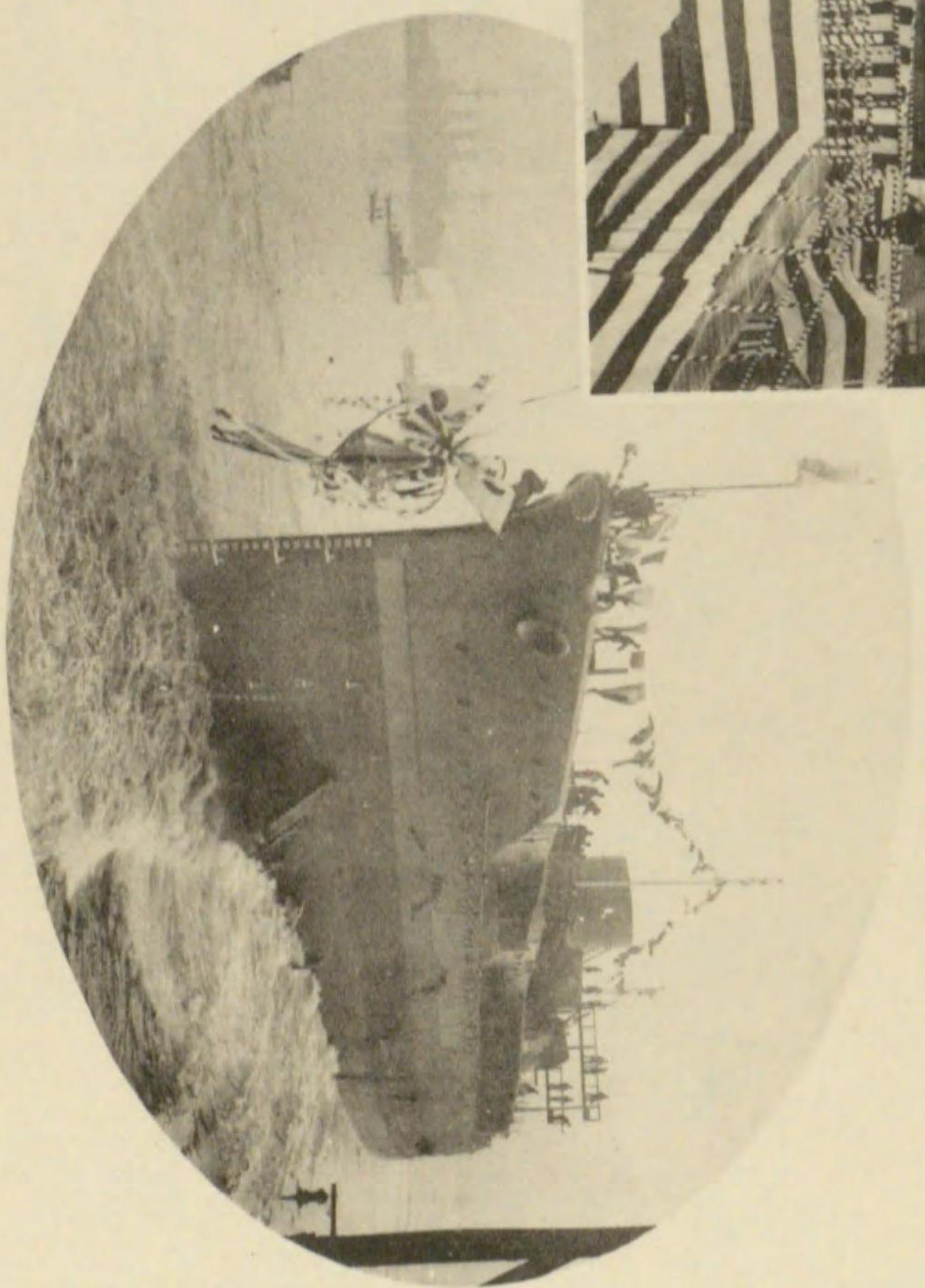
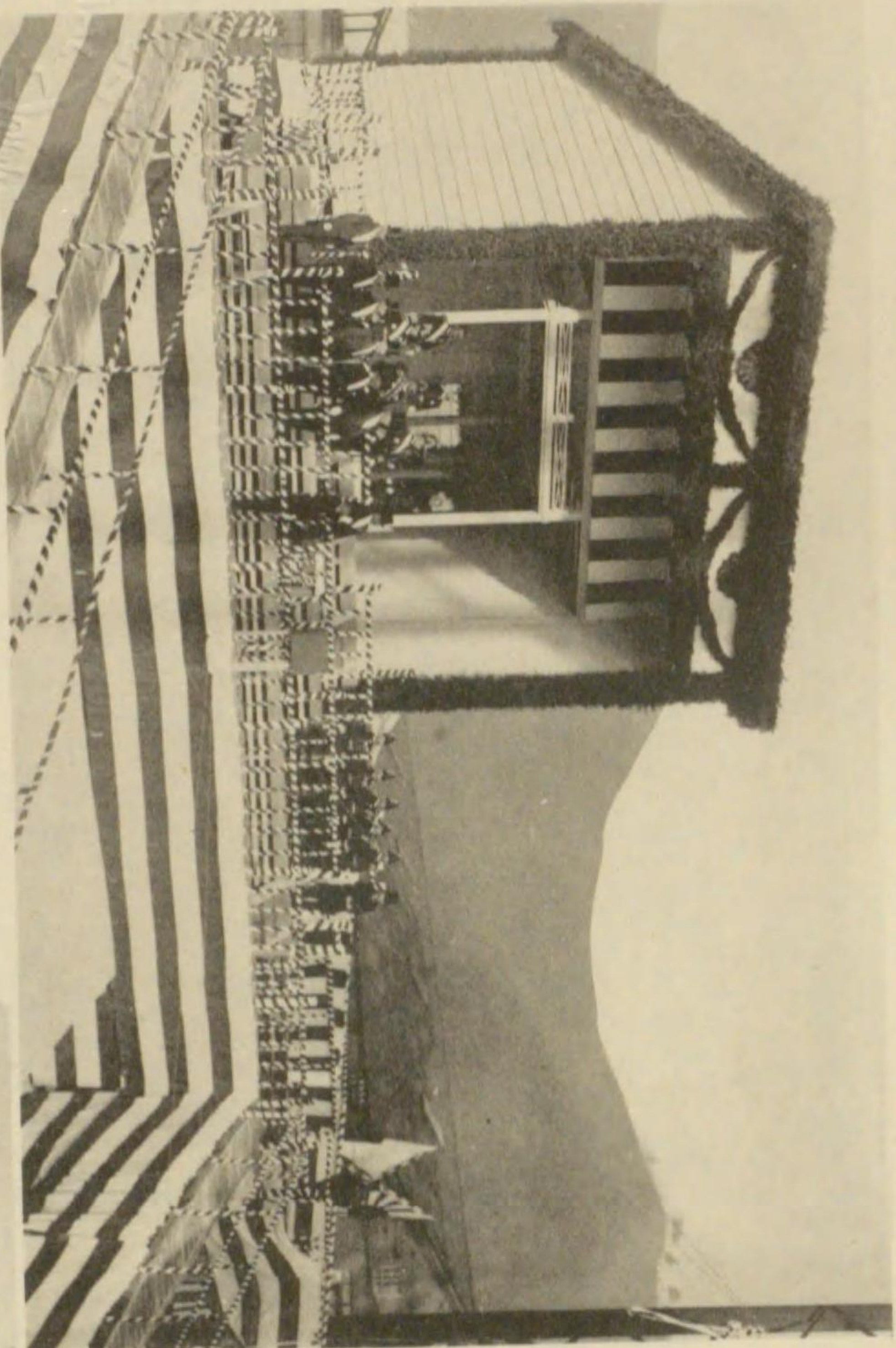
引入御療養

快癒御歸京

向はれ、翌四十三年一月十七日逗子なる香川別邸に轉地療養せられ、同年四月一日よりは新に同地に於て御買入の御別邸に妃と共に移り住はるゝことゝなつた。其後御經過極めて良好にして、同月末には殆んど全快せられたるにより、二十九日御歸京、五月三日より御出勤ありしが、此間凡そ半歳に及び、誠に輕からぬ御症状と云ふべきであつた。

妃同伴英國
へ御差遣

長き御病も癒えて玉體愈健かに、引續き軍令部に勤仕せられしが、明治四十四年一月十日、大不列顛國皇帝陛下の戴冠式に、天皇御名代として妃同伴差遣の御沙汰を拜せられ、春酣なる四月十二日を以て、東郷海軍大將、乃木陸軍大將以下の隨員を従へ、浪路遙に西歐の地に向け本邦を發足せらるゝことゝなつた。時に親王御齡正に四十五歳である。



式水進向日艦軍



第十二章 英國皇帝戴冠式御參列

英國皇帝ジョージ五世の戴冠式に當り、依仁親王が日本帝國の天皇御名代として、妃同伴差遣の御沙汰を拜せられたるは、誠に光榮の御事と申すべく、殊に隨行員中には武勳赫々たる東郷、乃木兩大將の加はるあり、親王の英資と相俟つて、誠に帝國の光輝を發揚するに足るものであつた。

隨行員

隨行員

- | | | | | | | |
|-----------|--------|------|------|--------|--------|--------|
| 皇族附武官海軍少佐 | 陸軍砲兵中佐 | 式部官 | 海軍中佐 | 式部長官伯爵 | 陸軍大將伯爵 | 海軍大將伯爵 |
| 清河純一 | 吉田豊彦 | 渡邊直達 | 谷口尙眞 | 戸田氏共 | 乃木希典 | 東郷平八郎 |

東伏見宮御用取扱	宮岡慶子
侍	岩波節治
醫	補

外に宮内屬時岡茂弘、同黒澤滋太郎、東伏見宮附家扶仁羅山勝太郎、侍女田中益枝及東郷海軍大將の從僕一名之に加はる。

初め御一行は先づ巴里に赴き、戴冠式間際に倫敦に入らるゝ豫定なりしが、其後都合により巴里御立寄りには取止めらるゝことゝなつた。御沙汰を拜せられてより御出發迄は、諸般の準備、留送別の宴等に忙はしき日を過されしが、其主なるものは左の通りであつた。

三月二十日 貴衆兩院議長竝に議員の奉送會

四月十日 賢所參拜、拜謁竝に賜餐

四月十一日 皇太子御殿午餐

四月十二日午前九時隨行員一同宮邸に參集、九時四十五分親王竝に妃には一同を從へて御出門、十時三十分勅使竝に皇后、皇太子、皇孫の御使を始めとし、伏見宮貞愛親王其他各宮及文武官等約八百五十名の見送りの裡に、臨時列車に

東京御出發

横濱解纜

搭乘、新橋停車場を發せられ、十一時二十五分横濱臨時棧橋停車場著、直に岸壁に繫留中の賀茂丸に乗船、此處まで見送られたる梨本宮妃、英國大使サー・クロード・マクドナルド夫妻、陸軍大臣伯爵寺内正毅、海軍大臣男爵齋藤實以下約二百名と離盃を擧げられ、船は午後零時五分神戸に向つて解纜した。此日横濱市中は各戸國旗を掲げ、小學校生徒は鐵道線路附近に整列奉送し、在泊塙艦カインゼリン・エリサベスは皇禮砲を發射して敬意を表し、横須賀よりは鎮守府司令長官瓜生外吉以下多數の將官來演し、第三艇隊も亦回航し來り、今日の目出度き御發程を祝し、且萬里の長程に無事の御航海を祈りつゝ御見送り申上げた。

御乗船賀茂丸は、明治四十年十二月長崎三菱造船所に於て進水したる、總噸數八五二四噸、全速力一六・五節、荷容兩用の日本郵船會社歐洲航路船にして、當時は熱田丸、宮崎丸、北野丸、平野丸、三島丸と共に最新式の姉妹船であつた。船長丁抹人エフ・エル・サンマーは同社に永年勤務し、外人船長中錚々の譽ある老巧の人にして、今回の榮譽ある重責を果すに最もふさはしき船長であつた。

觀音崎を過ぎて外海に出づれば、北東の輕風船を追うて海上平穩、左に大島の噴煙緩くたなびき、右に伊豆の連峰春色濃やかに、此榮ある御一行の首途を

御乗船賀茂丸

神戸入港御
上陸

祝するが如くである。名にし負ふ遠州灘も波靜かに、夢圓かに、熊野浦もいつしか過ぎて、翌十三日午前十一時三十分紀淡海峡を経て瀬戸内海に入り、午後二時百船輻湊せる神戸港に繫留した。地方官民の伺候拜謁終りて、親王及妃は午後二時二十分御上陸、旅館音羽花壇に入られ、少憩後湊川神社の參拜、布引瀧の觀覽等あり、翌十四日には明石、舞子の勝を探り、舞子にては同地御別邸に御靜養中の有栖川宮威仁親王を訪問せられ、十五日は見送りの爲め京都より來られたる久邇宮邦彦王其他三宮方と船中にて御對面、且奉送の諸員と別盃を酌ませられた。

神戸發門司
へ

瀬戸内海

かくて御乗船賀茂丸は在泊軍艦千代田の登舷禮式に送られつゝ、午前十一時解纜、内外諸船の間を縫うて和田岬を西に廻れば、明石の瀬戸は早や前に開け、無數の白帆碧波に浮ぶところ、淡路島の翠巒は春霞にけぶり、須磨、明石の青松は白砂に映じ、風景繪よりも美しい。親王には軍艦乗員として瀬戸内海は幾度か航海せられたるも、今日は客船の一貴賓として、妃と共に眺めらるゝ内海の景色の一しほに面白く、殊に妃には初めての御航海とて、風和かに氣暖かな

門司入港

門司發上海
へ

下ノ關御遊
覽

る甲板に出で、右に左に、前に後に、迎ふる島々、見送る山々、刻々に變り行く風景に、いとゞ旅情を慰められた。頃は櫻の花の春、翠松紅花、錦織りなす小豆島、屋島、象頭山、御手洗などの名勝舊跡を次ぎ／＼に眺めつゝ、伊豫灘、周防灘は夜の間を過ぎ、明くれば四月十六日早朝、船は早靱の瀬戸を越えて午前六時五十分門司に入港、地方官民は汽艇十數隻に分乗して滿珠干珠二島附近に、又小學校生徒の一團は壇浦燈臺附近に整列奉迎した。繫留後奉迎諸員の伺候了つて、御一行は小門海峡觀瀾閣に入られ、夜は下ノ關市長の催に依り、御旅館前の海峡に漁船二十餘隻を浮べて篝火を點じ、夜焚と稱する漁獵を御覽に供した。翌十七日午前、御一行は汽艇にて下ノ關に赴き、赤間宮及阿彌陀寺の御陵を參拜せられしが、偶此日は對清戰爭馬關條約締結第十七週年の記念日に相當し、春帆樓に於て講和談判記念會開催につき、親王は同樓に臨まれ、市長の案内にて談判當時使用の什器一覽の上歸船せられ、船は正午關、門兩市民の水陸兩方面に於ける盛大なる奉送裡に上海に向け出港した。急流渦巻く海峡を航過して玄海灘に出づれば、天候漸く險惡となり、偏西の

上海入港

風力五乃至六に達し、夜半に至りて風浪愈荒く、翌十八日午後四時半遂に右舷舷梯を激浪の爲めに奪ひ去らるゝに至りしも、親王は素より妃にも御變りなく、午後風波漸次静まり、十九日午前七時揚子江口に達し、午後三時四十分上海港内の浮標に繫留した。在泊帝國軍艦對馬、宇治、清國軍艦海圻は登舷禮式を行つて奉迎し、上海總領事有吉明、第三艦隊司令官川島令次郎、對馬、宇治兩艦長及上海在留本邦居留民の主なる者等約百餘名、清國側よりは上海道臺劉燕翼、巡洋、長江兩艦隊司令官薩鎮冰、各部下を率ゐて御乗船に伺候し、又英國艦隊司令官ウインスロー中將は、今回の旅行の御微行なるを承知して、公式の訪問を差控ふる旨參謀を派して言上した。

蘇州御遊覽

賀茂丸は上海に碇泊すること二晝夜、親王及妃は四月二十日朝、戸田式部長官以下一部の隨員を從へて御上陸、有吉總領事の案内にて蘇州に赴き、先づ郵便尙書盛宣懷の別墅留園を觀られ、更に有名なる寒山寺及楓橋等を巡訪の後、午後八時三十分歸船せられ、翌二十一日は隨員一同及川島司令官を從へて上海日本小學校に赴き、記念の月桂樹二株を植ゑられ、東郷、乃木兩大將亦之に倣

上海出港香港へ

ひ、尋で上海郊外の張園、愚園及新公園等巡覽の後、總領事官邸にて少憩、午後一時三十分歸船せられ、船は三時三十分香港に向つて出港した。日本居留民團は埠頭に整列して歡呼奉送し、川島司令官は宇治に搭乘して吳淞迄見送り、長途航海の御安泰を祈つた。親王御一行の上海滞在中は清國官憲の接待特に鄭重を極め、上海、蘇州巡覽の際の如きは、道臺、巡撫、艦隊司令官等親しく迎接して大に款待に努めた。

海上霧深し

四月二十二日日出頃より、霧漸く深くして航海危険を覺ゆるに至り、汽笛信號をなしつゝ、警航せしが、太平洋汽船會社の一汽船は濃霧の爲め、此日福州沖にて坐礁し、其他清國汽船の附近沿岸に於て、擱坐、衝突、沈没したるものもあつた。賀茂丸は幸に無事南航をつゞけ、二十三日午前八時頃に至り霧漸く霽れて四邊を眺むれば、船は正に臺灣水道に在り、福建の山峯は青螺の如く、迥に西方水平線上に浮んで居る。正午の船位厦門の南東沖合約三十哩、香港迄二百八十哩を餘し、上海、香港間の約半途に在つた。船南に下るに従つて氣温漸く高く、此日最高七十二度に騰り、南東の微風肌に涼しさを感ずる程であつた。

香港入港

四月二十四日午前九時五十分香港の東口鯉魚門水道に入り、十一時カウルン第三埠頭の北側に繋留すれば、總領事船津辰一郎以下主なる日本居留民は直に賀茂丸に伺候し、英國側よりは香港總督及陸海軍兩指揮官各部下の將校を遣はして、各長官公式訪問遠慮の旨を通じた。午後一時三十分兩殿下は隨員一同を從へて御上陸、香港市街を輦臺の上より眺めつゝ、公園側停車場に著し、ケーブルカーに移乗して海拔三八〇〇呎のヴィクトリア・ピークに登り、四周の風光を賞覽せられた。夫より山を下つて總領事官邸に入り、夜は主なる本邦人數名を晚餐に召して歡談に興を催され、其夜は同邸に御宿泊、翌二十五日午後六時歸船せられ、風爽かなる甲板上に美しき香港の夜景を觀賞せられた。日は島の西に落ちて、暮靄ヴィクトリア・ピークの頂より垂れ初むるや、急坂に懸つて層々段を爲せる香港山腹の大厦巨屋は、忽ち萬顆の燈火に飾られて恰かも白玉の宮の如く、更に海水に映じては細波之を碎いて銀漿の搖曳するに似て居る。香港の港の夜の景色こそ世界の都に於ける最も美しきもの、一であらう。此日香港總督夫人は總領事館に親王及妃を訪ひ、白百合の花束を獻じて敬意を表した。

香港の夜景

香港御遊覽

香港發新嘉坡へ

四月二十六日午前五時三十分賀茂丸は香港を解纜して新嘉坡に向つた。氣温漸く騰つて此日八十度に達し、南西の微風も室内の蒸暑を拂ふに由なく、二十七日には暑熱更に加はり、纔に輕風に依つて涼を甲板に納るゝのみなりしが、親王及妃には頗る御壯健にて、甲板上の散歩或は讀書に閑を消された。四月二十八日午前七時頃、右舷遙に對露戰役當時、露國バルチック艦隊が滯泊したる佛領カムラン灣を望み、當年の海戰を追想されて同艦隊の末路を偲ばれ、四月三十日午前十一時三十分賀茂丸は新嘉坡ジョンストン棧橋沖に投錨した。駐在副領事其他伺候し、當地の總督及衛戍司令官は各副官を遣はして敬意を表し、御一行の滯在觀光につき便宜を圖るべき旨を告げた。之に對して親王は其好意を謝し、明日ジョホール觀覽に際し、汽車の便宜を得度き事の外、一切の公式款待を辭せられた。午後一時四十五分御一行は總督用汽艇にて上陸され、同廳用の馬車に分乘、水陸の眺め頗る佳なる三井物産株式會社支店長の社宅に入り、兩殿下は此夜を此處に過され、翌五月一日午前八時十五分御一行は臨時汽車にてタンクロード停車場發、九時ウッドランド驛著對岸ジョホールに渡られた。

新嘉坡入港

ジョホール御見物

同國王の厚意

同國王は國務卿及國務顧問等を派して出迎せしめ、自動車を供して御一行をイスタノ・ベサル(大王宮の意に招じ、宮殿内各部巡覽の便を計り、午餐の準備を整ふるなど、歓迎大に努めたるも、餘時なき爲め饗宴を辭し、急ぎ同々教寺院モスク・オブ・ジョホール及同朝歴代王の靈廟を訪ひたる後、ジョホール島を去り、午後零時三十分新嘉坡歸著、總領事の晚餐に臨まれ、此夜も三井社宅に泊られた。

新嘉坡發彼南入港

五月二日午前九時社宅を辭し、在留邦人の用意せる自動車にて、郊外タンジヨン・カトンに於ける椰子樹林内周遊の後、市内博物館を一覽され、正午に近く邦人の奉送裡に御歸船、午後十時出港、馬來半島の西岸に沿ひ北上し、四日午前七時三十五分彼南に入港した。駐在英國理事官は部下の一士官を派して敬意を表せしめ、御一行は午後四時上陸、該士官の先導に依り、極樂寺及植物園を觀覽し、日本人青年會の接待を受け、少憩後歸船せられた。埠頭を發して歸船の途に就く時、熱帯地方特有の驟雨襲來、一抹の涼味に苦熱を拂ふを得たるが、是れ實に下ノ關出發以來最初の降雨であつた。五月五日當地の富豪某來船、親

彼南發古倫母へ

王竝に妃及東郷、乃木兩大將に對し、此地方特異の儀禮に依りて、ブンガー・モローと稱する花を以て作りたる花環を獻じた。同人は郵船會社の取引人にして、今回豫て崇敬せる親王御一行の同地寄港を歓迎するの意に於て、夙に之を用意して居つたものであつた。船は午前十一時五十分拔錨古倫母に向つた。

炎威酷烈

五月六日船はスマトラの北端を廻り、正西の鍼路を採つてベンガル灣に入つた。赤道を距つる事僅に數度、炎威酷烈にして乗客何れも苦熱に惱みしが、彼南出發以來甲板に帆布製大水槽を設けて船客の洗浴に任せ、暑熱を防ぐの一助とした。妃は五日頃より微恙の爲め船室に引籠られしが、八日全く御恢復ありて食堂に臨まるゝに至つた。此夜二等船客の催せる音樂會に對し、兩殿下より御下賜品があつた。五月九日午後五時古倫母築港内に繫留、當地總督サー・ヘンリー・コールマンは部下のフレザー少佐を遣はして奉迎の敬意を表し、且カンデー(釋尊の齒を藏する寺ありを以て有名なる場所)行汽車の準備成れるを告げた。然るに曩に妃の輕症に罹らるるありて、其御健康未だ充分ならざるに、暑熱の地に於て數時間の汽車旅行を敢てせらるゝは、大切なる使命を帯びて御渡航の往路に在らるゝ此際然るべか

古倫母入港

カンデー遊覽御中止

らずとて、之を見合はさるゝことゝなり、厚く總督の好意を謝し、同地遊覽中止の旨を傳へられた。

市中御見物

五月十日親王及妃は式部長官以下の隨員を從へて御上陸、四輛の馬車に分乘して、先づ釋尊の爪を藏すと傳へらるゝケラニヤの古刹を觀られ、バゴダ(塔)及市外の博物館を巡覽し、少憩の後、市中の店鋪二三を觀て午後六時歸船せられ、東郷、乃木兩大將及谷口、吉田兩中佐は、此日早朝よりカンデーに赴き、午後六時歸船した。翌十一日は氣温八十七度、海水温度八十九度に達し、朝來暑氣甚しかりしも、親王及妃は終日船に留まれ、偶歐洲より歸航の途次入港したる常陸丸船長山脇武夫外一名の伺候を受け、午後五時三十分賀茂丸は常陸丸乗員の登舷禮式に送られて蘇士に向け古倫母を出港した。

古倫母發蘇士へ

船はアラビア海を西に航し、十七日夜半亞弗利加の東端グアードフイ角の北方を過ぎて亞典灣に入り、十八日黎明亞典港の沖合に於て宮崎丸の反航するに逢ひ、正午過ベリム島を航過して紅海に入った。此間概ね南西の季節風輕吹して、甲板の暑を拂ひたるも、時に又煤煙直騰して船上微風だになく、蒸熱さな

紅海に入る

兩殿下御壯健

がら釜中に在るが如く、炎暑耐へ難き日もあつた。斯る苦熱の日に於ても親王及妃は益御元氣よく、他の船客が暑さに喘ぐ間にも、船員などを相手にデッキ、ゴルフ等の運動に打ち興せらるゝを常とした。賀茂丸の二等船客中に英國漫遊の途に在る講談師桃川燕林あり、一日食堂に於て義士銘々傳の一節を演じて親王及妃の台聞に達し、隨員竝に一等船客一同陪聽を許され、無聊なる航海中尠からぬ興を催ほされた。船紅海に入りて後は炎暑益強く、赫陽波を射て熱風甲板を掠め、船客多くは眠さへ成らず、流石に世界最熱海の名に負かざりしが、二十二日蘇士灣に入るに及んで冷涼俄に加はり、乗客中早くも黒衣に更むる者さへあつた。

船上の講談

紅海の苦熱

蘇士運河航過ポイントセッド入港

同日午後三時四十分蘇士泊地に投錨、六時三十分水先案内者の來船を待つて運河に入り、船首に探照燈を點じて水路を照しつゝ、運河全長八十七哩を無事夜中に航過して、二十三日午前八時三十分ポイントセッド著、運河會社前に繫留した。是より先き帝國政府は、英國皇帝戴冠式觀艦式に參列せしむる爲め、海軍中將島村速雄指揮の下に、軍艦鞍馬、利根二隻を以て遣英艦隊を編成し、同

艦隊は四月一日日本邦を出發したるが、目下ポートセツド滯泊中なる旨 昨日蘇士に於て傳へられしも、此朝既に英國に向け出港したるが爲め、遂に之と相會ふの機を失つた。年々多額の煙草を我國に向け輸出しつゝある此地の煙草販賣會社ファイラバンチの支配人來船敬意を表し、少女をして花環を捧呈せしめ、又陸上に於ては店頭を裝飾し、街路を横ぎりて親王及妃御寄港奉迎の意を表する文字を列ね、且東郷、乃木兩大將の肖像を畫きたる大看板を掲げなどして、大に歡迎の誠意を披瀝せしも、碇泊時間短き等の關係より、兩殿下は上陸を見合はされた。

此日午後一時四十分馬耳塞に向ひ出港、氣温七十四度に下り、船客何れも黒衣に更めた。上海出港以來海上常に平穩なりしが、ポートセツド出港の翌二十四日午後より、北西の強風起つて波浪高く、船甚だしく動搖し、乗客多く船暈に惱まされて、食卓に就く者少く、妃も亦之に苦まれしも、二十六日朝に至り漸次靜穩となり、食堂も亦賑ふに至つた。二十七日午前四時伊太利の南西端とシシリイ島の間なるメツシナ海峽に入り、地中海の燈臺と稱せらるゝエトナ火

ポートセツド
發馬耳塞

冷氣俄に加
はる

メツシナ海
峽

山の噴煙を望見せしが、此地方には四年前に大地震ありて災害を逞うし、災後新築したりと思はるゝ家屋の海岸に點々たる光景、轉た當時の慘狀を偲ばしむるものがあつた。

此日は對露戰爭に於て東郷大將の率ゐたる帝國聯合艦隊が、露國バルチック艦隊を日本海に擊滅したる記念日である。當時親王は千代田艦長として勇戦せられ、隨行の谷口中佐、清河少佐亦何れも參戰の士である。賀茂丸にては晚餐の際祝賀の宴を張り、東郷大將先づ杯を舉げて、親王及妃の御健康を奉祝すれば、親王及妃は同大將の爲に祝盃を舉げられ、船客一同之に和した。食後外人船客中の年長者デー氏、東郷大將に祝辭を呈し、外人一同之に和して萬歳を唱へ、隨員一同は別に祝賀の宴を設け、兩大將の揮毫などありて、歡聲深更に至る迄絶えなかつた。回顧すれば、烏兎忽々日本海々戦も早や六年の昔となつた。今日浪靜かなる地中海上の一船客として、國運を一戦に賭したる當年を追想し、親王を始め東郷大將以下海軍々人の感慨は蓋し切なるものがあつたであらう。

二十八日午前九時三十分コルシカ、サルデニア兩島間のボニファシオ海峽を

日本海々戦
記念日祝賀

地久節奉祝

通過し、ナポレオン出生の地コルシカ島を右に見つゝ、船は刻々馬耳塞へと急いだ。今日は皇后の御誕辰に當り、親王及妃は曩にボートセツドより祝電を發し置かれしが、晚餐時船長立つて祝辭を述べれば、全員之に和して祝盃を舉げ、親王及妃よりは一等船客一同に三鞭酒を下賜せられた。食後隨員一同再び食堂に會して、第二次祝賀會を開き、國母陛下の御誕辰祝賀に加へて、日本海々戰捷確定當日の追懷談に歡語湧くが如く、夜の更くるを知らざる程であつた。

馬耳塞入港

明くれば五月二十九日午前四時、賀茂丸は馬耳塞港外に達し水先案内者を乗せ、六時四十分内港埠頭に繫留した。巴里よりは大使館附武官海軍大佐松村純一、參事官安達峰一郎夫人及書記官津田五郎等、倫敦よりは海軍中佐齋藤七五郎及根岸郵船會社支店長等御迎への爲め來港し、其他當地在留主要邦人等上船伺候した。安達參事官夫人は戴冠式用服裝に關し妃の御用に應ずる爲め、巴里より裁縫師マダム・ウレーズを伴ひ來り、齋藤中佐は加藤駐英大使及加藤大使館附武官の旨を承けて、親王及妃著英後の御行動竝に戴冠式に關する書類を持參したるが、清河御附武官は加藤大使と打合すべき要件を帶び、此夜齋藤中佐と

齋藤海軍中佐等倫敦より來迎

戸田式部長官等退船倫敦へ

共に倫敦に向け急行し、戸田式部長官及渡邊式部官も亦各用務を帶び、三十一日退船、陸路巴里を経て倫敦に向つた。親王及妃は當地に御上陸なく、東郷、乃木兩大將は谷口、吉田兩中佐と共に、松村大佐の案内にて市街、博物館及兵營等を視察巡覽した。

馬耳塞發倫敦へ

五月三十一日午後五時賀茂丸は倫敦に向ひ出港せしが、馬耳塞に於て多數の乗客退船し、且隨行員も亦減じたる爲め、船内稍寂寥を感ずるに至つた。六月一日午後十一時西班牙南東岸沖合にて伊豫丸の反航するに會し、二日夜地中海の西口ジブラルター海峡を過ぎ、午後十一時西班牙南端タリファ岬を航過し、爰に地中海を去つて大西洋に出でた。英國の提督ネルソンの武名と共に史上に不朽のトラファルガーの古戰場は夜の間に過ぎ、三日正午船は戰史に名高き海戰場セント・ヴィンセント岬を廻つて鍼路を北方に取つた。夜來汽船に會ふ事極めて頻繁にして、此處ぞ一目十艘の稱ある海上股賑の要路、西歐文化の盛を想見するに足るものがある。午後七時頃より天候漸く悪しく、逆風激浪、船首を襲ひ、怒濤時に甲板を越え、船客多く船暈に苦み、船室に籠居するに至つた。

ジブラルター

1
トラファルガー

一日十艘

ビスケー湾

テムス河
口に入る

倫敦下流チ
ルベリー投
錨

六月四日午後五時船は西班牙の北西端フィニスター岬の沖を航過してビスケー湾に入つた。名にし負ふ難海も今日は風和かく波靜かに、五日も亦海上平穩、終日海豚の群と追ひつ追はれつ、六日朝英吉利海峡に入り、英國南岸に沿うて東航、午後十一時四十分ドーバーを航過し、夜半過ぐる頃テムス河口に達した。此日午前親王及妃には、船長以下船員一同の長途の勞を犒つて金品を下賜せられ、東郷、乃木兩大將亦記念品を贈り、晚餐時には兩殿下より船客一同に三鞭酒を賜はり、船長は船客一同と共に盃を舉げて恭しく御安著を祝した。七日午前五時二十五分水先案内者乗船、テムス河を溯航して同四十五分チルベリーに投錨した。本來郵船會社の汽船は上流ドック内に入るを例とするも、今回は特に御一行上陸の便を圖り、此處に錨を卸したのである。

曩に馬耳塞より陸行倫敦に先著せる戸田式部長官、渡邊式部官及清河武官等歸船し、駐英大使加藤高明、海軍大佐加藤寛治、同井出謙治、陸軍騎兵大佐稻垣三郎及根岸郵船會社支店長等は前夜來倫敦より此地に來り泊し、賀茂丸投錨後、上船伺候、長途の御旅程恙なく御安著ありしを奉祝した。午前九時三十五

退船御上陸

倫敦セン
ト・バンク
ラス驛御著

市民驛頭に
群集す

倫敦發イ
ストボーン
へ

分親王及妃は隨員一同を從へて御上陸あり、特別列車に依りて十時二十三分チルベリー發、特に倫敦市内の設備良き停車場を選びたるため、汽車は迂路を採り十一時三十分セント・バンクラス停車場に著した。同驛には加藤大使夫人、大使館參事官山座圓次郎並に夫人、大使館員、英國駐在海陸軍將校其他在留主要銀行、會社員及嘗て本邦駐劄英國大使館附武官たり又今回接伴員の一人たる海軍少將ダングス・オブ・ダングス等奉迎した。兩殿下本日の入京は御微行なるも、戴冠式參列の爲めの御來英にして、且其隨員中には世界の欽仰する東郷、乃木兩名將の在るを以て、新聞記者等は御一行の行動に就き探聞を怠らず、本日の入京時刻亦新聞紙上に報せられあり、爲めに其到着を迎へ觀んとして驛頭に集まる市民鮮からず、著驛を特に當停車場に變更したるの徒爾ならざるを感せしめた。親王及妃は戸田式部長官以下を從へて直に大使館に入られ(東郷乃木兩大將及谷口吉田兩中佐は驛より直にハイドパーク・ホテルに投宿す)、少憩後午後五時二十分倫敦ヴィクトリア停車場發、六時五十分南方海岸地イーストボーン著、從來皇族御微行の慣例に倣ひ、三島伯爵並に同夫人の假名を以て、當分の間御

イーストボ
ーン御滞在

旅館と定められたる同地海岸のグランド・ホテルに入られた。

戴冠式參列の爲め公式に倫敦へ入都せらるゝまで、十日ばかりの間、親王及妃はイーストボーンの旅館に在りて、附近の勝地を訪れ、長途航海の疲勞を醫せらるゝ傍、諸準備の爲め、時々倫敦へ微行せらるゝこともあつた。六月九日親王及妃は清河武官を従へ、自動車にてイーストボーンの西南約三哩なるビーチーヘッドに赴き、海岸諸所の風光を觀賞して歸館せられ、翌十日は午前八時清河武官、宮岡御用取扱等を従へて旅館を出て、自動車にて途上の風景を眺めつゝ、午前十一時倫敦著、戸田式部長官等の宿泊せる旅館クイン・アンス・メンションに入られた。

倫敦へ御微
行

旅館クイ
ン・アンス・
メンション

同旅館は倫敦に於ける大旅館と稱するに足らざるも、上流紳士等の長期滞在の場合等に宿泊する上品なる旅館にして、前年博恭王も此處に滞在せられたることあり。今回兩殿下公式御入京までには、御用の爲め屢倫敦に出でらるゝことあるべきに依り、御微行滞在用として、此處に室を準備し置かるゝこととなつた。

旅館にて少憩後親王は清河武官を従へ、リゼント街の店舗二三を巡覽せられ、妃は加藤大使夫人及宮岡御用取扱を従へ、服装御用の爲め裁縫師へ赴かれ、又

附近御觀光

倫敦へ御用
達し

晚餐後は兩殿下御同道にて、戸田式部長官以下を従へ、マダム・タツソ一の蠟人形陳列場を觀覽せられた。翌十一日は午前旅館に於て倫敦滞在中の東郷、乃木兩大將の伺候を受け、午後妃は少時大使館に赴かれ、午後五時二十分兩殿下御同道にて、渡邊式部官等を従へ、倫敦發イーストボーンに歸還せられた。六月十二日午前親王及妃は渡邊式部官を従へ、自動車にて英國南海岸の小倫敦と稱せらるゝ、ブライトンに遊び、海岸市街等を巡覽して正午歸館せられ、翌十三日午前も亦兩殿下御同道にて清河武官を従へ、東方海岸の勝區觀覽の爲め、自動車を驅つてベックスヒル、セント・レオナードズを経て、ノルマン侵入の古戰場へスチングスに赴き、當時ウイリヤムの築造せりと稱へらるゝ古城趾などを巡覽の後、正午前歸館せられた。六月十四日午後親王及妃は、清河、宮岡等の隨行員を従へて倫敦に赴かれ、所定の旅館に宿泊、翌十五日妃は宮岡御用取扱を従へ、少時間市中の店舗を縱覽せられ、夜は兩殿下共に大使館に於ける晚餐に臨まれ、十六日午後はリゼント公園動物園を觀覽あり、十七日午前イーストボーンに歸還せられた。兩三日來戴冠式參列の各國皇族並に代表者の著英する者漸

く多く、我親王及妃にも明後十九日を以て公式に倫敦へ入京せらるゝことゝなり、十八日は之が準備等の爲め、兩殿下共にイーストポーン旅館に在留せられ、東郷、乃木兩大將、戸田式部長官一行の外、隨員全部イーストポーンに歸還し、倫敦入京の準備に忙がしかつた。
英國宮内省より發布したる戴冠式竝に之に附帶せる重要行事豫定の大要は左の通りである。

戴冠式竝に
附帶重要行
事豫定

六月十九日(月曜日)

各國元首代表者著京

バツキナム王宮に於て

皇 室 正 餐

隨 行 員 の 引 見 (燕尾服)

六月二十日(火曜日)

特派大使及代表者引見

バツキナム王宮に於て國催正餐 (正服)

アルバート・ホールに於てシェークスピア舞蹈會

六月二十一日(水曜日)

海外領地總督引見

コンノート殿下主催セント・ヂェームス宮に於て外國元首代表者招待晚餐會

六月二十二日(木曜日)

戴冠式舉行 (正服)

バツキナム王宮に於て英國皇室晚餐會

六月二十三日(金曜日)

倫敦行幸

外務省に於て外務大臣グレイ主催晚餐會 (兩陛下臨御) (燕尾服)

六月二十四日(土曜日)

ポーツマスに於て觀艦式、外賓倫敦出發 (正服)

兩陛下御召艦御泊、外賓倫敦に歸還

六月二十五日(日曜日)

諸外國代表者ウインザー王宮觀覽

駐在外國大公使各個主催の自國代表者招待晚餐會

六月二十六日(月曜日)

兩陛下倫敦に還御

コベント・ガーデン、ロイヤル・オペラに於て勅命演劇(正服)

六月二十七日(火曜日)

バツキナム王宮に於て園遊會

ヘーマーケット劇場に於て勅命演劇(正服)

六月二十八日(水曜日)

諸外國代表者退京

尙ほ戴冠式參列の爲め、皇族若くは代表者を特派したる國は左の通りである。

皇族を差遣したる國

日本、獨逸、露西亞、奧太利、伊太利、白耳義、和蘭、丁抹、土耳其、希臘、

皇族若くは
代表差遣國

支那、ブルガリヤ、セルギヤ、ルーマニヤ、西班牙、瑞典、彼斯、暹羅、埃及、
モンテネグロ、獨逸聯邦諸國、モナコ等。

特派使節を差遣したる國

北米合衆國、佛蘭西、墨西哥、パナマ、ペルー、バラグエイ、サルゾドア、ベ
ネジユイラ、ザンジバル、ルクゼンブルグ、グワテマラ、ハイチ、ホンデユラ
ス、エシオビヤ、キユーバ等。

倫敦駐劄使節にして參列したる國

アルゼンチン、ボリギヤ、ブラジル、チリ、コロンビヤ、瑞西、ウルグアイ、
サンマリノ等。

兩殿下公式
に倫敦御入
京

六月十九日、今日は天皇御名代として愈倫敦御入都の日である。夜來の少雨も霽れて、初夏の綠翠風爽かである。倫敦に滞留せる東郷、乃木兩大將及戸田式部長官の一行は、午前十時四十五分汽車にてイーストボーン御旅館に參集した。親王はフロツクコートにシルクハット、妃はコート・エンド・スカートを召され(隨行員の服装は兩殿下に倣ふ)、東郷大將以下の隨員を従へ、午後三時五十分旅館を出で、停車場に赴かれた。加藤大使は英國宮廷の任命せる接伴員と共に、停車場にて御來著を迎へ、大使より左記接伴員を兩殿下に御紹介した。

コールブルック卿(宮内省)
 海軍少將チャールス・ダングラス・オブ・ダングラス(海軍省)
 陸軍少將ゼー・エー・エル・ハルデー(陸軍省)
 陸軍大尉シ・アール・ウッドロフ(陸軍省)

(接伴員は文武官共にフロツクコート、シルクハット着用)

兩殿下は隨行員接伴員と共に午後三時十五分、宮廷にて準備せる臨時特別列車にてイーストボーン發、午後四時五十分ヴィクトリヤ停車場著、アーサー・オブ・コンノート親王の御出迎
 車にてイーストボーン發、午後四時五十分ヴィクトリヤ停車場著、アーサー・オブ・コンノート親王の御出迎を受けられ、在留邦人の盛なる奉迎の裏に、同親王と馬車に同乗、英國宮廷にて用意せる御旅館シーフォード・ハウスに向はれ、隨行員及接伴員は各馬車に分乗して之に隨從した。今回諸外國代表者の倫敦入京の際には略服(プレーンクローズ)を望む旨、豫て英國政府より交渉ありしが、之に基き儀仗兵の堵列、馬車の警衛等の儀式は一切省略せられた。コンノート親王は兩殿下を旅館に案内せられたる後直に退出せられ、尋で侍從武官ボンソンビ―は皇帝の命を受けて參館し、親王にヴィクトリヤ大綬章を捧呈した。今回の

アーサー・オブ・コンノート親王の御出迎

ヴィクトリヤ大綬章を受けらる

戴冠式參列諸員に對し勳章授與の件に就ては、曩に英國外務省より加藤大使に宛て

英國皇帝は現に英國の勳章を有せざる外國皇族に限り勳章を贈らせらるゝも隨員に對しては授勳の事なきを以て、派遣諸外國よりも亦英國臣民に對して授勳の事なきを望まるゝ旨御沙汰ありたり、

との照會ありたるが、之に依り親王にのみ勳章を贈られたのである。隨行員の旅館到着後、渡邊式部官は接伴員コールブルック卿に伴はれてバツキナム王宮に參内し、我皇后陛下より英國皇后への御贈品を捧呈した。英國皇后には殊の外喜悅せられ、製作者の姓名など御下問あり、即夜祕書官をして接伴員を通じて依仁親王妃殿下に厚く謝意を致すべき旨御沙汰があつた。午後八時十五分よりバツキナム王宮に於ける晚餐會に列する爲め、親王は燕尾服に英國勳章及我大勳位副章を佩用、妃はデコレターに寶冠章を佩ばれ、コールブルック卿の陪乘にて參内せられた。尋で九時十分より同王宮に於て、諸外國代表者隨行員の引見式あり、東郷大將以下我隨行員(兩殿下の服裝に倣ふ)は接伴員と共に參内、皇

我皇后より英國皇后への御贈品

バツキナム王宮に於ける皇室正餐

帝、皇后に拜謁して一人づゝ握手を賜はり、此間親王は兩陛下の左側に立たれた。

右引見式終りて、兩殿下以下一行は王宮を退き、午後十一時より更に接待員と共に、スザーランド公爵夫人主催の大夜會に參列せられ、外國代表者及隨行員は殆んど全部參集し、邸内實に立錫の餘地なき大盛會であつた。食堂に於て親王はヘッセ大公妃、妃は土耳其皇太子と共に食卓に就かれ、午前一時隨行員接待員と共に歸館せられた。御旅館内に於ける配室の都合上、谷口、吉田兩中佐はハイドパークホテルに、渡邊式部官及岩波侍醫補はランブラントホテルに分宿し、自餘の隨行員及コールブルック卿以外の接待員三名は、全部御旅館内に宿泊することゝなつた。

御旅館シー
フォード・
ハウス

御旅館シーフォード・ハウスは、英國の舊家ホワード・デワルデン男爵の所有家屋にして、バツキナム宮殿を距ること僅に數町に過ぎず、附近には貴紳多く居住し、倫敦市内第一流の地域に在り。規模宏大と稱する能はざるも、結構壯麗にして居室多く、殊に正面玄關に在る大階段の如きは、全部綠色大理石より成り、宛然小宮殿の觀を呈して居る。接待員の語る處に依れば、當館はバツキナム王宮附近に於て選ばれた



諸外國代表
の相互訪問

る外國皇族用邸としては、最大なるものにして、多數の隨行員を從へたる日本皇族の爲めに、英國宮内省が特に意を用ゐて選定したるものなりとのことであつた。

六月二十日は諸外國代表者の相互訪問日である。朝來外國代表者にして親王及妃を御旅館に訪問する者頗る多く、親王(服装フロツクコート)も亦午前十一時より接待員ウッドロフ大尉を從へ、外國皇族を訪問せられた。今回戴冠式參列の外國代表者は數十名の多きに達せるが爲め、接待員の間に於て、英國宮廷の發布に係る戴冠式序次表中、自己よりも先位に在る者に對しては親ら訪問し、後位に在る者に對しては代理者訪問の事に内約を定め、依仁親王は表中第七位に在らせらるゝを以て、獨逸、土耳其、奧太利、伊太利、露西亞、西班牙の皇族のみを訪問され、他は接待員代つて訪問した。午後一時三十分兩殿下は旅館に於て隨員一同を午餐に召され、午後三時親王(服装フロツクコート)はコールブルック卿を從へ、バツキナム王宮に參内、我天皇より御贈進の大勳位菊花章頸飾を英國皇帝に捧呈せられた。

大勳位菊花
章頸飾を英
國皇帝に捧
呈

天皇より御贈進の勳章捧呈に先ち、昨日皇后よりの御贈品を捧呈したるは、英皇室の都合に依れるものである。

バツキナム
王宮に於け
る國催正餐

シエークス
ビヤ・ポー
ル

此夜午後八時十五分よりバツキナム王宮に於て大晚餐會あり、兩殿下の外東郷、乃木兩大將、戸田式部長官、宮岡御用取扱及加藤大使、同夫人亦招待を受けて參内した。親王は海軍少將の正服に英國勳章の大綬及我大勳位副章を佩用、妃はデコルターに寶冠章を佩ばれ、隨行員は夫々制規の文武官正服を著用した。晚餐の席は宮中ボールルームとサツパールームを以て之に充て、皇帝はボールルームに、皇后はサツパールームに臨御あり、親王はモンテネグロの内親王と同伴にてサツパールームの卓に、妃は西班牙皇族と同伴にてボールルーム卓に着席せられ、東郷、乃木大將等亦夫々貴婦人同伴、指定の食卓に著いた。壯麗華美なる宮殿に、金裝玉衣の電燭に輝く美しさ、正に錦霞搖曳して百花繚亂たるが如く、眩目躍心、轉た英國の盛大と英皇室の福榮とを感せしめた。餐後、皇帝皇后は各皇族と共に兩室食卓間を巡回して、參列諸員に會釋せられ、款待に力められた。晚餐散會後、兩殿下は更にアルバート・ホールに於けるシエークスビヤ・ポールに臨まれ、隨行員は旅館に歸つた。此夜宮中晚餐に召されざる隨行員は、接伴員の案内にてヒツポドロームの觀劇に赴いた。

セント・ゼ
ームス宮に
於ける公式
晚餐會

戴冠式日

兩殿下バツ
キナム王宮
へ參内

六月二十一日親王及妃はハルデー少將の陪乘にて、午後一時三十分クラレンス・ハウスに到り、コンノート殿下(大宮)と午餐を共にせられ、八時三十分よりはコンノート公及妃兩殿下主催の下に、セント・ゼームス宮に於て開かれたる戴冠式參列の外國皇族招待公式晚餐會に臨まれた。此日東郷、乃木兩大將はハミルトン大將より晚餐の招待を受け、其他の隨行員は英皇室の接待に依り、ダングラス少將の案内にて、アルハンブラ劇場に到り、帝室棧敷に於て觀劇した。六月二十二日は愈戴冠式當日である。此朝、日出時に至るや、ハイドパークに於ては二十一發、倫敦塔に於ては四十一發の禮砲を發して、戴冠式日を報じ、倫敦全市は忽ち歡祝の都と化した。親王及妃は戴冠式鹵簿に加はらるゝ爲め、コールブルック卿御案内、午前九時バツキナム王宮に參内せられた。兩殿下此日の服装は、

親王 海軍少將の正服に英國勳章の大綬及我大勳位副章

妃 デコルター(トレーン)を附せる(勳一等寶冠章)

東郷大將以下の隨行員高等官のみは兩殿下に倣うて服装を整へ、接伴員に伴は

れて式場たるウエストミンスター寺院に先著し、東郷大將及宮岡御用取扱は兩殿下に扈從して院内序列に入るべきを以て、寺院西玄關に於て鹵簿の御著を待ち、其他の隨行員は指定の陪覽席に就いた。

英皇戴冠式の來歴

戴冠式は英國々王が宗教上の儀式に據り王冠を戴き、之に依り名實共に國王と成る儀制にして、往昔は國王崩じて後、新王戴冠式を終る迄は、王位を空位の儘とし、戴冠式後新王治世を始めたりと謂ふ。然るに後エドワード一世(今次の戴冠式より約六百四十年前)選ばれて王となるや、其日より直に政を執り、又エドワード二世(約六百年前)は先王崩御の翌日より王政を行ひ、茲に戴冠式前に王政を執る慣例を生じ爾來今日に及んだのである。而して又往時の戴冠式に在りては、鹵簿倫敦塔を發しウエストミンスター宮殿を経てウエストミンスター寺院に到り、擧式するを例としたるも、近世に至り、王宮より發駕する事となつた。従つて今回の戴冠式に於ても、バツキナム王宮を發し、ウエストミンスター寺院にて擧式、式後再びバツキナム王宮に歸還されたのであつた。

當日の鹵簿

此日の鹵簿は三部より成り、第一部を外國皇族及米佛二國使節、第二部を英國皇族、第三部を皇帝皇后の鹵簿とした。バツキナム王宮よりウエストミンスター寺院まで直路に依る時は、距離僅に一哩に滿たざるを以て、此日は行を盛んにする爲、セントヂェームス公園を半周し、大路を迂回して鹵簿肅々式場に

依仁親王及同妃

進むことに定められた。午前九時三十分第一部鹵簿王宮を發す、其の序列は、先驅及儀仗隊の次に、戴冠式序次表の逆順を以て參列各國皇、王族及米佛兩國代表者等、第二十四より第十一に至る儀裝馬車に分乘し、親王及妃は其の第十三儀裝馬車(四頭立)に、希臘の皇太子及妃と共に座乘、我帝國竝に皇室を代表して威儀堂々進まれた。續いて午前十時第二部鹵簿出發、第十より第六に至る五輛の儀裝馬車に、英國皇太子以下英國皇族分乘して進行、更に三十分を隔て、第三部鹵簿愈バツキナム王宮發、此時、日出時と同様にハイドパーク及倫敦塔の二箇所に於て、夫々二十一發及四十一發の禮砲を發射した。

皇帝及皇后

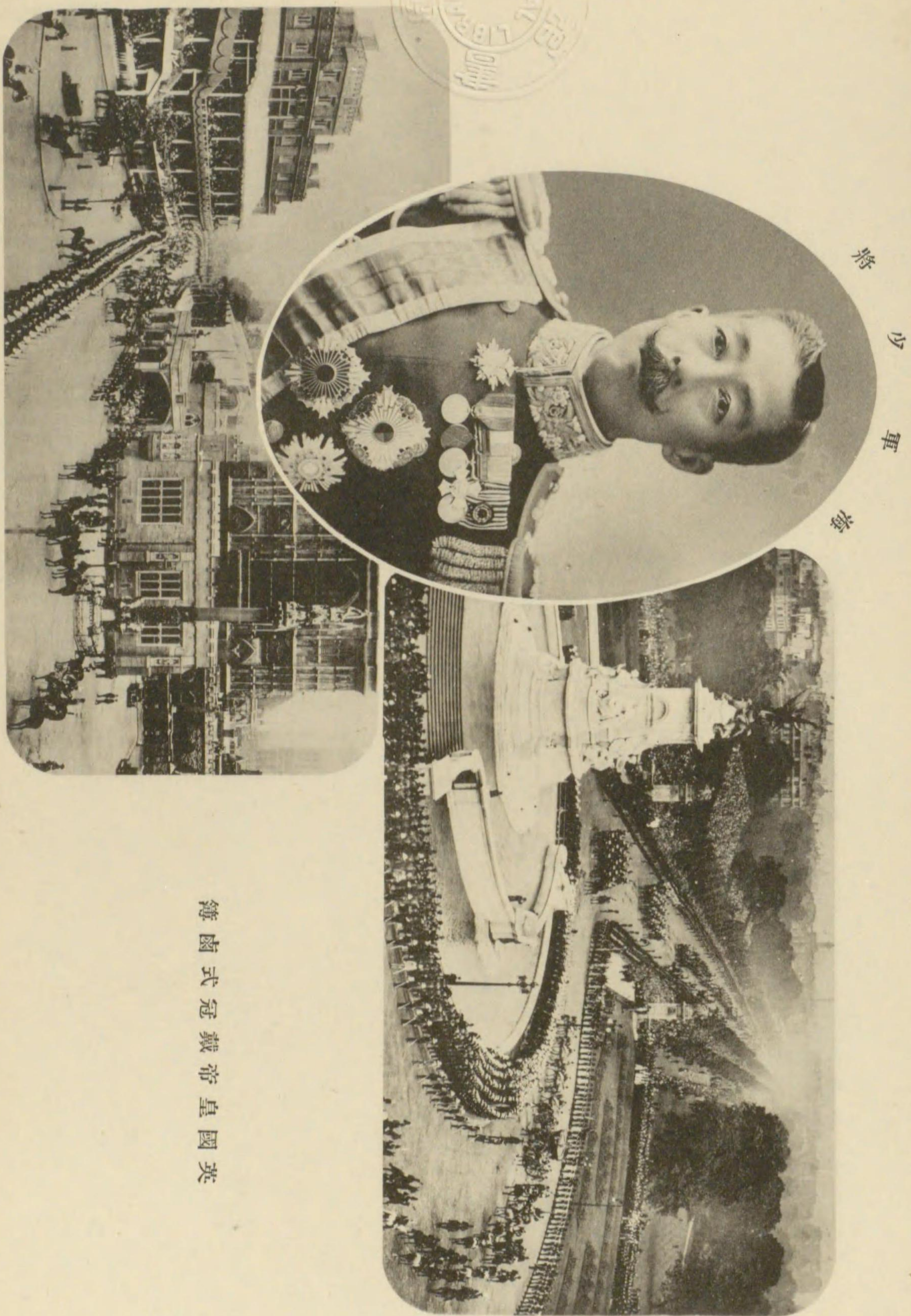
第三部鹵簿の先頭には、兩陛下側近の侍臣等の分乗せる第五より第二に至る儀裝馬車進み、之に續きて皇帝の諸幕僚、陸軍元帥、侍從武官等騎馬にて前驅し、次に陸海軍各部隊の代表等威儀を正して進み、鹵簿の中央、儀仗騎兵の一團に前後を護られて、金色燦爛たる八頭立の玉車に打乗られたる式服の皇帝、皇后はコンノート公父子以下五六の皇族竝に近侍の武官等を隨へ、玉車の直後には皇帝旗を翻しつゝ、肅々として進まる、光景、誠に壯嚴を極めた。

院内序列と
兩殿下

斯くて、第一部鹵簿ウエストミンスター寺院西立關に著するや、外國皇族及特派大使等は宮内官の先導に依り、戴冠式序次表に従ひ院内序列を制り、聖樂壇所定の位置に就いた。兩殿下寺院の外陣を進まるゝ時、妃は親王の左に並び、宮岡御用取扱は妃の後方に在りてトレーンの長裳を捧持し、東郷大將は其右に並びて親王の後方に隨ひ、式後退出の際も亦内陣より西立關まで同様扈從した。尋で第二部鹵簿西立關に著すれば、英國皇族は第一部同様、序列を制つて所定の位置に著席あり。最後に皇帝、皇后の玉車著御あるや、禮砲の發射發御の時と同じく、大國務官を始め、式典用寶器捧持の貴族、聖書竝に聖餐具捧持の僧正等西立關に奉迎し、兩陛下は玉車を降りて院内に進まれた。

皇帝皇后の
院内御列

皇后はローヤル・ローブを著け、右にオックスフォルドの僧正、左にピーターボローの僧正側侍し、七人の貴夫人御裳を捧げ、兩側に各五人の衛士陪從し、皇帝は深紅のローヤル・ローブに冠を戴き、ガーターの飾章を佩び、右にダークム、左にバス・エンド・ウエルスの僧正側侍し、後には八人の貴族を、左右には各十人の衛士を従へ、左に陸軍將校皇帝旗を捧げ、皇帝、皇后各別に序列を制り



英 國 帝 皇 戴 冠 式 鹵 簿



承認式

院内御列嚴かに、聖樂隊の聖歌の裡に、外陣を経て玉座段に進まれた。皇帝、皇后の著席後、式典は順を追うて執行せられしが、其儀制頗る古典的にして莊重を極めた。式は先づ承認式より始まり、カンタベリー大僧正は皇帝を參列諸員に引合せ、皇帝は起立して四方の諸員に對顔すれば、諸員一齊に「神はデヨーデ五世を祐く」と唱へ、臣從奉仕を誓つて皇帝の君臨を承諾した。尋で連禱式、聖餐式、説教などの宗教的諸式ありたる後、宣誓の式となり、カンタベリー大僧正は皇帝の前に進み、

宣誓式

陛下ハ茲ニ宣誓式ヲ行ハル、ヤ。
と問へば、皇帝は
朕之ヲ爲サン。

と答へ、更に皇帝と大僧正との間に左の問答行はれ、皇帝は式事の文書を手にして一々之に答へられた。

宣誓式に於ける僧正と皇帝との問答

大僧正

陛下ハ、此大不列顛及愛蘭及其屬領ノ人民ヲ統治スルニ當リ、國會ノ承認セル各法律及之ニ伴フ各種ノ律令、慣習ヲ遵奉スルコトヲ堅ク誓約シ給フカ。

皇帝

朕ハ之ヲ爲スコトヲ堅ク約ス。

大僧正

陛下ハ、其権力ヲ法令司法ノ事ニ用フルニ當リ、仁慈ヲ以テ之ヲ爲サルベキヤ。

皇帝

朕之ヲ爲サン。

大僧正

陛下ハ、全力ヲ盡シテ神ノ法律、經典ノ主旨及國法ニ依リテ存立スル新教々義ノ

何レヲモ維持セラルベキヤ、又國法ニ據リテ英國ニ設立セラル、國教會ノ地位、

教義、禮拜、紀律及其教務ヲ神聖ニ維持シ保護セラルベキヤ、又英國ノ僧正、教

職及彼等ノ管掌スル教會ニ其特權ノ保持ヲ保證セラルベキヤ。

皇帝

朕總テ之ヲ爲スヲ約ス。

斯くて皇帝は席を起ちて祭壇に進み、大僧正の差出す聖書に右手を置き、

朕ノ今茲ニ約セシ所ハ朕ハ之ヲ遂行シ之ヲ保證セントス。

神明ノ加護ヲ冀フ。

との誓言を爲して聖書に接吻し、親らペンを執つて宣誓書に署名せられた。

宣誓の式終るや、聖樂隊は聖歌を唱へ、大僧正は祈禱を捧げ、皇帝は此時ま

塗油式

で著けたる深紅色の外袍と冠とを脱し、隨員諸官を従へて祭壇の前に進み、金色の布を以て覆はれたるセント・エドワードの即位式椅子に著席せられ、大僧正に依つて頭頂、胸部竝に兩手掌に塗油の式が行はれた。次で皇帝は更に式用特殊の服を著せられ、椅子より立つて大僧正の捧ぐる寶劍を受け、帶劍復席あれば、大僧正は更に、

捧劍式

此劍ヲ以テ正義ヲ行ヒ、不義不正ヲ制シ、神ノ教會ヲ保護シ、鰥寡孤獨ヲ擁護シ、廢レタルモノヲ恢興シ、恢興セルモノヲ維持シ、善美ノ秩序ヲ鞏固ナラシメヨ、帝王ノ德茲ニ完キヲ得ン云々。

著衣式
著飾式

の訓告を爲して奉劍式を終り、尋いで著衣式、著飾式あり、皇帝はウエストミンスター管長等の進むる戴冠式禮袍を著し、大僧正の捧ぐる紅寶石指輪を右手第四指に嵌め、王權及正義の表章たる十字笏を右手に、平等及慈悲の象徴たる鳩章笏を左手に持ち、爰に愈戴冠の式を行はるゝことゝなつた。廣き院内寂として聲なく、森として響なく、唯微かに錦裳綾衣の小擦れを聞くばかり、正に森嚴靜肅其ものである。やがてカンタベリー大僧正は祭壇の前に立ち、セント・

戴冠式

エドワード王冠を兩手に捧持し、

神ヨ、誠實ノ冠タル神ヨ、願クハ神ノ僕ニシテ、又我等ノ王タルデヨーデノ上ニ祝福ヲ垂レ給ヘ、今茲ニ彼ノ頭上ニ高貴ナル黄金ノ冠ヲ戴カシムルニ方リ、神ノ無量ノ榮光ヲ以テ彼ノ心ヲ盛ナラシメ給ヘ、而シテ我等ノ主、長ヘノ王イエスキリストノ惠ニ依リテ一切ノ王徳ヲ冠セシメ給ヘ。

と唱へ、ヨーク大僧正及諸他の僧正と共に祭壇より來りて、王冠を皇帝の頭上に戴かせた。參列貴族は此時迄手にしたる各自の冠を戴き、參列諸員は一齊に歡呼してゴッド・セーブ・ゼ・キングを唱へ、同時に喇叭を吹き、太鼓を鳴らし、ハイドパーク及ウインザーにては各四十一發、倫敦塔にては六十二發の禮砲を發し、祝聲は全英國に轟いた。參列諸員の歡呼止むや、大僧正は進みて、

神ハ榮光ト正義ノ冠ヲ戴カシメ給ヘリ、確固タル信仰ト諸多ノ善行ヲ以テ、永久ニ此王國ヲ統治セラレヨ。

と宣し、聖樂隊は更に「神の旨に依りて王道を進め」の聖歌を唱へた。續い聖書捧呈式、祝禱式、登極式、臣事式等滞りなく行はれ、茲に皇帝の戴冠式を終り

皇后の塗油
式戴冠式等

て再び太鼓を鳴らし、喇叭を吹き、參列諸員は一齊にゴッド・セーブ・キングデヨーデを唱へた。

皇帝戴冠式に引き続き、皇后の塗油式、戴冠式、登極式行はれ、終つて莊嚴なる聖餐式あり、之を以て式全了はり、皇帝、皇后は一先づ院内セント・エドワード廟に入られ、皇帝は式服を脱して紫色天鵝絨の服を著け、クラウン・オブ・ステートと稱するデヨーデ皇帝専用の王冠に改め、右手に十字笏、左手に寶球を、皇后は皇后冠を戴き、右手に十字笏、左手に鳩章笏を持たれ、院内鹵簿を整へて西玄關より玉車に乗り、午後二時、第三部、第二部、第一部の鹵簿順序を以てウエストミンスター寺院を發し、ベルメル、ピカデイリー等の諸街路を廻巡して午後二時五十分バツキナム宮殿に還御せられた。

兩陛下鹵簿、寺院發御の時及王宮著御の時、往路同様の禮砲を放つた。式後、親王竝に妃は鹵簿に加はりて一旦王宮に歸還せられ、東郷大將以下の隨員は寺院より直に旅館に歸りしが、其歸途、沿道の群衆は、日露戰役の英雄として、東郷、乃木兩大將に對し歡呼喝采した。

バツキナム
宮殿還御

市民の東郷
乃木兩大將
歡呼

倫敦巡幸の
鹵簿拜觀

歡聲雷の如
く起る

六月二十三日は英國皇帝、皇后の倫敦巡幸日である。英國宮内省に於てはバツキナム王宮に近きコンステイチューション・ヒルに鹵簿拜觀の爲め棧敷を特設し、外國參列員の用に供したるを以て、親王竝に妃は接伴員及隨行員を従へ、午前九時四十分旅館を出て同棧敷に著かれた。午前十時三十分鹵簿の先頭は行進を起し、十一時一發の號砲と共に、金光燦たる大四輪の玉車は八頭の駿馬に曳かれ、服裝美々しき印度及英國近衛騎兵に前後を警衛されつゝ、蹄音緩やかに肅々宮門を出た。皇帝は陸軍元帥の正裝、皇后は薔薇色及淡青色の裝飾ある白衣に、青色駝鳥毛の飾ある白帽を召され、玉車に同乗せられた。鹵簿此日の編成は、陸海の軍隊を基幹とし、各國大公使館附陸軍武官亦騎乗して列中に加はつた。道路坦々磨くが如く、鐵蹄塵を揚げず、重車音を立てず、列伍整々、鹵簿肅々、沿道の拜觀者堵を作りて、玉車の過ぐる處、歡聲雷の如く起つた。鹵簿はテムス河の兩岸、倫敦の重なる大道を巡幸すること正に二時間にして、午後一時三十分王宮に還御せられしが、此日兩陛下の會釋は極めて丁寧にして、玉車コンステイチューション・ヒルに於ける外國皇族席に近づきたる時の

皇室と國民
との親密

兩殿下馬匹
展覽會御巡
覽

外務大臣官
邸の晩餐會

東郷乃木兩
大將の榮譽

如きは、諸員の敬禮に對し、兩陛下は車上に起立して答禮せられ、又巡幸中主要の地區にては、車駕を止めて市民より捧呈する頌辭に對し、車上より勅語を賜はりたるなど、皇室と國民との親密なること誠に歎美の至りであつた。然れば翌日の倫敦新聞は、筆を揃へて兩陛下の聖徳を稱揚した。

親王竝に妃は鹵簿コンステイチューション・ヒル通過後直に歸館せられ、午後二時よりコールブルック卿及ハルデー少將の案内にて、乃木大將以下の隨行員を従へ、當時開催中なりしオリンピック馬匹展覽會に赴き、皇族用棧敷に於て各種の馬匹及馬術の演技等を觀覽せらるゝこと約二時間にして歸館せられ、更に午後八時十五分より兩殿下は東郷、乃木兩大將を従へ、外務大臣官邸に於ける同大臣主催の晩餐會に列席せられた。服裝十九日王宮晩餐の時に同じ。此晩餐會には皇帝、皇后も臨御せられ、參會者は戴冠式參列の外國皇族及特派大使のみに限られたるも、特に我國に限り、隨行員たる東郷、乃木兩大將も案内を受けて參會したるは、獨り兩大將の光榮のみならず、在留邦人等の最も欣快とするところであつた。此夜親王はヘッセ大公妃を導きて、外務大臣と卓を同うせ

られ、妃は土耳其皇太子に導かれ、英國皇帝の左側に著席せられ、東郷、乃木
兩大將は夫々別卓に著いた。又外務大臣の晚餐に招待を受けざりし隨行員は、
ウッドロフ接伴員に案内せられ、ライリック劇場の觀劇に赴いた。

觀艦式日

六月二十四日、ポーツマス軍港の沖合、スピットヘッドに於ける大觀艦式陪
觀の爲め、親王(服裝正服並に妃(服裝モーニングドレス)は諸外國皇族等と共に、
午前十時三十分ヱイクトリヤ停車場發式場に向はれ、隨行員は諸外國隨行員と
共に午前八時十五分先發した。參列員の陪觀は其資格に依りて乘艦を異にし、
親王並に妃は 御召艦ヱイクトリヤ・アンド・アルバート
東郷大將、谷口中佐は 供奉艦エンチャンテレス
乃木大將以下隨行員は 陪觀船プラツシイ
に指定せられたるが、外國人にして供奉艦に乗艦を許されたるは、東郷大將、
谷口中佐のみであつた。

觀艦式場はスピットヘッドの海面に於て、長さ約六哩、幅約二哩に互り、參
列艦船は英本國附近に在る英國艦艇、戰艦三十二隻、裝甲巡洋艦二十五隻、其

參列艦艇百
八十五隻

我參列艦鞍
馬、利根

參列外國軍
艦

他の小艦二十一隻、驅逐艦、水雷艇、潜水艇八十九隻、合計百六十七隻にして
此排水量百萬四百噸の外、諸外國派遣の參列軍艦十八隻、此排水量十六萬二千
餘噸を加へ、之を艦の大小種類等に依りて十列に配列し、ムーア海軍大將は戰
艦ロード・ネルソンを旗艦とし、觀艦式の總指揮に任じた。外國參列艦は各國何
れも一隻なるも、獨り我國のみは鞍馬、利根の二隻を派遣し、兩艦は六月十日
ポーツマスに到着して本日の式に參列し、旭日の軍艦旗は翻翻として列中に異
彩を放ち、又兩殿下の御乗船たりし賀茂丸も陪觀船として列中に加はつた。
參列外國軍艦は左の通りである(觀艦式配列順に據る)

國名	艦種	排水量(噸)
日本	巡洋艦(利根)	四一〇〇
亞爾然丁	同右	四六三〇
那威	海防艦	四一七〇
北米合衆國	戰艦	二〇三〇〇
伊太利	巡洋艦	九六八〇
埃匈國	戰艦	一四二三〇

獨逸	巡洋戰艦	一九一〇〇
露西亞	巡洋艦	一二二〇〇
日本	右(鞍馬)	一四六二〇
佛蘭西	戰艦	一八〇〇〇
智利	巡洋艦	四五〇〇
和蘭	同	四九二〇
清國	同	四三〇〇
土耳其	海防艦	三五九〇
西班牙	巡洋艦	三八三〇
瑞典	同	五七八〇
希臘	同	四七三〇
希臘	同	九六八〇

參列諸艦は正午滿艦飾を行ひ、皇帝の著御を待ちしが、午後零時三十分皇帝、皇后はポーツマス停車場著、直に御召艦に坐乗して式場に進まれた。水雷艇四隻先導し、御召艦は前檣に軍艦旗、大檣に皇帝旗、後檣に國旗を掲げ、供奉艦三隻之に續き、水雷艇四隻最後に隨行した。既にして午後一時二十五分御召艦式場に近づくや、全艦隊は旗艦に倣ひて、一齊に登舷禮式と共に二十一發の皇

皇帝皇后御召艦に坐乗

スピットヘツドの壯觀

禮砲を放ち、砲聲殷々天に轟き、白煙濛々海を掩ひ、光景壯觀を極めた。御召艦は先驅供奉を整へて、逐次に列間を縫航し、皇帝は海軍元帥の制服を著して艦橋の一段高き玉座に單獨にて起立され、雙眼鏡を手にして諸艦を親閲し、各艦の敬禮に對しては一々答禮を行はれた。

此日空晴れて、波穩かに、二百に近き堅艦快艇、序列を正して海を覆ひ、五彩の飾旗、初夏の輕風に翻へるところ、皇旗翻々蒼空に閃めき、軍樂囀曉靜波に響く、誠に雄大壯偉の景である。艦隊の親閲終り、御召艦は豫定錨地たる外國艦列の中央に投錨すれば、參列艦隊司令長官以下將官並に外國參列艦の艦長以上は御召艦に伺候拜謁し、皇帝は總指揮官に勅語を賜つた。かくて午後五時二十分御召艦は拜謁諸官を乗せたる儘拔錨し、各艦奉送の裡にポーツマス著、五時四十三分禮砲を發して觀艦式の終了を告げた。親王並に妃は御召艦を退艦、諸外國皇族と共に倫敦に歸られしが、皇帝、皇后は此夜御召艦に一泊せられ、艦隊は電燈艦飾を爲して兩陛下の觀覽に供した。翌二十五日皇帝皇后はポーツマスの對岸カウスに駐輦あり、倫敦滯在中の外國皇族並に特派大使及其隨行員

兩殿下倫敦御歸還

にウインザー王宮の觀覽を許され、接伴の爲め二名の高官を特派せられた。

親王及妃は隨行員及接伴員を従へ、午後二時二十五分諸外國參列員と共に宮廷臨時列車により倫敦出發、二時五十五分ウインザー著、直に王宮に赴き、殿内各部を觀覽の後、茶菓の饗應を受け、四時四十五分、倫敦より差し廻し置きたる自動車にてウインザー發、五時五十分歸館せられ、夜は加藤大使及同夫人を晚餐に召され、隨行員一同も亦席に陪した。戴冠式附帶行事豫定日程に據れば此日は各國大公使の招待日にして、米、佛、獨、澳、伊、露等の各國大公使は、各其公館に於て自國より參列せる皇族又は特派大使を主賓として大晚餐會を催したるが、斯る場合には英國側の名族貴紳は、各國大公使館に分散招待せらるゝを以て、之を網羅して盛會を期する能はず、且は式後兩殿下の御滞在期にも餘裕ありたるを以て、加藤大使は特に此日を避け、却て兩殿下より大使夫妻を招待せられたのである。

六月二十六日は倫敦社交界の中心人物が、外國皇族を午餐に招待する豫定日にして、親王及妃(服裝訪問服)は午後一時三十分よりランズダウン・ハウスに

ウインザー
王宮御觀覽
加藤大使及
同夫人を晩
餐に召さる

ランズダウ
ン卿夫妻の
午餐會

於て開かる、ランズダウン卿及同夫人の午餐會に、主賓として參會せられ、東郷、乃木兩大將、清河御附武官及宮岡御用取扱之に隨行した。主なる陪賓は、希臘のチヨーチ親王竝に妃、ボウフォト公爵竝に夫人、マールバラ公爵、ロバート卿竝に夫人、オースティン・チエンバレン氏竝に夫人等にして、席上偶愛兒戰歿して後嗣なき乃木大將と、ロバート元帥夫人とが相隣りして食卓に就き、談話に愛兒戰死のことに及びしは、大に列席者一同の同情を惹いた。午後八時三十分より親王(正服)及妃(デコルター)はコベント・ガーデンに於ける勅命演劇に參會せられ、更に午後十時三十分よりグロウヅナ・ハウスに於けるウエストミンスター公爵夫人の舞踏會に臨まれしが、外國皇族も多數參會し、食卓に就く時、

親王はモンテネグロのミリツツア内親王、妃は露西亞のボリス大公と同伴せられた。皇帝、皇后は此日カウスより還御の上、勅命演劇に臨まれ、我隨行員中東郷、乃木兩大將、戸田式部長官、宮岡御用取扱及渡邊式部官も亦招待を受けて觀劇した。

六月二十七日、親王(フロックコート)及妃(訪問服)は東郷、乃木兩大將、戸田式

コベント・
ガーデンに
於ける勅命
演劇
ウエストミ
ンスター公
爵夫人の舞
踏會

ウエリントン公爵の午餐會
 バツキナム王宮に於ける大園遊會

部長官及宮岡御用取扱を従へ、午後一時四十五分アプスレー・ハウスに於けるウエリントン公爵の午餐會に臨まれ、更に午後四時よりバツキナム王宮に於ける皇帝、皇后の大園遊會に參會せられ、隨員中の高等官全部も亦召されて參會した。會場に於て皇帝、皇后は皇太子、皇子及内親王を従へ園内を巡られ、次で設けの天幕内の玉座に著き、諸外國貴賓等に應接せられた。此時特に東郷、乃木兩大將を召され、ウツドロフ大尉の通譯にて觀艦式に於て日本艦隊の良く整備せることを感じたり、兩大將日本歸著後も永く英國に對して好き記憶を保たん事を望むとの優渥なる御沙汰を賜ひ、兩大將は大に面目を施して御前を退下した。此日召されたる者は實に六千名と云はれ、會散じて各員退出するに當り、皇帝、皇后は特に出口への途上に立ち、御前を通過する外國隨行員に迄一々握手を賜ひ、一同の告別の意を受けさせられ、更に八時三十分よりは、ヒズマヂエステイ劇場に於て勅命演劇を催され、親王(正服)及妃(デコルテ)は東郷、乃木兩大將、戸田式部長官及宮岡御用取扱を従へて參會せられた。外國皇族の皇帝、皇后に謁せらるゝは、本日の觀劇を以て最後とし、別に告別參内等の事行はれ

ヒズマヂエステイ劇場に於ける勅命演劇

兩殿下皇帝皇后に御告別
 ダービー伯爵の夜會

ざるを以て、親王及妃は此夜劇場に於て告別の辭を述べ、皇帝、皇后より懇篤鄭重なる御挨拶を受けられた。觀劇後更にダービー伯爵の夜會に、多數の外國皇族と共に臨場せられ、隨行の高等官一同亦參會した。

國賓待遇の終止

英國皇室は六月二十八日を以て、諸外國參列員に對する國賓としての待遇を終止し、外國皇族の多數は此日倫敦を退去した。親王及妃は午前十時三十分御旅館シーフォード・ハウスに帝室御用寫眞師ダウネーを召し、隨行員及接伴員と共に記念寫眞を撮影せられ、午後一時接伴員、隨行員を午餐に召され、終つて

クラリツヂ・ホテルに御轉宿

午後二時英皇室供用の馬車にてシーフォード・ハウスを辭し、ブルツク街のクラリツヂ・ホテルに轉宿せられ、隨行員全部亦同旅館に移つた。此旅館は倫敦第一

加藤大使夫妻の晩餐會

流の旅館にして、此處に於ける宴會に限り、英國皇族は公式に臨場せらるゝのが例であつた。午後八時加藤大使及同夫人は晩餐會を同旅館に開きて、親王及妃の台臨を仰ぎ、英國側よりはアーサー・オブ・コンノート親王を始め、首相アスキス、同夫人、外相グレー、其他國務大臣數名、シーモア海軍元帥、ニコルソン陸軍元帥及主なる海陸軍將官、戴冠式典總裁ノーフォーク公、ノーリス卿、

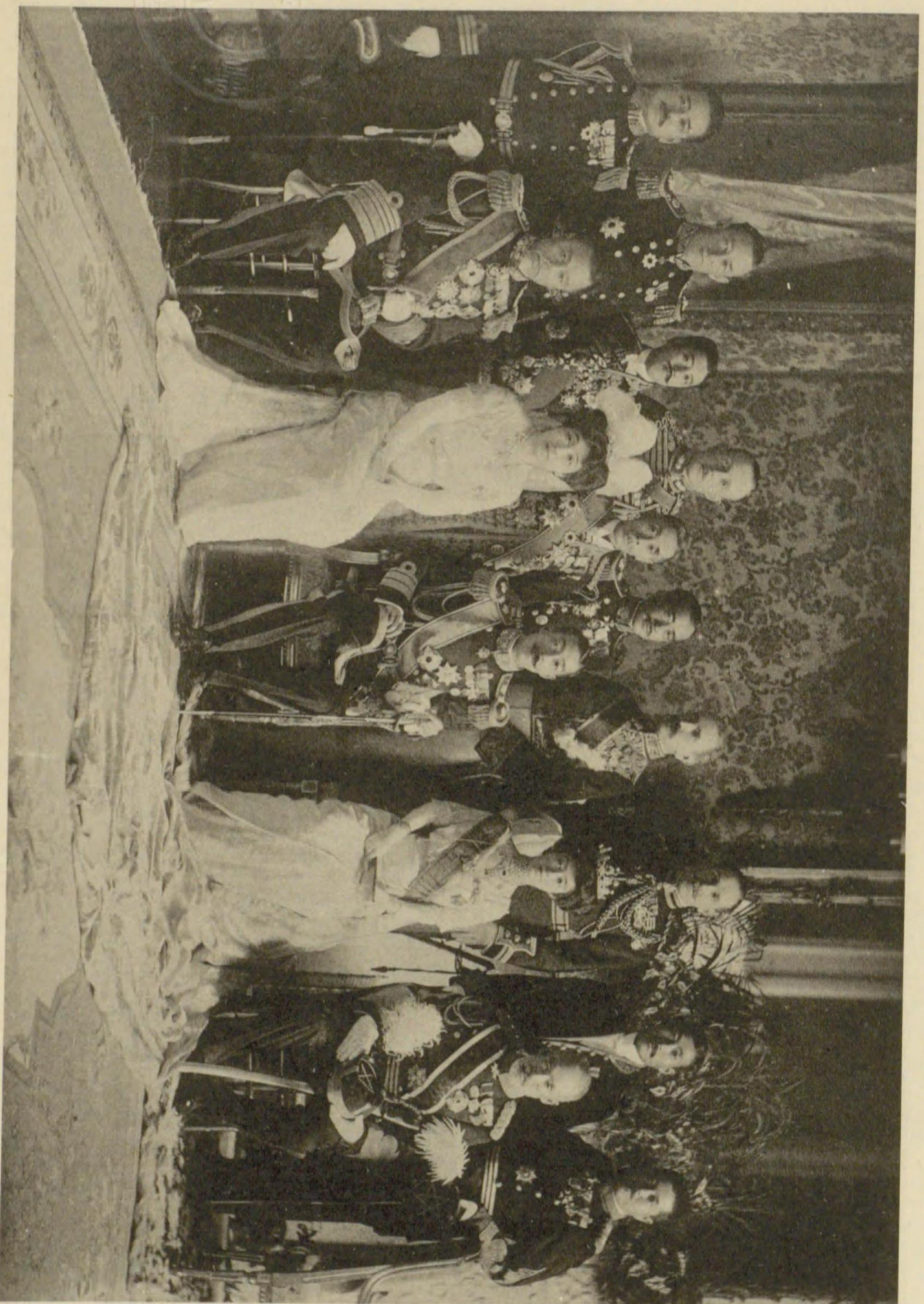
同夜夜會の
來會者二千
餘名

舊師バスク
を午餐に召
さる

日本協會晚
餐會

宮内省の主なる職員並にコールブルック卿以下接待員一同、本邦人としては隨行員一同の外、島村遣英艦隊司令長官及鞍馬、利根兩艦長等參會し、晚餐後の夜會には外人並に在留邦人二千餘名招待を受けて來會、英國人側は殆ど朝野の名士を網羅し、ホテル内眞に立錫の餘地なき盛況であつた。

六月二十九日親王及妃は、往年親王御留學當時の教師バスク夫妻を午餐に召して舊情を温められ、午後七時三十分より東郷大將以下隨行員を從へ、メトロポール・ホテルに於ける日本協會晚餐會に臨場せられた。同協會は知名の英國人及在英日本人を以て會員とし、日英兩國親交の増進を目的とする團體にして、年々一回大晚餐會を催すを例とし、本年は兩殿下及東郷、乃木兩大將の來英を機とし、特に本日晚餐會を開きたるものなるが、同會未曾有の盛會にして臨時入會申込者多數あり、都下第一の同ホテルの大食堂も爲に滿員の盛況を呈するに至つた。食後加藤大使起つて式辭を述べ、英國皇帝の盛徳を仰いで、其治世の長久を祈り、尙今回の大典を賀し、併せて依仁親王及妃に對し表せられたる英國皇室及國民の款待を謝し、盃を舉げて皇帝の萬歳を祝すれば、會衆之



英 國 皇 帝 戴 冠 式 參 列 記 念

日英親交の
乾杯

に和し、同時に英國々歌を奏した。次で今回我兩殿下を英京に於て待受け、兼ねて戴冠式に參列する爲め歸國中なりし駐日英國大使サー・クロード・マクドナルドは、明治天皇の聖徳を頌し、且國運の隆々たるを祝し、杯を舉げて我陛下の萬歳を唱へて一同之に和し、同時に君ヶ代の吹奏があつた。次に前倫敦市長テームス・デールは兩殿下の御健康を祝し、親王は之に對し英語を以て左の要旨を口演せられ、會衆の歡呼喝采を博された。

親王の卓辭

余の到着以來、獨り皇室の優渥なる待遇を辱うしたるのみならず、到る處英國官民の好遇を受けしは、余の最も満足するところにして、此愉快は永く忘るゝ能はざるべし。殊に今夕同盟國たる日英の親交を増進するに最も力ある日本協會の招待を受けたるは、余及妃の感激するところにして、諸子の厚意を深謝す。此の如き厚情は日英兩國間に存せる友誼の表示にして、此事たるや永久余の記憶に新なるべし。

次にドグラス海軍大將は、東郷、乃木兩大將に對する歡迎辭を述べ、且新聞紙の新語「沈黙東郷」に就て沈黙の眞價を擧げて東郷大將を稱讚し、大に喝采を博

した。東郷大將之に答へて謝意を表し、其他市長ストロング、協會評議員クリュードソン、日本協會副會頭及加藤大使等交々起つて互に敬意を表し、午後十一時に至つて宴を閉じた。此夜の親王御口演の要領は、翌朝タイムス其他の新開紙に掲載せられ、何れも日英親交の厚きを慶祝した。

御歸路

親王今回の御旅行は、初めより往復共に印度洋航路に據らるゝ豫定なりしも、往路の經驗に基き兩殿下の御健康上、且は御見聞を廣めらるゝ上にも利ありとし、倫敦到着後加藤大使とも協議の上、歸路は加奈陀經由のことに旅程變更の儀を戸田式部長官より宮内大臣に上申したる結果、宮中の御允許を得て、然く決定せられたる處、其後更に種々の事情生じ、加奈陀經由に就き御考慮中なりしが、本日渡邊宮内大臣より親王宛左の電報があつた。

加奈陀經由
御取止め

帝室御用御都合あらせらるゝに付、戴冠式に關する事終了次第、速に印度洋を經過御歸朝あらせらるべき旨、聖旨を奉じ其旨申上ぐ。

右に對し、親王は宮内大臣宛左の如く返電せられた。

最近の便船賀茂丸にて當地發歸朝す、此旨言上を乞ふ。

英國内地巡
遊御中止

日本人會園
遊會

國風民情御
視察

斯くて加奈陀經由御旅行は取止められ、且賀茂丸は來月八日倫敦出發の豫定にて、御滯英も最早餘日少きに依り、最初の御豫定たる英國内地の御巡遊を中止せられ、急ぎ御歸朝のことゝなつた。六月三十日正午、親王及妃はダヌタン夫人を午餐に召され、宮岡御用取扱も亦之に陪席した、午後四時より隨行員一同を隨へ、リーゼント公園に於て在倫敦日本人會の催せる園遊會に臨場あり、在英日本人多數參會し、駐日英國大使マクドナルド及遣英艦隊の士官も來會し、餘興として日本人の曲藝等あり、兩殿下は園内御巡覽、少憩の後歸館せられた。過ぐる十九日公式御入京以來、兩殿下には各種の儀式、招待等にて連日連夜多忙の日を送られしが、公式の宴會等も既に略ぼ終り、聊か閑暇を得らるゝに至りたるを以て、連日の御疲勞を醫せらるゝ旁、英國民嗜好の傾向と一般國風の視察を兼ねて、御閑ある毎に各種の演劇を觀覽せらるゝことゝなり、此夜は清河武官、宮岡御用取扱を隨へ、アデルフイ劇場に赴かれ、緩々觀劇せられた。かくて御出發の日も次第に迫まり、倫敦御滯在も後數日となり、殊に公の御用も今は全く終りたれば、親王及妃には御土産物の買上げ、倫敦名所の觀覽、在

御出船を待
たる

留邦人への賜餐等に日を消されつゝ、出船の日を待たれた。即ち

七月一日、午前は兩殿下とも在館靜養せられ、午後御同道にて渡邊、清河及宮岡の隨行員を隨へ、デリー劇場に赴かれ、觀劇後更に渡邊式部官を隨へ、日英博覽會跡に於て開催中の戴冠式記念博覽會を觀覽せられた。此日東郷、乃木兩大將はハイドパークに於て英國ボーイ・スカウトを檢閲せしが、其節キツチエナリ及ベーデンバウエル兩將軍は我兩大將を案内し、乃木大將は少年義勇兵に對し日本語を以て簡單なる挨拶を爲した。夜は東郷大將はシーモア元帥主催のメトロポール・ホテルに於ける英國海軍俱樂部の晩餐會に臨み、元帥の乾杯辭に對して一場の英語演説を爲し、又乃木大將はハイドパーク・ホテルに晩餐會を開き、主なる英國陸軍將官及在英日本陸軍將校を招待した。

テームス河
上の御舟遊
乃木大將大
陸旅行に就
く

七月二日、兩殿下は戸田式部長官以下隨行員の一部を從へ、暑装にて午前九時旅館出發、三臺の自動車を驅つてテームス河の上流メーデンヘッドに至り、舟遊の爲め特に艤装せる汽船ロイヤルに移乗、清麗繪の如き兩岸の風景を賞しつゝ、テームスの緩流を溯航すること約十五哩、ヘンレーに達し、郊外半日の清遊後、自動車にて倫敦に歸られた。此日乃木大將及吉田中佐は隨行を解かれ、歐洲大陸旅行の途に上つた。

七月三日、午後兩殿下は宮岡御用取扱を從へ、オックスフォード街のハロツド商會に至り、店内を觀覽され、夜は大使館に於ける加藤大使同夫人の催せる小晩餐會に、隨行員一同を從へ臨席せられた。

七月四日、午後妃は清河武官、宮岡御用取扱を從へ、自動車にて倫敦東部の盛衛及

總理大臣ア
スキス夫妻
を御訪問

東郷大將晚
餐會を催す

御滯英一箇
月

倫敦塔を巡覽あり、夜は旅館に加藤大使同夫人以下大使館員の一部及コールブルツク卿以下接伴員同夫人並に隨行員高等官を召し晩餐會を催された。

七月五日、午後一時大使館員及主なる在留邦人を午餐に召され、四時三十分兩殿下は總理大臣アスキス同夫人を官邸に訪問せられ、少時御懇談あり、夜は加藤大使令嬢を晩餐に召され、食後ゲアリツク劇場に赴かれた。

七月六日、午後兩殿下は清河武官を隨へ、リゼント街二三の商店を巡覽せられ、夜は山座大使館參事官夫人に晩餐を賜はり、食後ゲイティ劇場に赴かる。此夜東郷大將はクラリツヂ・ホテルに於て晩餐會を催し、加藤大使同夫人、シーモア元帥其他英國知名の海軍將官及在留日本海軍武官を招待した。

七月七日、妃は藤原海軍中佐、同夫人の案内にて、午前はナショナル・ゲアラリを、午後はケンシントン博物館を觀覽せられ、御歸館後、加藤大使夫人、同令嬢、藤原中佐、同夫人を喫茶に召され、親王は夫より渡部式部官其他を從へ、二三の商店を巡覽あり、夜は戸田式部長官を晩餐に召され、食後クリスタル・パレイスに赴かれた。

英國皇帝戴冠式參列の重任を滞なく果させられたる親王並に妃は、七月八日を以て愈倫敦出發、歸朝の途に就かるゝことゝなつた。六月七日倫敦御著以來正に一箇月、其間内外に對して繁劇なる晝夜の御勤行、殊に天皇御名代としての御心遣など、御疲勞の程拜察さるゝ次第なるに、然かも已み難き事情とは云へ、御希望の加奈陀經由の御旅行も取り止められ、再び熱帯の海に無聊なる長

隨行員減少

途の航海を繰返さるゝこと、誠に恐懼の至りである。加之、隨行員中東郷、乃木兩大將、戸田式部長官等七名は許可を得て、夫々別路歸國することゝなりたるを以て、船中の御寂情も亦一入ならんと拜察せられた。

倫敦御出發

此日親王及妃は隨行員渡邊式部官、清河武官、岩波侍醫補、宮岡御用取扱、仁羅山家扶、時岡宮内屬、田中侍女等七名を隨へ、午前八時三十分旅館御出發、加藤大使同夫人以下大使館員、駐英陸海軍武官、主なる在留日本人、駐日大使マクドナルド並に接伴員等に送られて、九時十分倫敦リバプール停車場御發車、同四十分チームス下流のアルバート・ドック停車場著、直に繫留の賀茂丸に乗船奉送諸員と共に別離の盃を舉げられ、船は十時八分解纜、馬耳塞に向け出航した。顧みれば一箇月の英國御滞在、其日子長からずと雖も、山川風物自ら別れを惜むの風情がある。船は夕刻ダンジネスを過ぎて英海峡に入り、ビスケー灣も波靜かに航過して、七月十日午後九時西班牙の北西角フィニスター岬に達した。海上濛氣罩めて葡萄牙の山も見えず、終日南走、汽船に遭ふこと三十八隻を數へた。十二日午後一時三十六分ジブラルター海峡を通過して地中海に入り、

地中海に入る

馬耳塞御著

偶南東の風稍強かりしも親王及妃には最と御元氣にて、船は七月十四日午後八時二十分馬耳塞港内に繫留した。兩殿下とも御上陸なく、船は翌十五日午後八時出港、往航の鍼路を逆にポルトセツドに向つた。

ポルトセツド御著

十七日正午、噴火山を以て著はるゝストロンボリー島を過ぎ、午後三時三十分メツシナ海峡を出で、伊太利南端を航過し、二十日午後三時二十五分ポルトセツド著、運河會社前に繫留、フライラパンチ煙草商會より兩殿下に草花を獻じて敬意を表した。午後十時五分解纜、蘇士運河に入り、途中反航する船舶を待避すること二回、翌二十一日午後五時四十二分運河を出で直に古倫母に向つた。蘇士を出で、より炎暑漸く加はり、紅海の三晝夜、船恰も釜中に在るが如く、氣温九十六度に達し、船客何れも暑熱に苦みしが、兩殿下とも極めて御壯健にて、妃は日々宮岡御用取扱等と共にデッキゴルフの遊戯に興せられた。七月廿五月初更紅海を出でて亞典灣に入り、二十七日朝阿弗利加の東角を過ぎて

蘇士運河航過

紅海の苦熱

印度洋上を一路古倫母に向針した。此頃より偏南の風、力五乃至六に達し、三十日夜半に至るも衰へず、怒濤屢船内に入りしも、風向船尾に當りたるが爲め

古倫母御著
御上陸なし

航海甚しく困難を感せず、兩殿下共に讀書、散步、遊戯等に日を過された。

新嘉坡御著
御上陸

八月二日午前七時古倫母港内に繋留、兩殿下とも御上陸なく、午後十時二十五分解纜新嘉坡に向つた。翌三日午後より力四乃至五の南西風連吹して波浪高く、船體動搖烈しく、怒濤舷内に侵入して倉庫を襲ひ、五日に至るも風尙息まず、六日午後九時三十分船はスマトラの北端を廻つて馬拉加海峽に入り、海漸く靜平、八日午後二時五分新嘉坡著、新港第八埠頭に繋留した。駐在帝國領事、三井物産會社支店長等奉迎伺候、午後五時親王及妃は隨行員を從へて御上陸、領事館にて晚餐を攝られ、午後十時三十分歸船、九日も亦午前御上陸、市内二三の店舗を巡覽後午後十時三十分歸船せられ、船は十日午前六時二十五分解纜、香港に向ひ出港した。

香港御著

倫敦を出で、より航海既に一箇月を超え、船内の無聊は乗客の心身を倦ましむるに加へて、波荒ぶ大洋の上、砂灼くる海港の邊り、水に、陸に、其勞れを増すばかりなるに、兩殿下は頗る御健康にて、八月十五日午前七時五十分香港に著された。船津總領事以下の奉迎は往航の時に同じく、尙香港總督は此日官

島廻り御中
止終日御在
船

邸の晚餐に台臨を仰ぎ度しと申出たるも、親王は之を辭退せられた。翌十六日には汽艇にて香港島廻りの御豫定なりしも、天候不良なりし爲め中止せられ、終日御在船、船津總領事夫妻に午餐を賜ひ、船は十七日午前十一時三十五分神戸に向け出發した。所謂歸航速力の船脚疾く、臺灣海峽、土佐沖も平穩に過ぎ、二十一日午後三時二十分紀淡海峽を通過し、滿船飾華々しく、天皇御名代の御乗船たりし重任を果したる喜びを見せつゝ、豫定よりも一日早く、午後六時十分神戸港内浮標に繋留した。

神戸入港

賀茂丸御退
船

曩に一行と分れ、西比利亞を経て八月七日東京に先著したる戸田式部長官は賀茂丸の繋留を了るや直に上船伺候、無事の御歸朝を奉祝し、其他地方官民の奉迎は御出發の時の如くであつた。兩殿下は此夜御上陸なく、船内に宿泊せられ、翌二十二日午前七時渡邊式部官其他の隨行員を從へて御退船、米利堅波止場に上陸され、七時四十七分三ノ宮驛發汽車にて東上せられた。途中大阪、京都其他沿道各驛に於て多數の官民より歓迎を受けられつゝ、午後四時三十四分靜岡著、驛前の大東館に一泊せられたる上、二十三日午前七時廿分臨時汽車に

靜岡御宿泊

て静岡發東京に向ひ、午後零時四十分新橋停車場に著せられた。

新橋驛御著
直に參内

天皇よりは勅使を遣はし、皇后、皇太子は御使を以て、驛頭に勞を稿はせられ、皇族、國務大臣、海陸軍將官、英國大使サー・クロード・マクドナルド其他多數官民の奉迎裡に、親王及妃は停車場より直に參内、天機を奉伺ありて御歸邸、夫より隨行員竝に奉祝の爲め參邸せる諸員を召して祝盃を舉げられ、終つて隨行員一同退散した。翌二十四日午前十時三十分參内、御座所に於て天皇に拜謁、御名代として英皇戴冠式に參列の使命に關し、委曲口頭を以て復命せられ、茲に目出度く大任を果させられた。四月十二日御一行東京發後、日を閑すること百三十有五、兩殿下の英資高風にして而かも謙讓慇懃なるに併せて、東郷、乃木兩大將の隨ふあり、錦上更に花を添へたるが如く、英國上下の瞻仰を收めて國交上貢獻せらるゝ處多大であつた。

兩大將一行

乃木大將、吉田中佐は親王の御一行に先ち、七月二日倫敦發、獨、佛、澳、巴爾幹諸國を歴訪し、西比利亞經由、八月二十日東京歸著、又東郷大將、谷口中佐は親王の御一行倫敦發後、英國内巡遊の後、米國に渡り、國賓として熱誠なる歡迎を受け、太平洋を越えて九月十五日歸京した。

第十三章 艦隊司令官及軍令部出仕時代

横須賀豫備
艦隊司令官
に轉補
明治天皇御
不例
舉國憂愁

英皇戴冠式參列を了へて御歸朝後、親王は以前に引續き海軍軍令部出仕として勤務せられしが、其年十一月八日東京出發、十一日より十四日迄九州久留米地方に於て行はれたる陸軍特別大演習を陪觀、歸途舞子に御靜養中なる有栖川宮威仁親王の御病氣を見舞はれ、十八日歸京せられた。十二月一日横須賀豫備艦隊司令官に轉補せられ、旗艦筑波に坐乗、翌明治四十五年七月十七日には御沙汰により江田島海軍兵學校卒業式に、同月二十日には横須賀海軍機關學校卒業式に臨場せられしが、同日午後二時、一大悲報は突如として青天の霹靂の如く、宮城の大奥より發せられ、痛く親王の御心を驚かした。これぞ想ふも悲しき極みなる「聖上御不例御惱み輕からず」との報であつた。

親王は時を移さず歸京參内せられ、爾後妃と共に屢參内、只管御平癒を祈られしが、宮内省にては事態容易ならざるにより、翌二十一日午前八時遂に御病狀を發表した。夢かと疑ふ此の報道に、舉國忽ち憂愁の幕に包まれ、國民の驚

御登遐

きと悲みは、やがて熱誠を捧げたる祈禱に變り、宮城の前に、鎮守の社に、烈日を浴び、夜露に濡れ、心を盡し、聲を嗄して御平癒を祈りし甲斐もなく、御病勢日々に重らせ給ひ、遂に七月三十日午前零時四十三分、限りなき國民の哀悼慟哭の裡に崩御在らせられた。國を擧げての諒闇に、悲みの雲低く大内山に垂れ籠めて、日の光も薄きが如く、世界各国亦競つて大帝の盛徳に對する深き追悼と、我國に對する厚き同情とを寄せた。

親王の御哀愁

親王は明治維新物情洵々たる裡に生立せられ、長じて軍職に就かれ、平戰兩時に互りて功績高く、天皇の御信任いと厚かりしと共に、天皇を崇敬せらるゝことも亦特に深かりしに、今や身に代へて御祈念の甲斐もなく、終に御登遐の悲みに會せられたることゝて、其御哀愁は如何ばかりなりしか、拜察するだに畏き極みである。

大正と改元

同日午前一時皇太子御踐祚、深夜ながらに嚴に皇統を繼がせられ、改元あつて大正元年となつた。先帝大葬儀準備のうちに諒闇の日は進み、愈九月十三日を以て青山なる葬場殿に於て斂葬の典を擧げ、終つて直に靈柩を伏見桃山に移

各國表弔使の來邦

し、同山陵に斂め奉る事に決定した。かゝる間に、我國と親交ある各國の元首は、夫々大葬儀參列の爲め特使を派し、米國特派大使ノックス及佛國特派大使ルボンルボンは九月九日、獨逸皇族ハインリッヒ親王及西班牙皇族ドン・アルフォンソ・デ・オルレアン・イ・ボルボン親王は翌十日著京あり、依仁親王と御交際厚き英國のアーサー・オブ・コンノート親王亦英國皇帝御名代として十一日入京せられ、親王は御沙汰に依り之を新橋驛に出迎へ、其御旅館伏見宮邸迄同車案内せられた。

大葬儀

九月十三日、今日は愈先帝の聖靈を送り參らすべき悲みの日である。落日西に光を消して、四邊哀しみの暗に包まるゝ頃、靈輦大内山を出でまして、今日最後の行幸に慘として涙を呑む沿道百萬の民に送られ、青山葬場殿に著御あつた。我皇族を始め、外國皇族、特派大使其他内外吏僚參列、大葬儀は夜の静けさの裡に、いと森嚴に執り行はれ、終つて明治大帝の尊骸は永久に國都を去つて、京都桃山の山陵に向はれた。曩に英皇戴冠式參列の際、親王の隨行員の一入たりし乃木陸軍大將は、先帝の御後を慕ふの餘り、輦車發引の合圖と共に赤坂新坂町の自邸に於て、自ら刃に伏して先帝に殉し、其妻靜子亦自刃して其後

乃木大將並に同夫人の自刃

を追うた。此の報に接して親王は且驚き且嘆じ、深く其死を悼み、其心事に同情せられ、葬送の日は特に使を遣はし、香華を手向けて懇ろに之を弔はれた。大葬儀終るや、親王は青山葬場殿より直に靈柩に供奉して桃山に向はれ、十四日午後七時同所著、山陵五十日祭迄諸儀式に参列せられた。

妃の皇太后
御代拜

是より先き、桃山陵所斂葬の儀、斂葬翌日山陵祭及山陵五十日祭に皇太后御名代として差遣の御沙汰を拜せられたる妃には、九月十二日午前八時三十分新橋停車場發同夜伏見著、澤文旅館に入られ、桃山に於て靈柩奉迎後當夜の式に臨まれ、爾後十七日の山陵五十日祭に至る諸式に、皇太后御代拜の重任を滞りなく果され、十七日午後五時兩殿下同列にて桃山發、十八日午前六時御歸京、同日参内ありて、コンノート親王に依りて行はるゝ、英國皇帝より天皇に御贈進のガーター勳章捧呈の儀式に参列せられた。英米其他の皇族及特派大使は、十七日より二十一日に亙りて逐次退京し、親王は二十日東京發、翌二十一日鳥羽港に於て旗艦鞍馬に乗艦、十月二日横須賀に歸港せられしが、更に海軍大演習に参加の爲め、同月二十一日同港發佐世保に向はれ、行動終つて十一月十日

ガーター勳
章捧呈式
旗艦鞍馬

海軍大演習
竝に觀艦式

横濱に入港、超えて十二日同港沖に於ける觀艦式に列せられた。靜波秋陽に輝く處、大小幾十の艦艇、威容嚴然海を壓して列び泊し、天皇親しく之を閲して、其軍容の整へるを嘉せられ、鞍馬は翌十三日横須賀に歸港した。

桃山御陵參
拜

諒闇の裡に大正二年を迎へられたる親王は三月二十四日軍艦筑波にて大阪に向はれ、二十六日桃山御陵參拜、續いて舞子に御療養中の有栖川宮威仁親王を見舞はれ、三十日横須賀に歸著せられた。威仁親王は三月初旬より御病勢増進し、四月十日頃に至り一旦快方に向はれ、専ら療痾に努められしも、遂に七月十日危篤の御容體にて御歸京あり、此夜八時二十分を以て薨去の旨公表せられた。先帝崩御後未だ一年ならぬに、今又帝國海軍の柱石たる元帥の宮の薨去に遇ひ、國民哀悼の涙は更に加はつた。殊に依仁親王には平素より威仁親王を推敬せられ、御交りも厚かりしことなれば、御哀悼の情もまた一しほであつた。

有栖川宮威
仁親王薨去

是れより先き四月一日、條例の改正に依り各鎮守府の豫備艦隊は廢せられて、鎮守府艦隊新に成りたるを以て、親王亦同日を以て横須賀鎮守府艦隊司令官に補職、依然同鎮守府所屬艦隊の整備訓練に執掌せられ、七月二十三日より二十

横須賀鎮守
府艦隊司令
官に改補

明治天皇御
一周年祭

海軍諸團體
總裁

海軍中將に

御進級

將官會議々々

員兼海軍々々

令部出仕に

轉ぜらる

水交社總裁

七日迄伊勢灣に出動せられた。同月末早くも明治天皇の神隠れましてより一年の日は来り、妃は皇太后御名代として山陵一周年祭の儀に参拜の御沙汰を拜せられ、二十九日東京を發し、御参拜滞りなく終りて三十一日御歸京あり、又親王は三十日参内、一周年祭權殿の儀に参拜せられた。八月五日兩殿下は親王の御父故伏見宮邦家親王四十年御式年祭竝に同妃二十年御式年祭参拜の爲め京都に赴かれ、十三日御歸京になつた。此の間八月七日には故有栖川威仁親王の御後にとて、豫て推戴を願出でつゝありし帝國海事協會、帝國水難救濟會及日本海員掖濟會の總裁たることを受諾せられた。

八月三十一日海軍中將に御陞進あり、海軍將官會議々員に補し、兼ねて海軍軍令部出仕を仰付けられ、新任横須賀鎮守府艦隊司令官博恭王に前職を引継ぎ、九月三日より毎日軍令部に御通勤のことゝなつた。九月六日故威仁親王の後を承けて大日本水産會總裁、同十三日水交社總裁たることを諾せられ、十月十五日には御親交淺からざる英國皇族コンノート親王の御結婚に對し、祝電を發して温き友情を披瀝せられ、十一月十日横濱沖に於ける恒例觀艦式を陪觀あり、

肺炎症に罹
らる

轉地御療養

全治御出勤

皇太后の御
機嫌奉伺

其他前職時代より引つゞき宮中賜餐、聖旨により各學校卒業式或は競馬會等御臨場、又外國使臣竝に其家族御引見等、御職務以外の御用も多く、公私御多忙の内にも御靜養の爲め、屢逗子御別邸へ赴かれ、御健康に關する御留意並々ならざりしに、此年十二月一日以來風邪に罹らせられたる氣味あり、七日醫師肺炎と診定し、八日より引入療養をせらるゝに至つた。

極力御加療の結果、年を越えて御病漸く怠りたるを以て、大正三年一月十六日妃御同伴熱海に轉地療養せらるゝこと約一ヶ月半にして病氣御全快、三月三日熱海を去り、逗子なる御別邸に入られた、此御往復は海上を驅逐艦に據られしが、二回共波浪高く、艦の動搖大なりしも、妃は端然として何等の御惱みもなく、談笑常に變られざりしは、流石に其御人格と御嗜みの程も窺はれて尊かつた。斯くて御發病以來、妃の御心籠めたる日夜の御看護の效果著しく、親王の御健康も恢復して三月十七日御歸京、同二十三日病氣御全快の上、軍令部へ出勤せらるゝに至つたのは誠に悦びの限りであつた。

三月二十六日兩殿下は沼津に在せし皇太后の御機嫌奉伺を兼ね、親王の御病

氣中屢御尋ねを蒙りたる御禮言上の爲め同地に赴かれしが、此日は春漸く深からんとする頃にも拘はらず、時ならぬ寒さつよく、親王の御病後如何あらんかと思はるゝ程であつた。御用邸は沼津の東方約一里の海岸宇桃郷に在り、其名の如く附近此處彼處の桃園には、今を盛りと咲き競ふ桃花美しく、實に心長閑に床しき宮居であつた。やがて兩殿下は陛下に御對顔御陪食あり、隨員も亦賜謁の榮に浴し、仁慈篤き慰勞の御言葉を頂戴した。兩殿下は同夜九時、六花繽紛、紅花と共に舞ひ散る中を東京に御歸邸あらせられた。

翌二十七日も亦冷雨降り注ぎて天甚だ寒かりしが、突如として皇太后御不例の飛報があつた。即ち昨二十六日午後俄に左胸部に疼痛を覺えさせられ、其夜御安眠成らず、狹心症發作の御容體なりとのことであつた。昨日拜謁、本日此事あり、あまりに思寄らざる御異變に、兩殿下にはいたく御心痛ありて、直に御見舞の電報を發せられ、四月一日には兩殿下は沼津に赴き御機嫌を奉伺せられた。然るに皇太后の御病狀は毫も緩和の兆を見ず、折からの氣候亂調に一層御惱を増し、四月九日に至り御容體急變を告げられたるを以て、兩殿下は同日

皇太后御急病

兩殿下の御心痛

皇太后崩御

再び沼津に奉伺、翌十日午前二時御歸京ありしが、悲いかな、及ばぬ點なき醫療の御手當、誠を籠めたる國民の熱禱も其甲斐なく、遂に四月十一日を以て先帝の御後を追はせられた。噫二年前不世出の聖帝を喪ひたる國民は、再び茲に仁慈春の海の如き皇太后の崩御に會して、世は春と云ふに諒闇忽ち國を被うて、天日爲めに暗く、都鄙哀愁の涙に沈むに至つた。時を隔つること僅に二十箇月にして、二度御大葬の悲典を擧げざるべからざりし我國は、寔に不幸の極みであつた。

五月二十四日夜、悲雨蕭々滿都寂々たる裏に、昭憲皇太后御大葬の儀は代々木原頭に行はれ、親王は青山御所より代々木葬場殿迄靈輦に供奉せられ、靈柩の發御を奉送後歸邸せられた。靈柩は夜半東京を發して、沿道官民の嗚咽奉送裏に翌日桃山に著御あり、又二十三日東京を發せられたる妃は、桃山にて靈輿を奉迎せられ、斂葬竝に翌日山陵祭の儀に參列後、同地發二十八日朝歸京せられた。同年六月二十三日親王は議定官に補せられ、次で翌々二十五日東京發二十六日桃山東陵(昭憲皇太后山陵)に參拜せられしが、同日前の御養母小松宮大妃

重ねての大葬儀

議定官に補せらる

小松宮大妃
薨去

病氣御危篤に陥られしを以て急遽御歸東、二十七日午前九時著京せられしも、悼むべし小松宮大妃は前夜既に薨去せられし爲め、遂に御臨終に會せらるゝことが出来なかつた。此の前後數年、皇室、皇族に屢御不幸ありて、哀涙乾きも敢へさせられざる親王御悲歎の程、返すも御痛ましき次第であつた。

奥國皇太子
竝に妃の
遭難歐洲大戰勃
發す

皇室の悲事は獨り我國のみに止まらず、歐洲にても此年六月二十八日奥國皇儲フェルデナンド大公竝に同妃は、ボスニア州セライエヴォ市に於て、セルギヤ人の一青年の爲めに暗殺せられたりとの報があつた。親王は嘗て歐米御巡遊中同大公と御面識の間柄とて痛く哀悼せられ、直に同國皇帝宛弔電を發せられた。七月四日には小松宮大妃の御葬儀に、六日には奥國大使主催の築地教會に於ける同國皇儲追弔會に參列せられ、八月一日よりは避暑の爲め妃と共に逗子御別邸に赴かれしが、奥國皇儲暗殺の變事端なくも導火線となつて歐洲に大戰亂を捲き起し、戰雲漸く東亞の空に蔓らんとするに至りたるを以て、十一日御歸京、爾後暑中の休暇を廢し、風雨を意とせず、日曜祭日を問はず、夏より秋に互り一日の御缺勤だになく、只管職務に御精進ありしは當時世人の感

激措く能はざりし處であつた。妃も亦此間每週一回、日本赤十字社に於ける聯合軍負傷兵の爲めの繙帶調製に従事せられしは、其博愛仁慈の程有難き次第であつた。

對獨宣戰

葉山御別邸
落成

日英同盟條約に依り參戰の義務を負へる我國は、八月二十三日獨逸に對して戰を宣し、爾來海陸兩軍の奮戰に依り、十月には獨領南洋諸島を、十一月には膠州灣を占領して獨逸の艦隊を東洋より驅逐し、茲に戰局一段落を告げしを以て、親王竝に妃は十二月廿八日此度葉山の里樹陰深き處に新築成りたる御別邸に赴かれ、暫し滞在せらるゝ事となつた。

妃同伴關西
御旅行

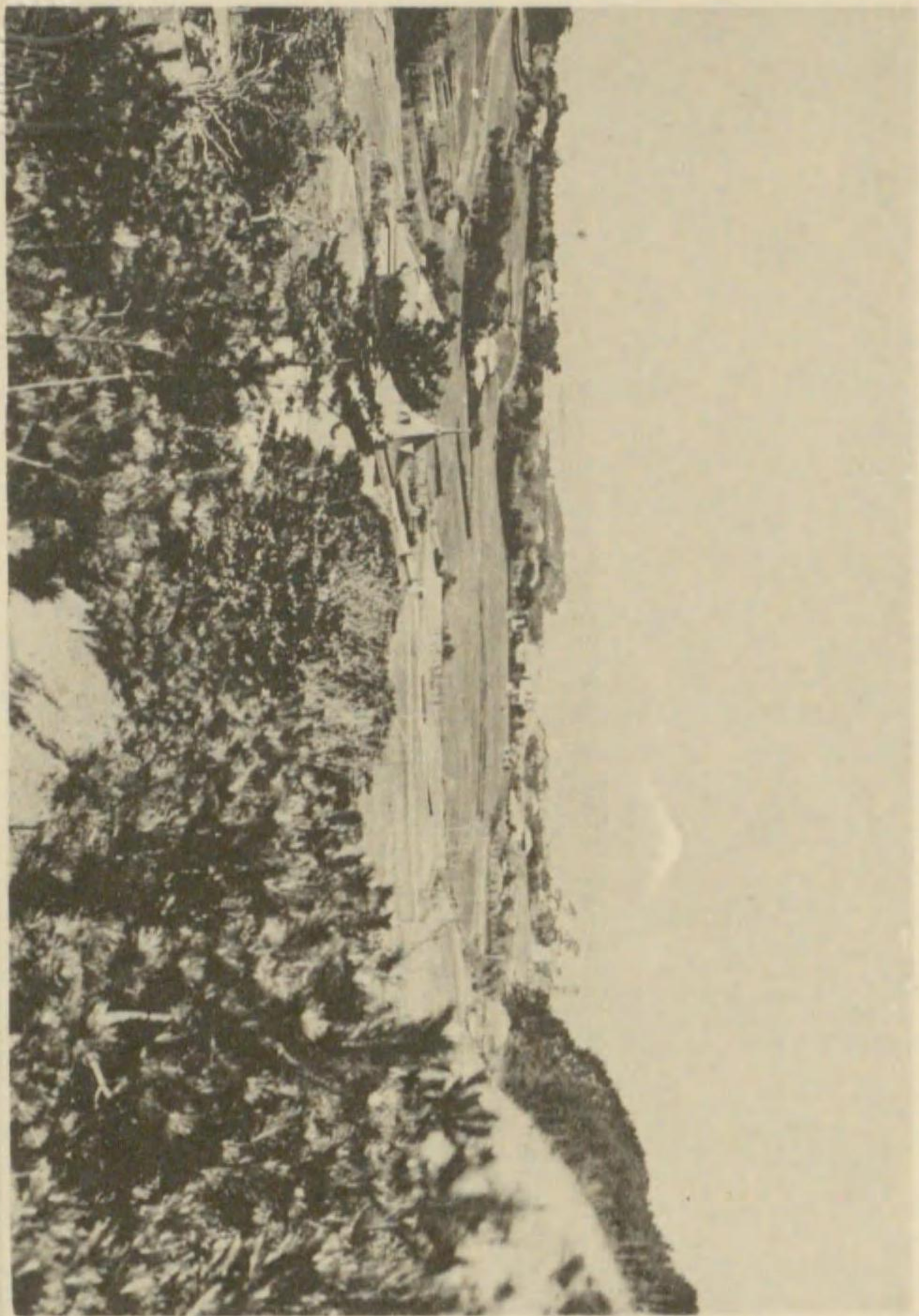
翌四年四月二十一日、親王は帝國水難救濟會總裁として同會廣島支部の發會式に御臨場の爲め、妃同伴東京を發し二十二日京都驛著、直に自動車にて桃山なる明治天皇、昭憲皇太后兩御陵に參拜せられたる上、姉君村雲尼公を訪はれて一夕の御歡談に興を盡され、其夜は京都に宿られた。翌二十三日同地出發岡山に下車、親王は直に旅館に入らせられ、妃は金鳥城竝に後樂園等御觀覽後同地に御一泊、二十四日宇品より驅逐艦水無月にて江田内に入り、海軍兵學校を

巖島に於ける御清遊

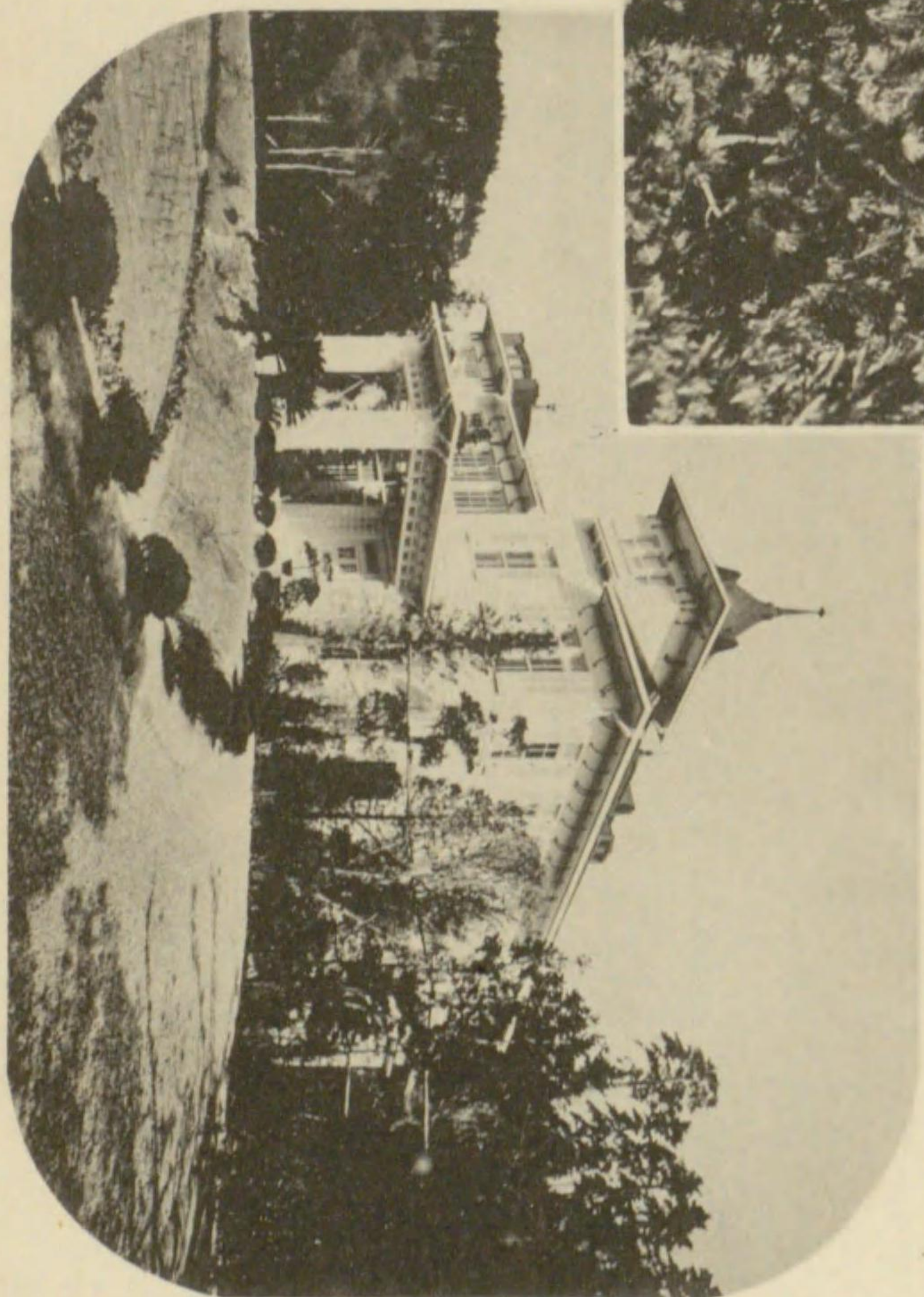
廣島御巡覽

神戸御視察

御覽の上、瀬戸内海の春景を賞せられつゝ、夕刻宮島に御上陸宮島ホテルに入られた。其夜は御旅情を慰むる爲めに點したる廻廊無數の神燈の満潮に映する美しさを賞で、翌二十五日は巖島神社に詣で、寶物を觀覽せられ、更に彌山、紅葉谷等に山水の美を眺め、妃は御裾にもつるゝ神鹿に手づから餌を與へて打ち興せらるゝなど、一日の清遊を試みさせられたる後、日暮宮島出發廣島なる長沼旅館に入られた。次日宇品に於ける發會式に臨まれて後廣島に御歸還、翌日に互つて廣島共進會場及廣島城等を御歴覽あり、城内に於ては師團長の案内に依り、對清戦役の際に於ける明治天皇御親征の大本營跡に、今猶舊の如き御座の間の御調度等を親しく拜觀ありて御感慨いとゞ深きものがあつた。二十七日夕同地出發其夜は神戸に御宿泊、翌二十八日大雨高浪を冒して川崎、三菱兩造船所を御巡覽あり、従業員等は之を無上の光榮とした。夫れより海員掖濟會神戸出張所及神戸製鋼所を御巡視あり、翌二十九日神戸發歸京せられしが、此度の御旅行は日子僅に九日に過ぎざりしも、公私の御行動殆ど席温まるの違なき程に御多忙なるものであつた。



望眺ノリヨヲ莊別御山葉



莊別御山葉

海軍大演習
審判官

六月五日天皇横須賀に幸し新艦榛名、霧島及新造二等驅逐艦數隻を親閲せられ、親王は東京より供奉親しく御説明の役を奉仕せられた。十月二十日より十一月一日に亙る海軍大演習には審判官として軍艦滿州に御乗艦、波荒ぶ外洋を馳驅して二日御歸京あり。越えて五日天皇御即位の大禮に參列の爲め兩殿下同列御西下、同日夕京都南禪寺畔市田彌枝別荘に入られ、七日御著輦を京都驛に奉迎せられた。

御即位式參
列

世界に比なき尊く嚴かなる大禮は、十一月十日を以て全國民の嚴肅なる慶祝の裏に舊都に於て執り行はれた、兩殿下は齋戒沐浴、古式の御服裝を以て此盛典に參列せられ、尙ほ大禮後の諸儀式饗宴等に御參列ありて後、二十三日朝京都發御歸京あらせられた。

御生母逝去

是より先き兩殿下京都御滯在中發病されたる親王の御生母伊丹吉子は、遂に兩殿下の御歸京を待ち得ず、十一月十三日早曉を以て逝去され、僅かの御離京中に此悲事に遭はれ、歡喜の裏に悲愁を味はせられたる親王の御心事は恐察に餘りある次第であつた。

大禮觀兵式
及觀艦式

海軍諸學校
卒業式臨場

海事水産博
覽會

此月二十八日、天皇大禮を終へて京都より還幸あらせられしが、十二月二日青山原頭に大禮觀兵式舉行せられ、引つゞき四日横濱港外に於て大禮觀艦式を行はれ、天皇親臨、親王供奉、妃は陪觀せられた。此の閱武の兩式に於て海陸幾十の艦艦と數萬の貔貅とは共に我武威を輝し國防の嚴なるを想はしめた。尋で同月十二日には天皇海軍大學校卒業式に臨御ありしを以て親王之に供奉せられ、翌十三日は御沙汰に依り横須賀に於ける海軍砲術、水雷兩校の卒業式に臨まれ、續いて又江田島海軍兵學校卒業式に臨場の爲め十四日朝東京御出發十七日御歸京ありしが、更に二十日には輕微なる御風氣と神経痛の御惱みをも厭はせられず、折柄の寒風を冒して横須賀なる海軍機關學校卒業式に赴かれた。斯く御大禮以來殆ど寧日なき御奉公は眞に感激に堪へずと申すべきであつた。大正五年、親王御年正に五十、改年と共に御健康も恢復し益々軍務にいそしまれしが、一月十二日より二十一日に互り、折柄來邦中の露國皇族ミハイロキツチ大公と御交驩があつた。三月上野公園に海事水産博覽會開催せらるゝや、親王は其總裁として、五月五日兩陛下の行幸啓を仰ぎ、親しく場内御案内の事



御 東 帶

神武天皇二
千五百年祭

熱田築港御
視察

聯合國民に
御同情

軍事研究御
熱心

に當られしが、明晰なる御頭腦の致す處、御説明微に入り、細を穿ち、兩陛下にはいたく御満足あらせられた。

此年四月三日は神武天皇二千五百年祭に相當し、天皇御親祭の事あるを以て、親王は供奉の御沙汰を拜せられ、四月一日東京御出發、三日奈良に於て車駕を迎へ、畝傍山陵御親祭に供奉せられた。五日奈良御出發、熱田築港視察の上六日歸京せられしが、熱田築港視察の際には御職務柄と言ひ且は諸事に研究心深き御事故敢て異とするに當らざるも、然も其御質問の一々肯綮に當れるは陪觀者一同の驚嘆措かざる處であつた。五月二十六日白耳義公使は、大戦以來塗炭の苦を嘗めつゝある同國民の爲めに慈善演劇會を催し、兩殿下の台臨を仰ぎたれば、親王は其舉を賛し、同夜帝國劇場に赴かれ、英國大使も亦同月廿九日を以て赤十字慈善觀劇會を帝國劇場に催したるが兩殿下は之にも臨まれた。同年六月海軍參謀長會議の開催を機とし、十四日各參謀長を御邸に召して茶菓を賜はり軍狀を聴取せられしが、爾後毎年恆例と成つた。又海軍士官の軍事研究を奨励せらるゝの趣旨に於て、水交社總裁として題を下げられ、廣く水交社員の

述作を募集し、審査員をして之を審査せしめ、其優秀なるものを褒賞せらるゝこと、大正五年より始まり同十年に亙り、應募者百十五名に達した。大正十一年にも亦同様課題せられしに、六月親王薨去せられたるを以て遂に廢止せらるるに至つた。是等を以ても軍事の研鑽、學術の奨励に御熱心なりし事の一端を窺ふに足るのである。

第十四章 司令長官時代

横須賀鎮守
府司令長官
に親補

筑波爆沈と
御心痛

海軍々令部出仕として三年三箇月に亙り、東京御在勤なりし親王は、大正五年十二月一日を以て、横須賀鎮守府司令長官に親補兼て海軍將官會議々員に補せられ、六日御著任、十二日より管下各部の巡視を開始せられしが、御就任間もなきに深く親王の御心を痛めまゐらせたるは、大正六年一月十四日午後三時十五分横須賀軍港内に起りたる、軍艦筑波爆沈の慘事であつた。親王は此悲報に接せらるゝや、直に沈没せる筑波の現状を視察し、負傷者を海軍病院に慰問ありて夫々御菓子料を賜ひ、且殉難者百五十一名に對して祭祀料を下され、其葬儀には親しく靈前に弔詞を供へらるゝ等、部下愛撫の御仁心寔に感激すべき次第であつた。

二月の嚴寒を避けて、葉山御用邸に駐蹕あらせられたる天皇には、御親任厚き親王の麾下各部を戀はすべく、同月十九日横須賀方面御散歩の體を以て、眞の御微行にて軍港に臨御あり、親王の御案内にて海軍工廠内各部及軍艦山城主

天皇横須賀
に御微行

砲の一齊操砲を御覽せられ、御晝餐後、追濱航空隊に於て飛行機の運動及長浦灣に於て驅逐隊の魚雷齊射等を天覽の後、葉山に還幸あらせられた。

管内御巡視

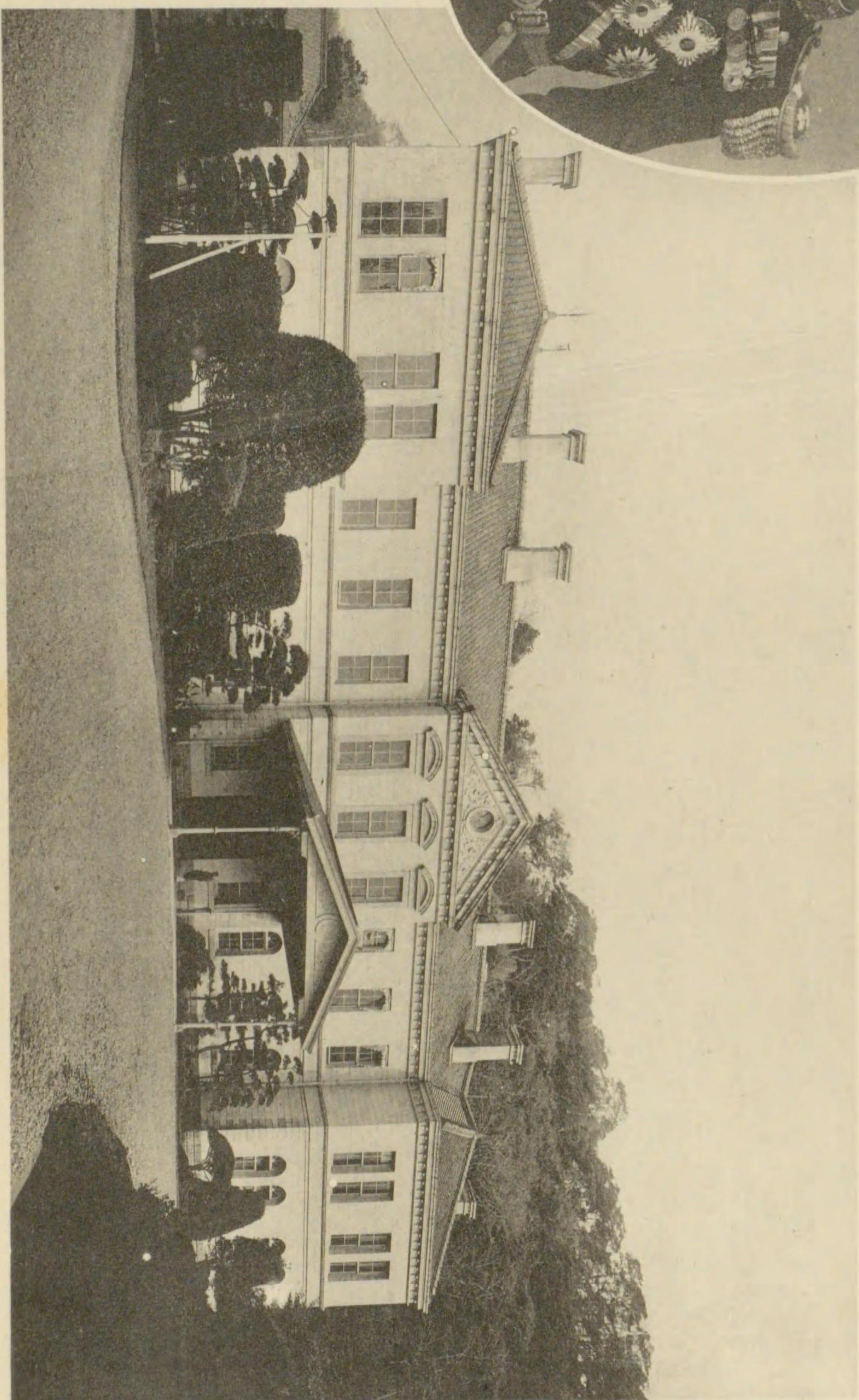
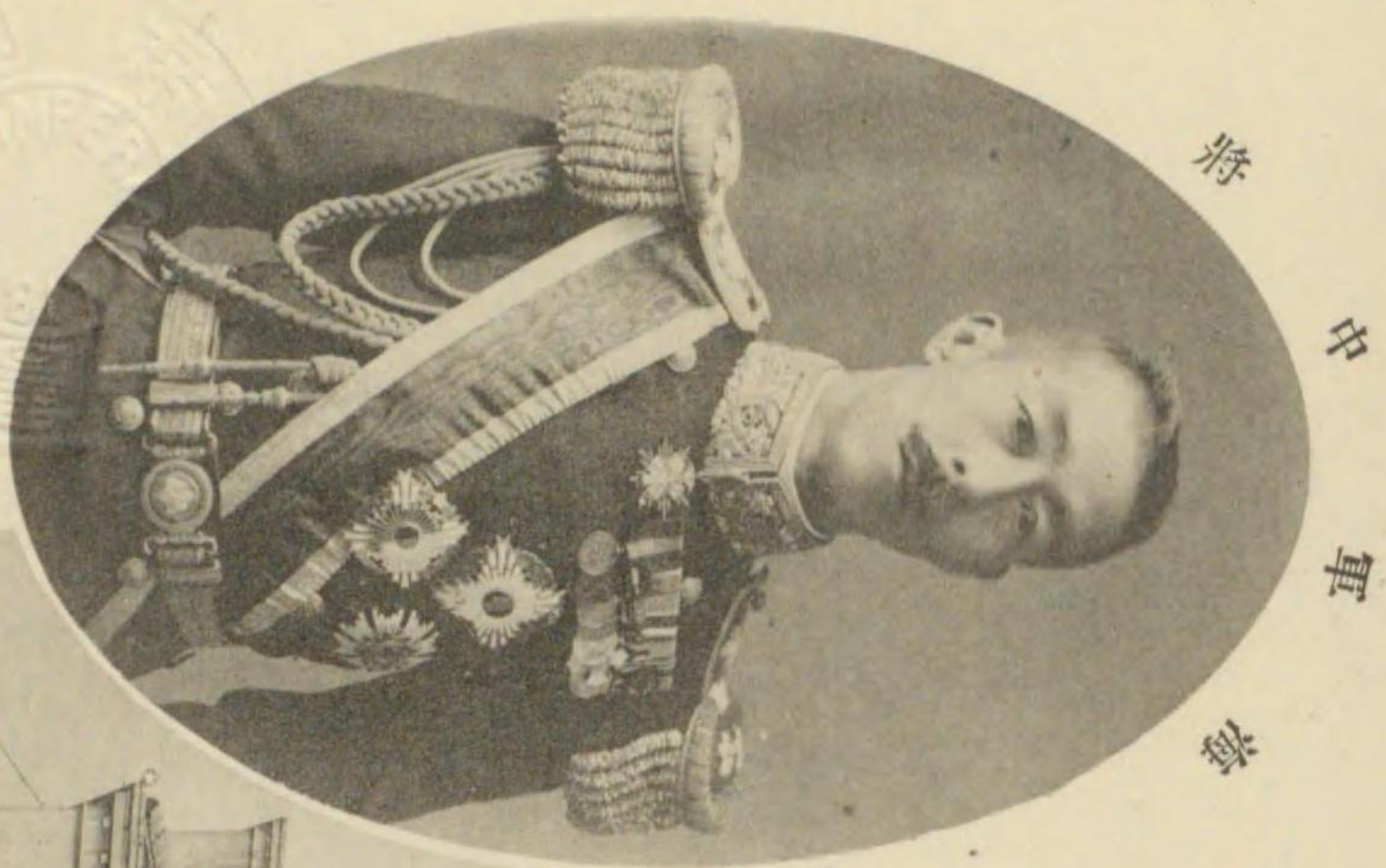
親王の管下御巡視は二月十七日を以て終了し、三月に入り水戸及仙臺兩市に於ける海軍志願兵徵募の状況を視察せられ、同月十六日妃と共に横須賀市内深田なる司令長官々舎に移り住はせらるゝことゝなつた。三月下旬より十月中旬に互りて管下の恆例檢閲を行はれ、又此間前橋及會津若松兩市に於て海軍簡閲點呼を御視察あり、其他各種の海軍競技等頻繁に舉行せられ、殆ど寧日なき御多忙の中にも、一面皇族としての宮中諸行事、外賓應接、公共團體總裁としての御職務等に銳意従事あらせられたれば、其御繁忙歴代の司令長官に倍するものがあつた。斯くて御在職一箇年は早くも過ぎて、大正六年十二月一日を以て第二艦隊司令長官に親補せられ、同月六日御著任、天資英邁なる親王は、茲に帝國海軍の精華たる常備の一艦隊を率ゐ、光輝ある重責を擔はるゝに至りしが、同艦隊の編制は次の通りであつた。

職務御繁劇

第二艦隊司令長官に轉補

第二艦隊

横須賀鎮守府



第二艦隊の
編制

第二 戦 隊

巡洋戦艦三隻(金剛、比叡、霧島)

第二水雷戦隊

巡洋艦一隻(平戸)

驅逐隊二隊(一、二等驅逐艦各四隻)

第三潜水艇隊

母 艦 一隻(駒橋)

潜水艇 三隻

第四潜水艇隊

母 艦 一隻(韓崎)

潜水艇 五隻

當時艦隊の諸艦艇は、乗員の補充交代並に休養の爲め各所屬軍港に歸還中に
て、隊務稍閑散なりしを以て、親王は一時東京御邸に歸られた。

大正七年二月五日午前、麾下の金剛及驅逐艦六隻を率ゐて横須賀軍港を發し、
艦隊豫定集合地たる九州東岸の佐伯灣に向はれ、翌六日風雨強き海上を難行し
て七日佐伯灣著、更に別府灣に回航せられた。此間に比叡、霧島、平戸の諸艦
來り會したるを以て、十八日艦隊は別府を出で、徳山を経て由宇に入り、魚雷

第二艦隊九
州沿岸行動

發射の訓練を行ひ、二十七日吳に入泊した。爾後三月十八日迄吳附近に在りて諸種の教練を勵行し、十九日吳を發して佐伯灣に入港、次で二十四日夜同灣外に於て對水雷戰隊演習を實施し、有明灣及八代海を経て四月二日佐世保軍港に入り同月十日まで滯泊した。此在泊中、朝鮮總督附海軍武官釜屋六郎、第二艦隊の朝鮮巡航に關し、打合せの用務を帯びて來艦したるを以て、親王は之に告げらるゝに、從來我皇族の李王、李太王と對面の際に於ける應接振に關し、豫て抱懷せらるゝ意見を以てせられ、同武官は之を了承して去りしが、後日李王家御訪問の際、此御主旨實現せられ、大に爾後の好例となつた。四月十一日艦隊を率ゐて佐世保出港、十三日午後青島に入泊、十四日陸上戰跡御視察後、青島神社敷地に手づから一樹を植ゑられ、十六日出港仁川に向はれた。仁川は潮汐干満の差甚大にして従つて潮流早く、大艦の入泊は相當の難事に屬し、金剛級巡洋戰艦の入港は實に今回を以て我海軍最初の試みとし、司令長官としての親王の御苦心と御勇斷とは拜察に餘りありしが、幸にして入港の當日十七日は、朝來晴空一碧拭ふが如く、諸艦は安全に仁川港に投錨した。

第二艦隊仁川に入港

京城御訪問

翌十八日親王は幕僚並に麾下司令官等を隨へ、日鮮各學校生徒及市民の奉迎裡に仁川埠頭に御上陸、午後一時半南大門驛著、李王、李垺公、李太王御使、朝鮮總督子爵長谷川好道以下文武官、朝鮮貴族其他數千名同驛に出迎へ、親王は李王家より差廻しの馬車にて御旅館たる德壽宮内の石造殿に入られ、日鮮の貴族、高官等に謁を賜うた。李太王は侍臣を派し、病の故を以て來訪し難き旨を謝し、李王並に妃は閔李王職長官を遣して明日午餐に親王の貴臨を請ひ、親王之を快諾せられ、御附武官南郷次郎を派して、李王、同妃及李太王に夫々禮物を贈進せられた。

十九日午前、京城諸學校生徒の學藝、武技等を巡覽せられ、正午昌德宮に赴き、李王並に妃と御對顔、續いて盛宴は仁政殿内に催され、宴果て、後、親王は閔李王職長官等の案内に依り、祕苑の春を賞して石造殿に歸還せられしが、同夜並に次夜、李太王は親王に朝鮮料理を贈られ、李王、同妃及李太王は夫々朝鮮産の方物を親王に贈進せられた。二十日景福宮を觀覽、次で南山公園を経て長谷川總督の午餐會に臨まれ、二十一日午前、李王、同妃及李太王の御使、

李王家と御懇誼

旗艦に於ける御饗宴

李炯公、長谷川總督以下百官奉送の裏に京城を辭して歸艦せられた。翌二十二日李王、李炯公、主なる李王職員、朝鮮貴族、朝鮮總督以下總督府各長官、軍司令官、師團長、京城及仁川府尹等數十名を旗艦霧島に於ける午餐會に招じ、別に京城、仁川の官民約三百名を軍艦比叡のアットホームに召され、兩艦内に於ては武技、餘興等を催して主客交驩、午後一時五十分李王、李炯公以下退艦歸京せられ、比叡に在りては午後四時に至り來賓漸く退去した。

親王は明治二十九年秋千代田分隊長として御勤務中、海軍大尉の資格を以て京城を訪問せられ、時の朝鮮大君主と對面、種々御物語などありて親睦を結ばれしが、烏兎忽々いつしか二十一年を經過し、今や海軍中將第二艦隊司令長官として再び京城を訪はれた。此間に於て日韓併合は行はれ、當年の大君主は位を讓つて李太王と稱され、今回は病氣の故を以て親王と御對面はあらざりしも、料理並に國產品の御贈進等厚き好意を寄せられた。今回親王の朝鮮御訪問の事たる、決して單なる訓練の爲めの巡航にあらず、日韓の間に一層親善なる關係を招來せしめんとの深慮より發せられたるものにして、皇族の尊貴と、司令長

烏兎忽々二十一年

英國差遣の御沙汰
將官會議々員に專補

官の重職とが相待つて、其効果は決して鮮少ではなかつた。二十三日午後艦隊は仁川を發し、二十五日佐世保に歸著、親王は旗艦を金剛に復し、二十六日同港發、二十九日横須賀に入港、即日東京御邸に歸らせられた。

五月三日宮内大臣波多野敬直親王に伺候し、大不列顛國に親王を差遣せらるべき御沙汰書を呈したるが、六月十三日第二艦隊司令長官を免じ將官會議々員に專補の命を受けられたるを以て、翌十四日退隊、再び東京御在勤の御身となられた。斯くて親王の艦隊司令長官の職に在られたるは約半歳に過ぎざりしも、職務御多端の上、寒威の爲め宿痼の神経痛屢起り、側侍者をして恐懼痛心せしめしが、堅忍剛毅なる親王は更に屈せず、克く其重責を盡されしかば、全軍の將士爲めに感奮し、艦隊の士氣は頗る旺盛であつた。

曩に英國皇帝は、我天皇の御内諾を得て、天皇を英國陸軍元帥の班に推し、アーサー・オブ・コンノート親王をして、元帥杖を捧げて來朝せしめられしが、同親王は六月十八日著京、天皇之を東京驛に迎へ給ひ、依仁親王は御懇親の間柄なる此の貴賓接伴の任に當り、其旅館霞ヶ關離宮に案内せられ、爾後同月二十

コンノート親王御接伴

九日、同親王の退京せらるゝまで、朝夕行を俱にして其誼兄弟の如く、懇待大に努められた。

海軍大將に御昇進

七月二日海軍大將に任じ軍事參議官に補せられた。八月輕井澤に暑を避け、九月に入り英國差遣の日も迫りたれば、八日東京を發して同夜京都泊、翌九日桃山兩御陵に參拜あり、歸途乃木神社に立寄られ、明治四十四年乃木大將等を從へ英國皇帝戴冠式に參列せられたる當時の御日誌を同社に寄附せられた。十日朝御歸京、同夜は御渡英隨行員に晚餐を賜ひ、十六、十七兩日には各大臣、元帥、軍事參議官、御渡英關係勅任官を、翌十八日には英國大使同夫人以下同館員を御邸に召して晚餐を賜ひ、二十日には英國大使館に於ける午餐に臨まれ、二十一日には隨行員一同を隨へて賢所參拜、同夜は宮中の御別宴に列せられた。斯くて御渡英の準備全く成り、愈出發の日を待たるゝのみとなつた。

御渡英御準備

第十五章 特命御渡英 上

曩に英國皇帝は、我天皇に對し、同國陸軍元帥の稱號及元帥杖を贈進せられんが爲め、アーサー・オブ・コンノート親王を我國に特派せられたるを以て、天皇は之に酬ゆると同時に、日英兩國間の友誼をして益敦厚ならしめんと軫念あらせられ、同皇帝に對し、帝國陸軍元帥の稱號竝に元帥刀及同徽章を贈らせ給ふ爲め、依仁親王を特使として英國に差遣せらるゝこととなつた。親王は大正七年九月二十六日を以て横濱を發し、加奈陀を経て渡英の途に上り、尙ほ勅許を経て、此機會に伊白兩國皇帝、米佛兩國大統領及聯合軍總司令部を訪問せらるることとなりしが、其隨行員は左の通りであつた。

英國差遣の大命

隨行員

- | | | |
|--------|-------|-------|
| 宗秩寮總裁 | 侯爵 | 井上勝之助 |
| 陸軍中將 | 柴五郎 | |
| 海軍中將 | 小栗孝三郎 | |
| 陸軍歩兵大尉 | 侯爵 | 前田利爲 |

侍從兼式部官	子爵	松平慶民
海軍軍醫大監	醫學博士	雨宮量七郎
皇族附武官	海軍大佐	南郷次郎
海軍少佐	佐	山縣武夫
宮内事務官	高橋	磯
宮内	足立	大
同	中根	信尾

御行動の秘密

當時歐洲戦場の形勢は、獨逸兩軍の威力漸く衰へ、佛英米聯合軍及伊軍頻りに捷つて、講和の氣運既に動きつゝありしも、大西洋上に於ける敵潜水艦の出沒未だ熄まず、御渡歐海路の危険測り難きものあるを以て、今次の御行動に關しては、中外に對し嚴に秘密を保たるゝことゝなつた。

東京御出發

御出發當日たる九月二十六日、親王には午後一時十五分妃と共に對面の間にて、參邸の御近親及宮内大臣子爵波多野敬直、海軍軍令部長男爵島村速雄、式部長官伯爵戸田氏共以下を引見、告別の杯を舉げられ、同四十分略裝にて御出

門、南郷御附武官陪乘して自動車を横濱に馳せられ、奉送の川島別當及南岩倉男爵竝に隨行の高橋事務官は別の自動車にて之に従ひ、自餘の隨行員は各自便宜乗船し、船内にて親王の御乗船を待ち上げた。

午後三時十分横濱港務部著、奉送の爲め先著せる宮内次官石原健三、式部次長公爵伊藤博邦及侯爵井上勝之助夫人等に謁を賜ひ、神奈川縣知事有吉忠一、横濱市長久保田政周等に送られて、港内碇泊の郵船會社汽船伏見丸に御乗船あり、隨行員一同及海軍次官柝内曾次郎、海軍大將男爵出羽重遠、郵船會社々長男爵近藤廉平等伺候し、近藤社長は御旅行の安全を祈り、一同之に和して杯を舉げた、午後四時奉送諸員退船するや、伏見丸は直に錨を揚げ、横濱港を煙霧の中に残しつゝ、東京灣口を出で、遠くヴィクトリア港を目指して太平洋心に向つた。此日風無く、秋氣朗かに、海上平穩、重き任務を帯びられたる御渡歐の首途には最と幸ある天候であつた。

横濱御發船

船は太平洋北部航路を取り、約十四哩強の速力を以て東進し、連日海波平靜なりしも、高緯度に上るに従ひ、折柄の降雨と相俟つて冷氣頓に加はり、九月

三十日には船室にヒーターを通じ、十月二日には甲板上にて外套を用ゐるに至つた。十月二日午後二時東經より西經に入りたる爲め同日を二日重ね、横濱出港後十二日にして、七日午後八時北米合衆國と加奈陀との境界たるデユアンド・フカ海峡に入り、翌朝検査を了へて午前九時ヴィクトリア外港棧橋に繫留、加奈陀政廳派遣の接伴員外務次官サー・デヨウセフ・ボウプ等に迎へられて御退船、一先づエムプレス・ホテルに入られた。エスクワイモールト軍港司令官代理司令官病氣の爲め及ブリテイツシ・コロンビア州知事サー・ジョン・オリヴァ等の伺候を受け、夫より一行自動車に分乘して市中見物の後、午後二時二十分、在留主要邦人の奉送裏に、カネイデイアン・パシフィック會社棧橋より同社の快速汽船プリンセス・ヴィクトリアに乗船せられた。船は直に出港、風光明媚の水道を通過し、六時五十五分ヴァンクーヴァ著、州務長官エフ・バーレルの出迎へを受けて御上陸あり、ホテル・ヴァンクーヴァにて晚餐を取られ、十時半御出館、接伴員、隨行員及ヴァンクーヴァ領事浮田郷次等を隨へ、特別供用列車にて東部に向け出發せられた。

ヴァンクー
ヴァ御著

加奈陀
ヴィ
クトリア
御著

戦時食膳

此日汽船プリンセス・ヴィクトリア内にては、茶に供する砂糖は一人二個に限られ一々囊に入れあり、尙ほ現在當地にての晚餐はスープ、肉、果物の三皿を普通とし、帯黒色の麵麩を用ゐるとの事を聞けり。歐洲大戰の影響此に及べるものにして、交戦國民窮迫の状以て察すべきであつた。

翌十月九日午後一時、ロッキーマ脈門戸の稱あるシカマウスに著した。此地はシヤシユワツプ湖に臨み、ロッキーマ脈の一脈眼前に聳立し、風景頗る佳である。三時二十五分レベルストーク驛著、約二十分の停車時間を利用し、驛外の小丘に登り觀れば、前路には雪峰重疊をぐるにロッキーマの雄大を想はしめた。四時五十五分アルバート・カニオンに達し、乗客をして此の深淵の觀を擅にせしむる爲め、汽車五分間停車す。鬱黒の松林、千丈の懸崖を覆ひ、高峰雲際に峙ち、深谷急湍を吐き、壯觀言語に絶した。夕刻ヘクターの最高地に在る螺旋路を通過し夜中ロッキーマを越えて、翌十日午前二時半其東方山腹の小村バンフに著した。汽車は此驛に約十二時間駐車すべきを以て、午前九時半親王は一行を隨へて自動車を驅り、避暑旅館バンフ・ホテルの宏大なる設備を觀、轉じて硫黃

アルバ
ート・カ
ニオン
の景

バンフ遊覽

硫黄浴湯

窟を訪はれた、窟内硫黄泉を湛へ、其湧出量毎時一萬五千ガロン(約三百八十石)と稱し、窟外には長さ一町幅二十間許の一大浴場の設がある。夫より博物館、動物園、牧場等を巡覽して午後一時列車に還られ、二時發車、ロッキー山系を離れて廣漠たるアルバータの平原に入り、二時四十五分人口八萬を有するガルガリーに著した。停まること二十五分にして同地發、特に支線に入りて南下し、六時半ハイリヅア著、明朝附近の大牧場を訪はんが爲め、同夜は此驛に於て汽車内に泊せられた。

大牧場視察

翌十一日午前八時半接伴員及隨行員一同を隨へ、自動車にてハイリヅアの西方約二十七哩に在る加奈陀有數の大牧場に向はれた。途上目を遮るものとはなく、只茫漠たる平野長濤の如く起伏し、枯草風に靡きて牛馬の處々に遊べるを見るのみである。十一時牧場に近づけば、場主デョーデレーン來り迎へ、其案内に依つて各區を巡覽し、午食後記念撮影を爲し、尙ほ附近の牧場を觀覽の上歸途に就かれ、午後四時十五分列車に歸著、ガルガリー迄引還して本線に入り、五時五十分東に向つて出發せられた。此日車内に於て、日本郵船會社汽船平野

シユーピア
リア湖畔

丸が獨逸潜水艦の爲に撃沈せられたりとの報に接した。

十二日午後十時加奈陀に於て最も繁盛なりと云はる、ウイニペグ市を過ぎ、翌十三日午後零時四十五分シユーピアリア湖畔のフォート・ウイリアム著、浮田領事は此地にて御別を告げて引返し、オッタワ總領事古谷重綱病氣靜養中なるを以て、公使館三等書記官岩手嘉雄代つて隨行した。汽車は湖畔に沿ひて東走、沿道人煙少く、湖面靜にして水眠るが如くである。十四日午前十一時二十分サッドベリー驛より支線に入ること少許、インターナショナル・ニッケル會社を訪はる。同社は其所産實に世界需用の八割を供給すと稱せらる、世界最大のニッケル熔鑛所にして、一ヶ月の熔鑛量十萬五千噸に達して居る。御著車と同時に社長エー・デー・マイルス及重役數名出迎して、熔鑛爐、反射爐、諸工場並に採鑛所等を案内した。午食後社長に賜品並に記念撮影の事あり、午後四時四十分同所を去り、再びサッドベリーに還り、八時十分同驛を發して南下、翌十五日朝窓外を望めば、滿目の風光宛然故國に在るが如く、秋色正に深くして山姿水容ぞろに木曾、日光を偲ばしめた。

ニッケル會
社視察

ナイアガラ
瀑布の觀覽

午前十時ナイアガラ瀑布に近きヴィクトリアパーク驛に著すれば、ナイアガラ電力會社副社長にして、トロント市の富豪たるサー・ヘンリー・ペラット數臺の自動車を用意して奉迎し、一行は之に分乗して加奈陀と北米合衆國との間に架せられたる國境の長橋を渡りて米領に入り、ナイアガラの急湍に沿ひて上りつ、ゴート・アイランドより米領ナイアガラ瀑布を俯瞰し、去つて加奈陀ナイアガラを望み、ニューヨーク町を巡覽、午食後トロント電力會社の配電所等を觀て、午後五時ヴィクトリアパーク驛發、同八時トロント市を通過した。

明くれば十月十六日は親王の御誕辰に相當し、隨行員一同恭しく賀意を表した。午前八時半加奈陀中央政府所在地オッタワ著、驛に隣せる旅館に入り、ヴァンクレーヴァ出發以來九日目にして、初めて入浴の快を得られた。此日接伴員に勳章及御寫眞を授與せられ、特別列車を提供せる鐵道會社及社員にも夫々賜品があつた。午後一時二十分加奈陀政府の總理大臣代理たる商務大臣サー・デヨード・フォスタ侯候し、御一行を午餐に招待し、宴に陪するもの、大臣八名及米白支等の總領事等數名であつた。午後十時同地發十七日午前七時五十分クエベ

オッタワ御
著

クエベック
御著

ハリファッ
クス軍港に
向はる

ツク著、旅館シャトール・フロンテナックに入り、午前中は休養せられ、午後市内及世界最大橋の一なるクエベック橋など巡覽の後、接伴員サー・デヨウセフ・ポウプ及隨行員を隨へ、當時此地に滞留中なる加奈陀總督デヴォンシャ公を訪問し、茶菓の饗應を受けて六時四十分歸館せられた。翌十八日午前中は近郊遊覽あり午後列車内に歸還、二時四十五分發車、ハリファックス軍港に向はれた。今回の御渡英に關しては對敵警戒の要を慮り、英國官憲は嚴に祕密を保ち、加奈陀御旅行の後半期に至り、漸く御出帆地のハリファックスなることを洩らした程であつた。

午後五時同軍港の棧橋に著すれば、御召艦オルグイエト既に在り、軍港先任將官ストーニ海軍中將、運輸指揮官チャールス海軍少將及御召艦の艦長イングランド海軍大佐等車前に奉迎し、直に御召艦に案内した。老軀を力めて此處迄隨伴し、熱誠克く其任を盡したる接伴員サー・デヨウセフ・ポウプは親王の優詔に感激し、懇ろに別を告げて艦を辭し去り、警衛の諸員も亦退去した。

十月二十日午前九時艦は棧橋を離れて出港位置に投錨した。岩手書記官は之

御召艦オル
グイエト

敵潜水艦出
没

に先立ちて辭去し、在泊英艦ハイフライヤ及アイシス兩艦長、當地知事等伺候して敬意を表した。當時ハリファックス港外には敵潜水艦の出没頻りにして、最近一週間内に於て、港外二十哩の近きより一千哩の遠きに互り、歐洲航路上に於て、汽船の敵潜水艦を發見し、又は之に襲撃せられたること、五ヶ所に達したりとの報あり、海上の危険測るべからず、同港内外の防備頗る嚴重であつた。

ハリファッ
クス出港

事態斯の如くなるを以て、英國海軍官憲の親王御乗艦警護に關する用意は極めて周到にして、御乗艦出港に先立ち港口水路の掃海を行ひ、四隻の汽艇より成る先驅部隊及二隻の水上飛行機は先發して海上の危険を掃ひ、御乗艦が特に日没時を選び午後五時出港するや、潜水艦追撃艇二隻艦に近く先行して、夜に入る迄警衛の任に當つた。御乗艦に於ても亦警戒を嚴にし、燈光の外に漏るゝを防ぎ、砲員は砲に裝填して射撃の姿勢を保ち、見張員は海面を凝視して一點の微をだに見逃さざらんとし、兩舷には機雷を切り掃ふ爲めバラヴェーンを曳行し、尙ほ港口を出づるや、潜水艦の危険を避くる航法たるジグザグ航走を始

航路警戒

めた。

元帥刀と御
親書

親王は御乗艦後、元帥刀及徽章は別室に納めて固く錠を施し、天皇の御親書は自身之を護持せられしが、出港以來敵潜水艦に關する警報に接すること三回なりしも、敵は西班牙沿岸方面に潜在するもの、如く、加ふるに海上概して平穩にして、途中何の異變もなく十月二十七日爽味英吉利海峡に近づいた。

警護驅逐艦

是より先き西經十五度の線上に到達せば、出迎護衛の爲め驅逐艦の本艦を待つ約ありしも、此日朝來濛氣の爲め之を發見せず、暫時針路を反轉して搜索中恰も好し濛氣少しく晴るゝや、午前九時五十分二隻の英國驅逐艦西方より接近し來るに會し、爾後兩艦は御乗艦の兩側斜前方に位置して、共にジグザク航路を取り護衛の任に當つた。二十八日午前六時プリマス港外に達して護衛驅逐艦と別れ、曳船により水道内に入り、八時二十分内港繫留場に横付けした。港内には大小の船艇在泊し、殊に迷彩法を施せるもの多かりしは、戰時氣分の更に濃厚なるを覚えしめた。

プリマス港
御著

午前九時四十五分英國駐劄特命全權大使子爵珍田捨己は、大使館附陸海軍武

コンノート
親王其他御
出迎へ盛大

官及大使館書記官等を隨へ來艦伺候し、十時十五分アーサー・オブ・コンノート親王は接伴員陸軍中將サー・ウィリアム・バルトニー、侍從武官海軍中佐サー・チャールス・カスト其他を從へ、御迎の爲め來艦せられ、尋で同地方縣監フォルテスキュー伯爵及デヴォンポート鎮守府司令長官、南部地方司令長官、プリマス軍管區司令官等の海陸軍將官も亦伺候した。

かくて十時四十五分コンノート親王の誘導に依り、オルヴィエトを退艦せらるれば、儀仗隊は君が代を奏し、プリマス及デヴォンポート兩市長は棧橋に奉迎した。親王は儀仗隊を親閲せられ、終つてコンノート親王と共に接伴員、大使館員、隨行員等を隨へ、特に用意せられたる宮廷列車に依り、十一時四十五分發車、二百三十哩の長程を僅々四時間にて走破し、午後三時四十五分無事倫敦バツデントン停車場に著車せられた。

バツデイン
トン停車場
の壯觀

バツデイントン停車場には、英國皇帝を初め、皇族、貴族、顯官等多數出迎への爲め待ち受け、場内各所には日英兩國の國旗交叉せられ、軍樂隊、儀仗隊の劍光帽影は、歩廊に敷ける深紅の絨氈を彩りて滿目壯麗、そゞろに兩國國交

プリマス御
發倫敦御著

英皇帝の御
出迎へ

の敦厚なるを想はしめた。我國歌の奏樂裏に、親王は徐に列車より下り立たれ、皇帝及コンノート公との堅き御握手、隨行員の御披露、儀仗隊の親閲、奉迎の英政府閣僚、貴族、將官及日本大使館員、總領事以下領事館員、在留陸海軍武官其他邦人代表者等への御會釋の後、皇帝及コンノート公父子と四頭立宮廷儀裝馬車に御同乗、接伴員及隨行員を隨へ、儀仗騎兵に前後を衛られて御旅館バツキナム宮に向はるれば、沿道の市民帽を脱し、手巾を振りて、親王の御著英を歡び迎へた。

バツキナム
宮御著

午後四時半バツキナム宮御著、皇后にはメアリー内親王を伴ひ出迎へられ、親王は四五の宮内大官を御引見後、兩陛下の御誘導に依り奥殿に入られ、井上南郷兩隨員及足立屬のみ殿中に留まり、他は英宮廷にて用意せられたるホテル・ルーベンスに宿泊する事となつた。午後六時隨行員一同再び同宮に參集し、明日舉行せらるべき捧呈式の豫習行はれ、七時半退出、此時英國皇帝より親王にヴィクトリア頸飾章の御贈進ありたる外、隨行員一同に對して夫々敍勳があつた。同夜親王は皇帝、皇后、メアリー内親王、アーサー・オブ・コンノート親王及

ヴィクトリ
ア頸飾章

同妃と共に非公式晚餐の卓に就かれしが、英國皇太子は英軍に従ひ、歐洲西部戦線に在りて此宴に臨まれず、首相、外相亦ヴェルサイユに於ける聯合國會議に參列中なる爲め不參した。

明くれば十月二十九日午前十時、バツキナム宮正殿に於て、嚴肅なる儀禮に依り捧呈の式は行はれた。殿内正面には皇帝、皇后を中央に、メアリー内親王、コンノート公、アーサー・オブ・コンノート親王並に同妃、海陸軍元帥及宮内大官等左右に侍立し、我隨行員は珍田大使の呼稱に従ひ進入二列に竝立し、親王は皇帝の前に進まれて、此度の御使命に關し言上あり、恭しく我天皇の御親書、元帥刀及元帥徽章を贈呈せられ、皇帝より懇なる御挨拶ありて式を終り、親王御退出、隨行員一同之に従つた。

式後親王は、コンノート親王、接伴員、隨行員並に我大使以下大使館員等と共に記念の寫眞を撮られ、終つてコンノート親王と共に接伴員、隨行員を隨へ、ウールウィッチ練兵場に赴き砲兵隊を閱兵せられた。同所には陸軍參謀總長サー・ウイリヤム・ロバトスン大將等先著し、練兵場旗竿には我軍艦旗を掲げ、軍隊

元帥刀捧呈式

砲兵隊閱兵

砲工士官學校等視察

バツキナム宮殿の大晚餐會

英皇室の好誼

は我國歌を奏して奉迎した。御閱兵終つて砲兵隊の毒瓦斯防禦其他の諸教練を觀覽せられ、更に附近の砲工士官學校に赴き、生徒の諸作業及校内設備等を視察の上、同所に於て砲兵科士官數百名と共に晝餐を攝られ、次で同地砲兵工廠内諸工場を巡覽、午後四時工廠を出て、歸途コンノート公外二三の皇族を訪問せられ、尙コンノート親王邸に立寄り、御茶の饗應を享けられた。

此日午後八時半よりバツキナム宮に於て、親王を主賓とする大晚餐會が催された。英國宮中の正式晚餐は、歐洲大戰勃發以來中絶すること茲に四個年、親王今回の御渡英に際し、初めて開かれたりと言はれ、饗宴用の貴重なる諸調度は、ウインザー宮の地下室に格納しありしを、特に搬出して本日の用に供せられたるものにして、我皇室並に親王の御使命に對する英國皇室の深厚なる好誼の程を窺ふに餘りあつた。

此夜市中は戦時消燈令に依り暗黒なるに、會場たる大食堂内は、電燈燦然金色の調度に映じて不夜城の如く、久しく装ひを凝さざりし貴婦人等の、美粧麗裝花の如きも珍らしく、月宮殿の夜宴も斯くやと思はれしが、室内の盛觀に引

調度の善美
と獻立の質
素

較べて、簡易質素なる晚餐の獻立は、卓上に戰時氣分を漲らしめ、戰雲未だ斂
まらざる大西洋上幾多の危険を冒して、遠く此國に使せられたる日本皇族慰勞
の宴として、最も記念すべきものであつた。食後の歡談時餘に互り、英國兩陛
下の歡待極めて篤く、感激の裡に宴を閉ぢたるは、十一時過ぐる頃であつた。
此日井上隨行員は電報にて、親王御使命の首尾よく終りたる旨を宮内大臣に宛
て報告した。

英國陸軍諸
演習觀覽

十月三十日、親王はコンノート親王と共に接伴員及隨行員井上、松平、高橋
三隨行員を除くを隨へ、午前十時四十分御出門、正午オルダシヨット練兵場著、
ロバトスン大將及同所の司令官マレイ陸軍中將等の奉迎を受け、歩兵の塹壕構
築及突撃練習等御覽の後、司令官官舎に於て午餐の饗を享け、食後實戰的の塹
壕突撃教練を視察せられ、午後五時一旦歸館の上、更に首相ロイド・デョーデ、
外相アーサー・ヂェイ・バルフォア、海相サー・イー・シー・ゲデイス、陸相ロード・ミル
ナア、樞密院議長ロード・カーズン、侍從長子爵サンドハースト等の諸官を回訪
せられ、午後八時十分三度御出門、外務大臣開催の晚餐會に臨まれ、十一時歸

首相其他を
御訪問

館せられた。

天長節祝賀

英國皇太子
に勳章贈進

翌三十一日は我天長節祝日につき、コンノート公父子來賀せられ、尋で親王
は皇帝、皇后と對面、兩陛下よりは天長節祝日に對する祝賀の御挨拶あり、親
王は我天皇の思召に依り、目下戰地に在る英國皇太子に、菊花大綬章を御贈進
あり度旨申出られたる處、皇帝は非常なる歡びを以て、皇太子に代り親ら之を
受納せられ、次で皇后親しく親王を案内ありて、御座所等を一覽に供せられた。
右終つて親王は大使館に於ける我陛下の御眞影遙拜式に參列せられ、館員及主
なる在留邦人に謁を賜ひて後御歸館、午後一時コンノート公の午餐會に臨まれ
しが、此會は單純ながらも親交を表はせる極めて温かき宴であつた。

午後二時半宴席を辭し、アーサー・オブ・コンノート親王と御同列にて、ビギン
ヒルに倫敦警備航空隊を訪はれ、飛行機の編隊運動及對抗戰闘演習等を御覽せ
られしが、演習員中には屢歐洲戰場に馳驅せる勇士あり、其飛行振りの勇壯機
敏なる、思はず觀者をして手に汗を握らしめた。續いてタンクの運動を觀覽せ
られたる上、一旦歸館あり、夜に入りクラリツヂ・ホテルに於ける珍田大使主催

倫敦警備航
空隊視察

の天長節奉祝晩餐會に臨まれ、コンノート親王も亦臨席せられた。

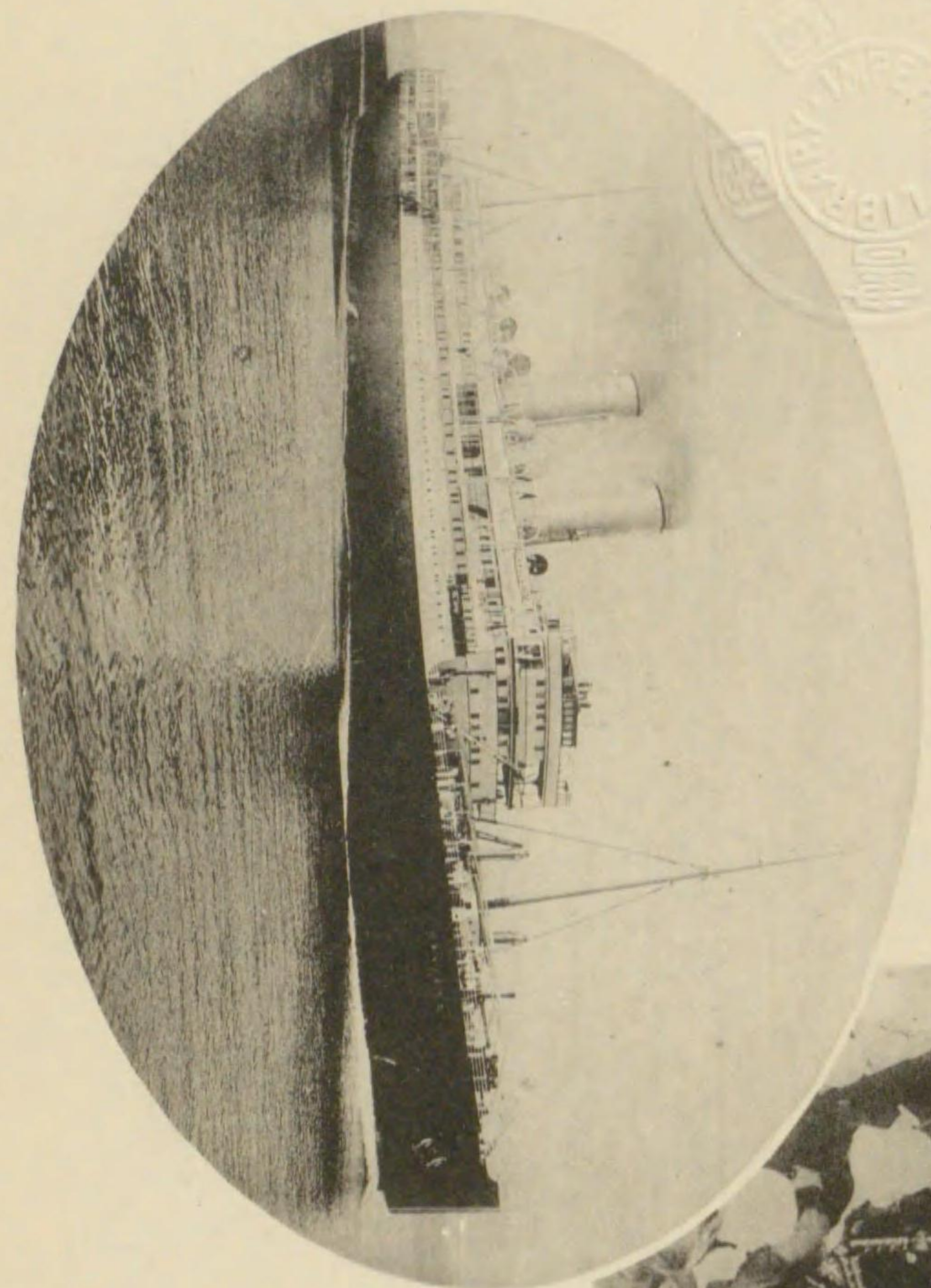
陸軍外科病院觀覽

翌十一月一日午前、コンノート親王と共に諸員を隨へ、シエバヅ・ブツシなる陸軍外科病院に患者を慰問し、各部の施設を視察せられしが、葡萄牙廢王エマヌエルが、同院職員として此日親王を迎へしは、特に人目をひき、感慨を深からしむるものがあつた。午後零時二十五分公式儀禮に依り、コンノート親王と

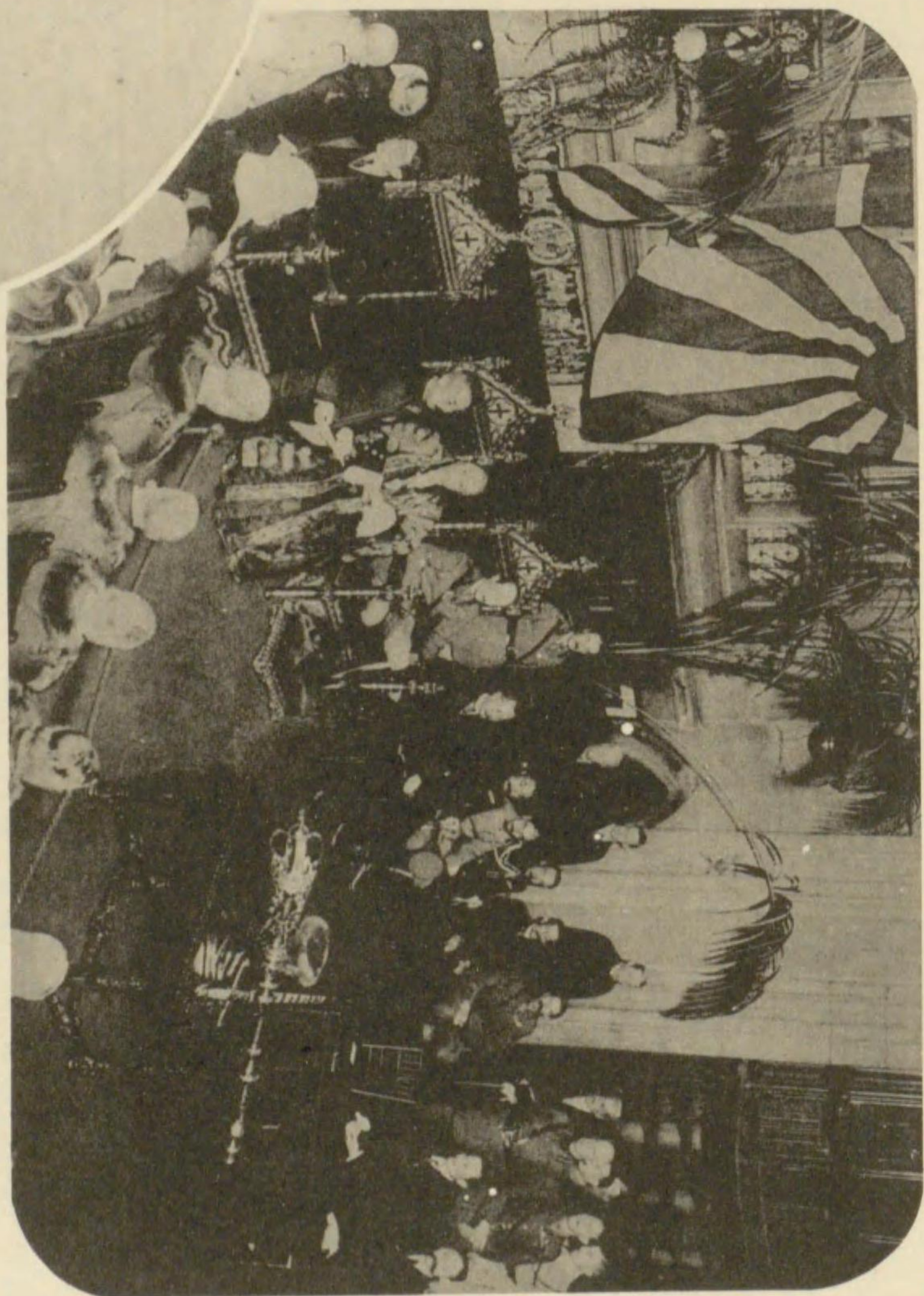
倫敦市長の歡迎式

式場の光景

儀裝馬車に御同乗、接伴員及隨行員を隨へて御旅館發、倫敦市公會堂に向はれ、儀仗隊の君が代奏樂に迎へられて同所著、市長、助役、市會議長及同議員等、古代より傳來の公式禮衣を裝ひて車寄に迎へ、嚴かなる行列をなして式場に著かれ、時此、市民は場内に群集して歡迎した。式場にては市長中央に坐し、親王を右に、コンノート親王を左に、他の諸員一同所定の位置に著く。此時市長は親王に歡迎詞を捧呈する決議文及歡迎の詞並に市長より記念として黄金筐を捧呈するの辭を朗讀し、之に對し親王は答辭を朗讀せられ、式終つて直に市長公邸に於ける市の午餐會に臨まれた。來會者約三百名、席上市長の歡迎の辭及親王の御答辭ありて、午後四時歸館せられしが、此日往復の路上、市民は脱帽し



トエイザルヲ艦乗御英渡御



迎歡ラケケ於ニ堂會公市敦倫

總理大臣の
晩餐會

英國先帝の
靈廟禮拜

英國大艦隊
訪問の爲め
倫敦御發

ダルメニ停
車場御著

て敬意を表した。此夜又總理大臣の晩餐會に赴かれしが、同大臣は恰も渡佛して不在につき、ロード・カーズン之に代つて款待の誠を盡した。

二日午前隨行員及接伴員の一部を隨へてウインザー宮に赴かれ、英國先帝エドワード七世の靈廟に花環を供へて敬意を表したる上倫敦に御歸還、引つゞきコンノート親王の午餐會に出席せられ、午後六時四十五分よりは大使館に於て接伴員並に大使以下大使館員に晩餐を賜ひ、隨行員一同之に陪席した。宴了つて御歸館後、十時五十五分宮廷列車にてユーストン停車場發、コンノート親王の御案内にて英國大艦隊訪問の爲めスコットランドに向はれた。小栗、雨宮、南郷、山縣、前田の各隨行員、カスト海軍中佐、ペンブローク陸軍中佐の兩接伴員、コンノート親王の御附武官シンクレア陸軍大尉及大使館附海軍輔佐官海軍中佐濱野英次郎等隨從し、珍田大使以下館員、殘留せる接伴員、隨行員、在倫敦の主なる邦人等同停車場に奉送した。

明くれば十一月三日午前八時半、スコットランドの首府エディンバラに近きダルメニ停車場著、暫時休息の後、スコットランド沿岸司令長官サー・セシル・バ

大艦隊旗艦
御訪問

司令長官ビ
ーティ大將

ーネイ大將及大艦隊派遣の接待員ニコルスン少將等の出迎へを受け、ポート・エドガ棧橋より汽艇に乗り、十時二十分フォース河口に碇泊せる大艦隊の旗艦クイーン・エリザベスを訪問せられた。同艦上には總衛兵整列し、軍樂隊の我國歌吹奏裡に、大艦隊司令長官サー・デイヴィッド・ビーティ大將幕僚を率ゐて舷門に奉迎し、尋で後甲板に參集せる同大將麾下の各艦隊司令長官、司令官及大艦隊に乗艦中の日本海軍將校四名に謁を賜ひ、慰問の御挨拶等ありて約十五分間の後退艦せられた。

大艦隊に於
ける午餐

巡洋戰艦隊
司令長官ベ
ケナム中將

夫よりロサイス海軍工廠、驅逐艦及最新大型潜水艦等を巡覽の上、御一行二組に分れ、兩殿下、小栗、前田、南郷の三隨行員及カスト接待員の一團は、第四戰艦隊司令官サー・モンタギュー・ブラウニング中將の接待に依り、又他の一團は第二戰艦隊司令官サー・ジョン・エム・デロベック中將と共に、各其旗艦に於て午餐の卓に就き、餐後一行は巡洋戰艦隊旗艦ライオンを訪ひ、同艦隊司令官サー・ウィリヤム・シー・ペケナム中將の鄭重なる奉迎を受けられた。同中將は嘗て明治三十七八年戰役の際、我艦隊の一艦に乗組み、具に研究を積みたる人に

米國艦隊司
令官御訪問

大艦隊に於
ける晚餐會

ビーティ大
將の卓辭

して、此日親王に對する儀禮懇懇を極め、其言動の恭謹誠實なる、我隨行員をして肅然として我國古武士の風格を想ひ起さしめた程であつた。同艦に於て砲塔上よりする偵察用飛行機の飛揚等を御覽の後、轉じて第六戰艦隊旗艦ニュー・ヨークに米國司令官ヒュー・ロッドマン少將を訪はれ、御一行は一旦上陸して、列車内に少憩の上、再び午餐の際に於ける如く二組に分れ、午後八時親王の一團は大艦隊旗艦の艦上に催されたるビーティ大將の晚餐會に臨み、他の一團は巡洋戰艦隊旗艦に於けるペケナム中將の招宴に列した。晚餐の席上ビーティ大將は左記要旨の辭を述べて親王の爲めに杯を舉げ、親王は之に答へて乾杯せられた。

同盟國の海軍大將たる宮殿下を此艦上に歓迎するを得たるは、吾人の歡喜光榮とする處にして、遠路態々御訪問の勞を拜謝す。

開戦以來英國艦隊に勤務中の日本將校は、我等と共に其職務に精勵し、殉國的精神の實現に於て何等我等と異なるなく、其行爲は眞に賞讚に値す、彼のクイーン・メアリーに於て戰死せし下村中佐、ヴァンガードに於て殉職せし江渡

大佐は、前言を實證すると共に、日英同盟の實蹟を確證するものにして、吾人は常に深厚なる追悼の意を表し、敬慕措く能はざる處なり。最後に吾人は此大戦中、英國海軍が日本海軍より學びしところ尠からざりしを言明し、特に感謝の意を表す。

食後ビーテイ大將等に賜品あり、午後十時艦を辭して上陸、此夜は列車内に宿泊せられた。

四日午前十時列車を出て、十一時二十分風雨を冒して三度大艦隊旗艦を訪ひ、同艦上に於てベケナム中將以下十四名の艦隊將校に勳章を親授せられ、式終つて午前十一時嘗て英國皇帝が大艦隊巡閱の際、其乗用に供せられたる舊式驅逐艦オークに移乘し、フォース橋を夾みて戦隊別に整然碇泊せる大艦隊を巡視せられた。艦隊は歴戦茲に四年有餘の久しきに亙るも、士氣益旺盛、軍紀極めて嚴肅、折柄風雨激しく雨滴軍衣の裏に徹するにも拘はらず、凜然上甲板に整列せる艦員は、我國歌を奏しつゝ、親王を迎へて敬意を表した。

午後零時四十五分御巡視了りて一行を二分し、親王の一隊はバーネイ大將の

英國海軍將校に勳章親授

風雨を冒し大艦隊巡視

バーネイ大將官邸の午餐

官邸に於て、他の一隊は第一巡洋戦隊旗艦に於て、午餐の宴に列し、後同艦に於て一行再び會同し、更に航空戦隊旗艦を訪問、最新式飛行機母艦アーガスを見學せられ、午後六時同艦を辭して大艦隊訪問を終り、午後十時汽車にて倫敦に向け歸途に就かせられた。發車に先ち、ビーテイ司令長官が、告別の爲め車内に來訪せしに對し、親王は其の厚遇を謝し英國大艦隊の武運長久を祈る旨を述べられた。

倫敦御歸著

大陸に向け倫敦御發

英國皇帝の御見送

五日午前八時倫敦ユーストン停車場著、直にバツキナム宮に御歸館、皇帝皇后の特に親王の爲めに設けられたる告別の午餐に臨まれ、御滯英中の款待に對し深き謝意を表して告別せられ、午後一時四十分御出門、大陸御旅行の爲めウイクトリア停車場に向はれた。驛内外に於ける奉送の光景は御著京の時の如く、皇帝は親王の御辭退ありたるに拘はらず、馬車に同乗して停車場迄見送られ、コンノート公も亦來り送られ、其他諸員奉送の裡に、親王には皇帝竝にコンノート公に御暇乞ありて、アーサー・オブ・コンノート親王御同伴、接伴員の一部、珍田大使、飯田、田中兩大使館附武官、吉田大使館一等書記官及隨行員(松平、

高橋兩隨行員は流行性感冒に罹り療養の爲め倫敦に留まる等隨從、宮廷列車により午後一時五十分フォークストンに向け同停車場を出發せられ、爰に全く公式御滯英を終はられた。

第十六章 特命御渡英 下

英佛海峡の警戒

倫敦を出發せられたる親王御一行は午後三時四十五分フォークストン著、此處にてコンノート親王及大使以下大使館員並に接伴員バルトニー陸軍中將等に別を告げ、軍隊輸送船インヴァイクタに乗船し、英佛海峡を横ぎつて佛國に向はれしが、當時敵潜水艦の危険尙ほ大なりしを以て、同船に於ては萬一に備ふる爲め渡航者に救命衫を著用せしめた。此日海峡浪穩にして僅に長濤あり、我占守島附近に相當する高緯度の地とて、時に日既に没して海上暗澹、前方ブローニユ方面には敵襲を警むる探照燈光の左右に搖動するを見た。午後五時四十分分船ブローニユ港棧橋に横付けすれば、駐佛大使松井慶四郎、大使館附武官海軍大佐松村菊勇、同陸軍歩兵大佐永井來、大使館三等書記官蘆田均及佛國側より海軍少將ルネ・ボーサン以下三名の接伴員等奉迎し、棧橋上には佛英兩國の儀仗隊軍樂隊を伴ひて整列、我國歌を奏して親王を迎へた。佛兵の鐵兜を頂き、青き外套を纏ひたるが、殊に注目を引き、久しく塹壕内にありて櫛風沐雨、具

佛國ブローニユ港に於ける歡迎

英國侍從武
官カスト

さに嘗め來りたる辛酸の痕著しき中にも、彼等不撓の英氣は嚴乎として眉宇の間に顯はれ、薄暗き燈光影裏壯烈の氣身に浸むを覺えしめた。
英國皇帝の旨を奉じて接伴に最も出精し、且つ此處迄隨從し來りたる侍從武官サー・チャールス・カストは此地にて告別辭去した。

特別列車に
て巴里御著

午後六時二十五分ブローニュ發、汽車は佛國政府が特に親王歐洲大陸御巡歴中の專用に供したる特別列車にして、十一時巴里著、直にオテル・ド・クリオンに入られた。

大統領ボア
ンカレーを
御訪問

翌六日午前大使館員等の伺候を受け、午後零時半隨行員一同を從へ、大統領ポアンカレーをエリゼー宮に訪はれた。大統領及夫人は午後一時親王を主賓とする午餐會を催し、外務、海軍兩大臣、前日本駐劄佛國大使ゼラード、松井大使、長岡大使館參事官、松村、永井兩武官、隨行員及接伴員等席に陪した。

聯合軍總司
令部訪問の
爲め巴里御
發

七日午前八時二十分隨行員、接伴員、永井武官、蘆田書記官等を隨へ、聯合軍總司令官フォッシュ元帥より案内の爲め特派せられたる總司令部參謀陸軍少將ル・ロンドの案内にて、巴里北停車場發、北走約一時間にして九時三十五分サ

聯合軍總司
令部所在地
サンリ村

ンリ停車場著、更に自動車を馳すること五分時にして聯合軍總司令部に到着した。此地は叢爾たる一小村落に過ぎず、然かも此大戰以來其名の著しきは、營にフォッシュ元帥の本營所在の地たるが故のみにあらず、前佛軍總司令官ヂョツフル元帥の果敢なる大逆襲に依り、獨軍をして怨を呑んで其壯圖を放棄せしめたるマルヌの大合戦に於て、佛軍左翼が獨の右翼軍の包圍に會ひ、惡戰苦闘三晝夜、遂に敵を撃退したる大激戦は、實に此村を最左翼として行はれたるが爲めであつた。總司令部は僅に一人の兵士門を衛り、構内寂々、寒鳥枯梢に啼くの靜かさである。聯合軍總參謀長ウエイガンド中將戸口に出で、親王を迎へ、一室を隔て、元帥の居室に導きしが、光景全く豫想に反し、一同其簡易素朴に驚いた。元帥は親王を室の入口に迎へて來訪の厚意を謝し、親王は深く元帥の辛勞を稿ひ且戦局の好轉を祝され、元帥、ウエイガンド中將及ロンド少將に勳章を贈られた。元帥は起つて壁間の戦場地圖を指して昨今の戦況を説明し、最後に右手を揚げ拳を示して曰く、爾後の戦法只之れあるのみと、凜乎たる此一言意氣正に敵を呑むの概があつた。會見約十分時にして辭して汽車に投じ、東

總司令官フ
オッシュ元
帥と會見

ソアツソン
戦跡視察

方ソアツソン戦場に向ひ、午後零時半同地に著せられた。抑も此ソアツソンは奇しき戦跡にして、大正三年大戦の劈頭、獨軍の白耳義を一蹴して直に佛境に殺到するや、佛軍之を支ふる能はず、退却又退却、遂に此地も亦敵手に歸し、翌四年一月一時奪還せしも、旬日にして再び敵に獲られ、爾來獨軍の占有に委すること二星霜、大正六年春其一齊退却に乗じて二度之を回復した。然るに七年五月獨軍掉尾の大攻撃に會ひ、三度奪取せられしが、フォツシュ總司令官の神謀終に獨軍に再び起つ能はざる大打撃を與へ、同月末確實に聯合軍の手に回收するを得たと云ふ實に重大なる史實を残した處であつた。

ソアツソンより軍用自動車に乗りエーン河畔に出で、所謂シエマン・ド・ダムの戦場に劇戦の跡を弔はれた。橋は落ちて危うげなる假橋を架し、劍銃、鐵兜、擲彈の類、雜然泥中に散亂し、名ばかりの墓標は到る所に點在して纔に勇士の英魂を慰め、斃馬遠近に横はり、彈痕隨所に存し、光景凄慘を極めて居る。埋没遺棄せられたる火器の類、不時爆發の虞なきにあらざるを以て、意を用ゐて歩みつゝ、ロンド少將の詳細なる説明に依り戰場巡覽後、午後二時同地を去つ

シエマン・
ド・ダム戦
跡の悲愴ランス戦跡
の慘狀

て、三時半ランスに入られた。此兩地間の道路は國道にして、兩軍爭奪の重要交通路たり、路傍の樹木砲火を受けて殆ど完きものなく、左右一望千里の廣野彈痕蜂巢の如く人行くべからず、所謂ノーマンス・ランドの稱さへあつた。ランスは著名の市にして、大正三年八月下旬一度獨軍に占領せられ、九月上旬マルヌの役に佛軍の手に復し、爾後攻略を免れしも、猛烈なる敵火に曝されて全市舊觀を留めず、殊に有名なる一大古刹は聖堂毀れ、崇巖地に委し、戦禍の慘害言ふに忍びざるものがあつた。四時十分ランスを出で、往路を引還せしが、途中日全く暮れて四顧暗澹、戦跡の夜氣惻々として人に迫るものがあつた。

五時四十分汽車に歸り、再び東走してヴェルダンに向ひ、翌朝八時其南方約五吉米に在る小驛に著、出迎への軍用自動車に移り、ミューズ河を渡りてヴェルダン要塞のストヴァイル堡壘に入り、ヴェルダン守城司令官ヴァレンタン少將に導かれて、錯綜せる鐵條網の間を潛り、砲火にて壊裂せる地表に動もすれば滑倒せんとしつゝ、漸くにして壘頂に達した。折柄滿天暗雲に鎖され、雨將に降らんとするの兆あり、殷々たる砲聲は時を隔て、塞上に轟き、偵察飛行機は

ヴェルダン
要塞視察

遠く飛んで雲雀の冲天に翔るが如く、彈著觀測用の繫留氣球は高く懸つて遙に敵陣を瞰下し、眼底に映するもの總て壯又凄である。

ヴェルダンの要塞はナンシー、エピナルの二塞と相俟つて、東隣の獨逸に備ふる堅砦にして、難攻不落と佛國の誇る處、這次大戰の間、獨の大軍の猛撃に耐へ、克く東方戦線の守りを完うすることを得た。守城司令官説明して曰く、大正五年二月、獨皇太子の率ゐる大軍忽として要塞正面に顯はれて攻撃を開始し、佛軍之を支ふる能はず、一部の堡壘其手に落ち、ヴェルダンの守り殆ど失はれんとした。佛軍驚駭、ペタン將軍をして多數の増援隊を併せて之を死守せしむ、爾來塞兵防戦最も努め、獨軍に多大の損害を與へしも、執拗なる敵の攻撃益猛烈を加へ、六月下旬にはヴェルダン市を距る僅に四千米突の地に迫り、要塞の運命累卵の危きに瀕したるに、恰も好し東方戰場に於て露軍の攻勢に轉するあり、英佛軍亦之に策應して、ソナム河畔なる獨軍の第一防禦線を突破したるを以て、要塞正面の敵は此等焦眉の急に赴く爲め、九仍の功を一簣に缺くの感みを遺しつゝ、勢を他に分ち、電撃の手を緩めた。獨

ヴェルダン
要塞攻防戦

獨軍の損害
五十三萬人

軍が茲に至れる四ヶ月の間に、此猫額大の地區に用ゐし兵力は實に四十四個師團に上り、損害五十三萬人と註せられた。亦以て此攻防戦の如何に慘烈なりしかを判知すべきである。爾後佛軍攻勢に移り、漸次喪へる處を恢復した。今一行の立つ處のヌーヴィル堡壘は最後迄頑守したる一小堡にして、其奮闘遂にヴェルダンをして金城鐵壁たるの實を舉げしめしは、感激すべき一大功績である。然かも敵は尙ほ全く此地を見棄てたるにあらず、昨日も敵彈の壘上に落下せるもの二十六を算した。

十時同堡壘を下り、途上戦禍の爲め荒廢せる村落を過ぎてヴェルダン市に入り、見る影もなく破壊せられたる一古寺の上に登りて市内を瞰下すれば、ミューズの流れは潺緩として不變の色を湛ふるも、全市荒廢、灰色の壁柱僅に家屋の名残りを留むるのみである。敵彈の暴威今尙ほ猖獗、彼處には數日前毒瓦斯彈落下して、一團百五十の兵を斃し、此處には昨日巨彈炸裂せりと、街上に徂來するもの悉く軍人にして、一市人の影をも認めない。

市内一巡後、正午守備第二軍司令部たる地下室を訪ひ、君が代の奏樂裏に司

ヴェルダン
市街の廢墟

米國出征軍
總帥パーシ
ング大將を
御訪問

佛國政府よ
り勳章贈呈

巴里發白耳
義に向はる

白耳義皇帝
行在所御訪
問

令官イルシヨ一中將以下に迎へられて午餐の饗を受け、食後汽車に還り、ヴェルダン方面地區總司令官たる米國出征軍總帥パーシング大將をスイリーの司令部に訪はれた。大將は恰も此日休戦條約の事に關し、招かれてフォッシュ元帥の許に赴き不在、麾下の米國第一軍司令官リヂエット將軍親王を迎へ、審かに戦況を説明した。三時戰場を去り、十時十分巴里著、直に旅館に歸泊せられた。十一月九日、佛國政府より親王及隨行員に夫々勳章の贈與あり、午後親王は日佛協會の主なる會員並に佛國海軍軍令部長及航空隊長官等の伺候を受け、夜十時コンノート親王と共に、隨行員の外永井大使館附陸軍武官及案内のため來著せる駐白公使安達峰一郎を從へ、北停車場發白耳義に向はれた。

十一月十日午前八時二十分ルーレル著、白國接伴員二名の出迎へを受け、此處より軍用自動車に依り、凸凹不規の石道を駛走すること約五十吉米にして、十一時二十分オスランド著、市内及獨軍の築造せるチルピッツ砲臺を觀覽の上、ブルーヂ市の近郊に在る白耳義皇帝の行在所に向はれた。午後一時行在所御著、皇帝皇后親しく車寄に出て迎へ、慇懃に接待せられた。親王は我天皇皇后の思

白耳義皇帝
の勇敢

ブルーヂ戦
跡

召に依り、皇帝に菊花章頸飾を、皇后に勳一等寶冠章を御贈進あり、皇帝も亦親王並に一行に對し勳章又は物品を贈られ、懇なる午餐の後親王は惜しき別れを告げて行在所を出られた。今回の大戦、白耳義は其國土の殆ど全部を獨逸軍の馬蹄に蹂躪され、皇帝は遂に佛國領土内に蒙塵するの已むなきに至られしも、不屈不撓、困苦を忍び、缺乏に耐へ、國民を率ゐて奮闘四個年餘、頃者漸次領土を恢復し、此處に移り來られしは實に一週日前にして、行在所と稱するも、地方一富家の別墅に少數の左右を從へて寄遇せらるゝに過ぎない。今朝迄もブルーヂの南東に當るガン市奪還戦に、親しく士卒を激勵せられつゝありしが、親王の御訪問を待受けらるべく、忽忙の時を割き、戎衣亂髪のまま、自動車を飛ばし歸還せられたのである。高貴の御身にして、斯の如く國難に直面し、獻身苦闘せらるゝは、他に其比を見ず、痛はしくも亦勇ましき次第である。

親王御一行は夫れよりブルーヂの戦跡を巡覽の後、ルーレルに在る汽車に歸られ、英軍の所在サン・カンタン方面に向はれた。十一日午前九時ハイミスに下車、英軍總帥ヘイグ元帥の特派せる案内の將校三名に迎へられ、こゝより一行

英軍總司令部を御訪問

英國皇太子と御會見

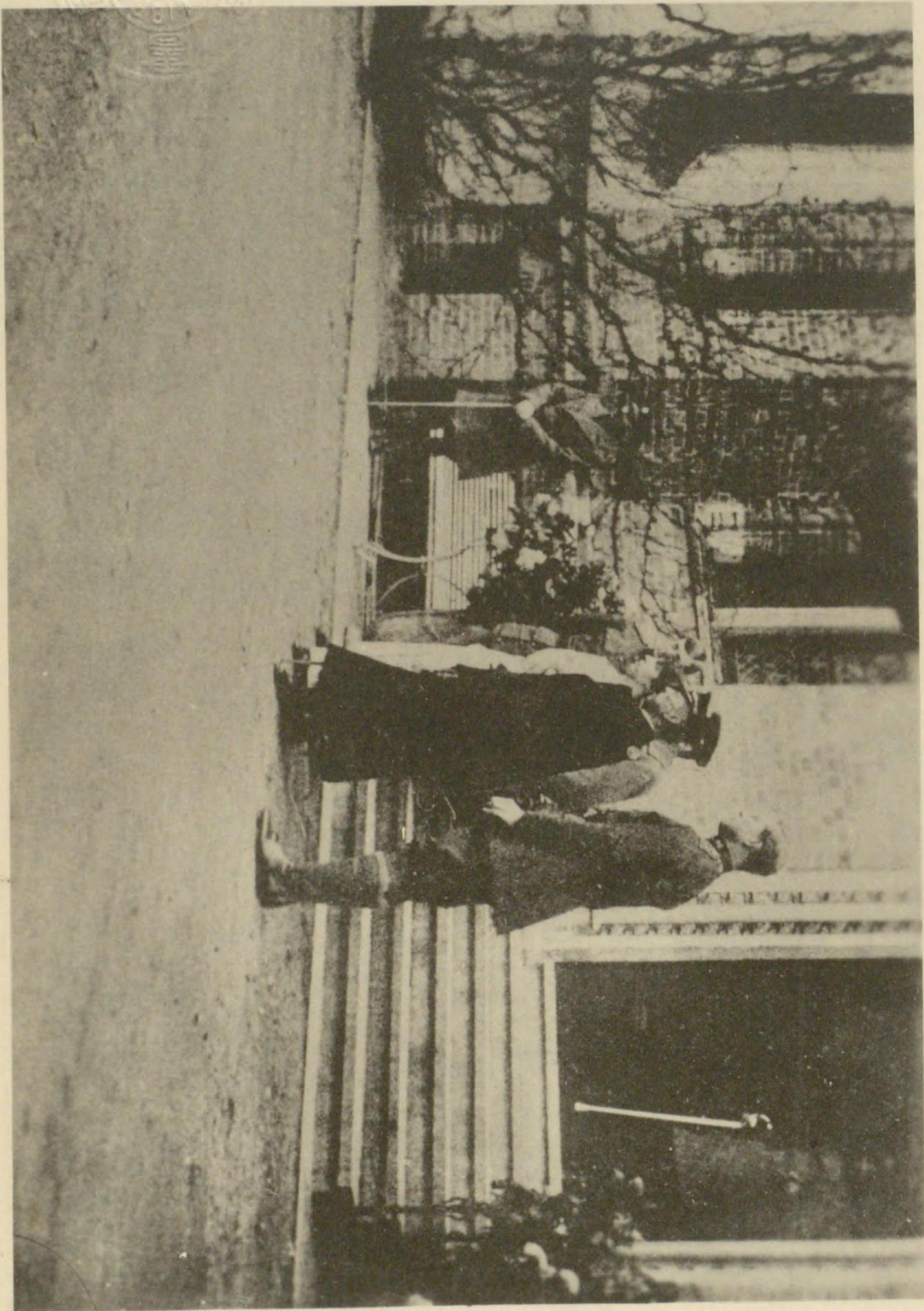
ヒンデンブルグ線視察

休戰條約成立

二組に分れ、兩親王の組はハーミス北方の戰場を視察したる後、汽車内に設けられたる英軍總司令部にヘイグ元帥を訪ひ、午餐を共にせられしが、此時元帥は親王に、本日午前十一時休戰條約の締結せられたることを申上げた。食後親王は此方面に従軍中の英國皇太子と會見せられ、又先に別れてハーミス南方の戰場を視察したる柴、小栗、兩中將の組を合せ、午後八時巴里に歸還せられた。

此日親王は獨軍最後の抵抗線なる所謂ヒンデンブルグ線の一部を視察せられたるが、地形誠に攻むるに難く守るに利あり、加ふるに防備の施設最も嚴重なる陣地にして、此處より前方を眺むれば、滿目總て彼我苦闘の跡ならざるなく、之を攻略せる聯合軍作戦の至難にして功績の至大なるを思はしめた。

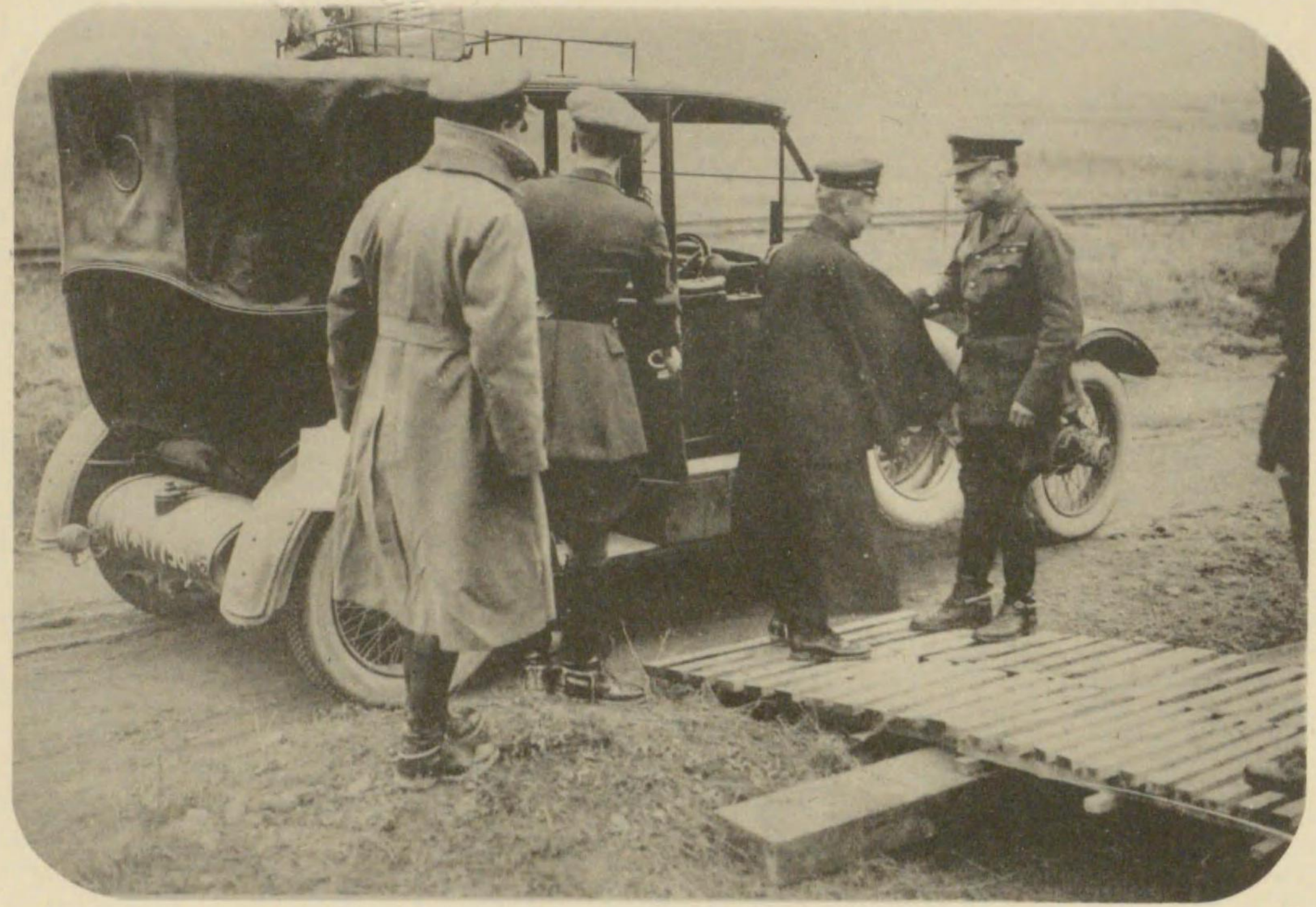
休戰條約成立の報巴里に達するや、全市民は歡極まりて殆ど手の舞ひ足の踏む處を知らず、滿都宛ら狂亂の巷と化したるが、十二日朝來一層其度を増し、御旅館クリオンの前面コンコルドには群集蟻集し、歡聲雷の如き中を彩旗舞ひ、自動車練り、此處に兒童と共に分捕砲を引廻はす白髮の老翁、彼處に松葉杖に



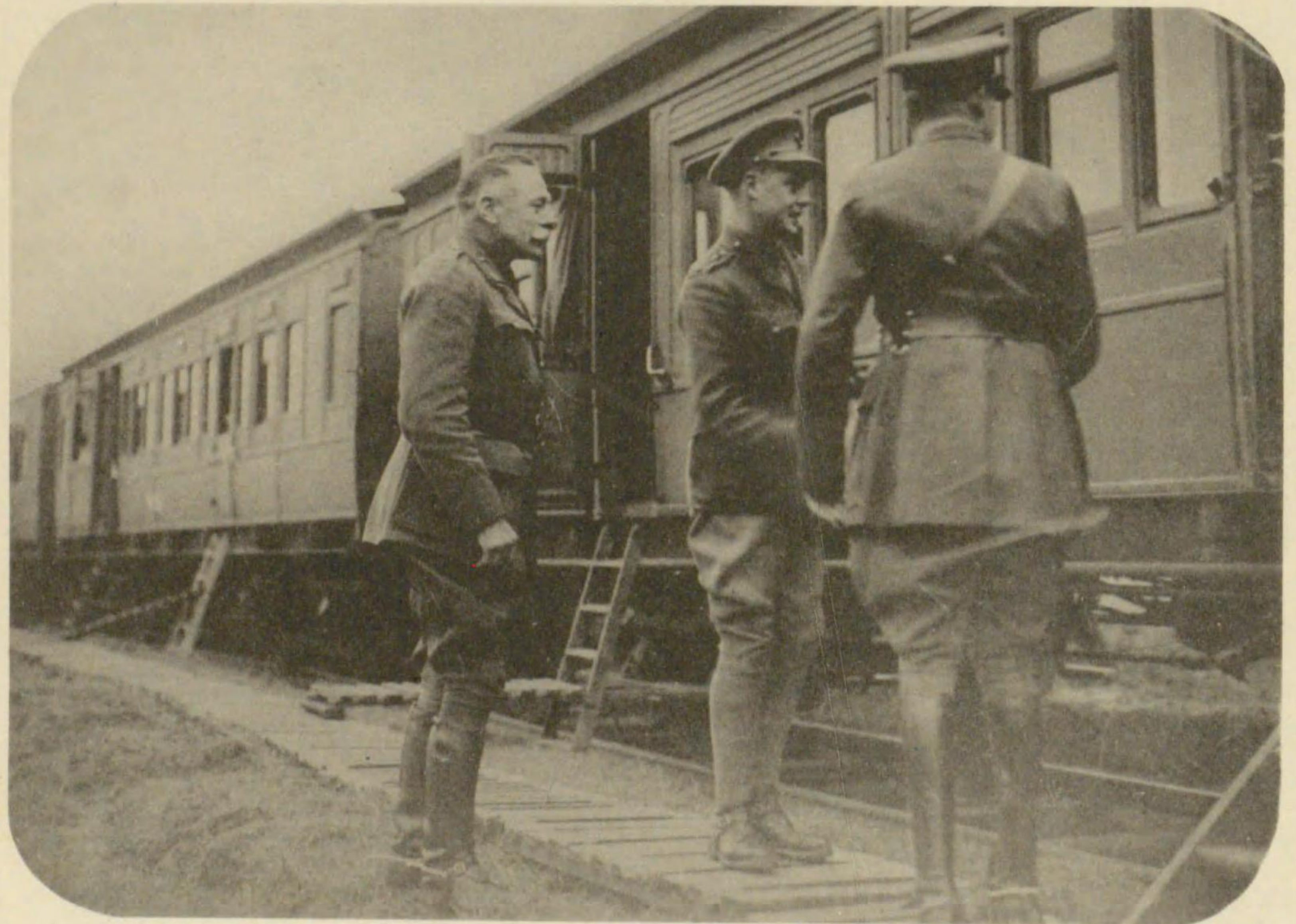
白耳義皇帝皇后廟陛下ト親王



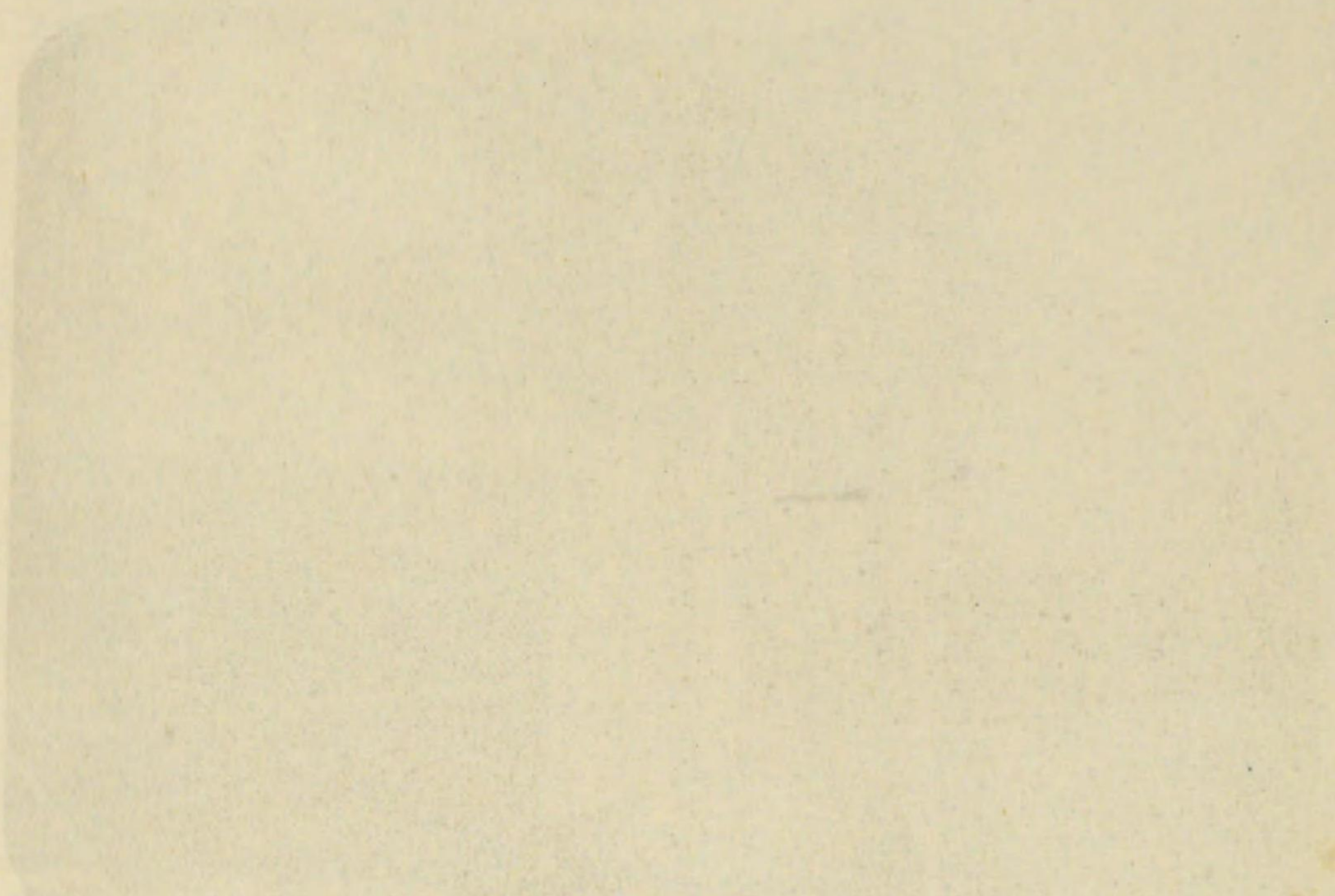
英軍總司令官部御訪問



ヘイグ元帥ト御握手



英皇太子ノ御見送



七



巴里市民の
狂喜

聯合國元首
に祝意を表
せらる

伊太利に向
け巴里御發

倚り妻女に扶けられつゝ、佛國萬歳を絶叫する廢兵等、眞に千態萬様、何れか祖國の勝利と、待ちに待つたる名譽の平和來とを欣ぶ衷心の叫びの顯はれならざるはない。噫、國を擧げて塗炭の苦を嘗むること茲に四歳餘、今や敵勢蹙まりて休戦を乞ひ、戦勝の光榮頭上を飾らんとす、巴里市民の狂喜、誠に宜なりと謂ふべきである。午後三時半親王は大統領をエリゼー宮に訪ひ、休戦條約締結の祝意を表し、又聯合國の元首に對し夫々祝電を發せられた。此夜接伴員三名、侍從武官ポーチエ中佐、儀式長官マータン、松井大使、長岡參事官、松村、永井兩武官を旅館に召して晚餐を賜ひ、隨行員一同之に陪した。十三日午後零時半、外務大臣ピション主催の午餐會に列せられ、二時過歸館、四時旅館に大統領の訪問を受けられ、七時五十五分伊太利に向け巴里東停車場發、隨行員の外ブロック接伴員及昨日來著せる在羅馬本邦大使館附武官海軍少佐島田繁太郎等隨從した。

十四日正午頃佛伊國境に近き一驛に於て、伊太利駐劄大使館附武官陸軍歩兵少佐仙波安藝及外交官補越田佐一郎等出て迎へ、駐伊大使伊集院彦吉は流行性

羅馬御著

感冒に罹り、引入中の故を以て奉迎し得ざるを深く遺憾とする旨を言上した。夫より著名なるアルプス・トンネルを通過して伊國に入れば、接伴員伊國海軍將校二名奉迎同車し、チュリン及ゼノアを経て、十五日午前十時二十分羅馬に著された。監國ゼノア公は式部長官兼宮殿長ボレア公爵其他を率ゐて停車場に出迎へられ、歓迎の儀容甚だ盛である。我大使館一等書記官今井忍郎外館員及在羅馬本邦陸海軍武官等多數奉迎の裏に、御一行は宮内省差廻しの馬車に分乘し直にグラランド・ホテルに入られた。

始め親王は、皇帝をヴェニスに近きパドアの大本營に御訪問あるべき豫定なりし處、休戰條約締結後、俄に羅馬に於て御會見のことに變更せられ、昨日を以て皇帝還幸ありたるに依り、此日午後、親王は先づ先帝靈廟に花環を供へられ、一旦歸館の後、二時五十分隨行員一同を隨へて再び出館、皇帝を御訪問あり、續いて同宮殿内別室にゼノア公をも訪はれしが、三時四十五分皇帝は侍從武官を隨へ親王を旅館に回訪せられ、ゼノア公亦續いて來訪せられた。六時五十分宮中に於ける皇帝の晚餐會に列せられ、隨行員一同亦陪食した。此日皇帝

伊國皇帝を
御訪問アンノンシ
ヤール頸飾
章皇帝の非公
式午餐會皇后より戰
争記念品を
贈進佛國に向け
伊國御發

は親王にアンノンシヤール頸飾章を、又隨行員一同にも夫々勳章を贈られた。

十六日午前市内を巡覽せられ、午後は井上、柴、前田の各隨行員を隨へ、羅馬郊外の靜閑なるサボイ離宮に於ける皇帝の非公式午餐會に赴かれた。此時皇帝は親しく入口階段に親王を迎へて奥殿に案内せられ、皇后、皇太子、皇女に親王を紹介し、親睦和樂の裏に午餐を共にせられ、終て大戰記念室に於て、戰時中皇帝親ら拾集せられたる戰場遺留品千百餘點に就き興味ある御説明があつた。歡談約半時、親王は厚く皇室の優遇を謝して退出せられしが、御歸館後皇后は特に使者を以て、親王竝に本日參殿せる隨行員に前記念品中の砲彈の破片等を贈り越された。午後六時昨日戰地より凱旋せる伊國軍總司令官ディアズ大將の伺候を受け、夜は接伴員、大使館員、駐在海陸軍武官等を召して晚餐を賜ひ、午後十一時二十五分ゼノア公以下に送られ佛國に向け出發せられた。佛國接伴員ブロック少佐は同國政府の命に依り嚮に此地迄隨行し來りしも、伊國側の意向を顧慮し、同國御滞在中は全然親王一行と別離滯留し、今御出發に臨み再び同車隨行した。

巴里御歸著

十七日午後二時半國境に著し、島田、仙波兩武官及越田外交官補等は告別辭去した。行々車窓より眺むれば、アルプスの連峰遠く雪を戴きて峙ち、雄渾壯大なる山容は大に御旅情を慰めた。十八日午前八時四十五分巴里著、夕刻迄休息せられ、夜は大使館に於て日本食の饗應を享け、午後十一時大使以下に見送られ、プーロニーニユに向け北停車場發、コンノート親王も亦此日同停車場にて親王を待合され、同行歸英の途に就かれた。翌十九日午前七時五十分プーロニーニユ著、更に列車を棧橋に廻はして御乗船に便にし、英佛兩軍の儀仗隊は日英佛三國の國歌を奏して敬意を表した。親王はコンノート親王と共に棧橋に繫留せる軍隊輸送船プリンセス・ヴィクトリアに移乗せられ、巴里より隨從したる松村武官、佛國接伴員及奉送のため來れる英佛白の陸海軍將官等に告別し、九時四十五分プーロニーニユに向け出發せられた。戰雲漸く散じて、此度は往路に於ける如く蛇行針路を採るの要なく、加ふるに海上平穩にして心自ら安きを覺えられた。偶海峽中部に於て一浮流水雷を見たるも、幸にして晝間且つ天氣晴明なりしを以て危難を免れ、十一時半無事プーロニーニユ著、珍田大使等此處

プーロニーニユ御發

倫敦御歸著

コンノート親王の御懇情

非公式倫敦御滞在

パッキナム宮午餐會

に奉迎し、親王御一行は特別列車にて、午後一時三十分倫敦ヴィクトリヤ停車場著、直にクラリツヂ・ホテルに入られ、暫し非公式に御滞在のこと、なつた。コンノート親王とは、停車場にて告別せられしが、同親王には去月依仁親王の御著英以來、戰務多忙に拘はらず、殆ど常に行動を俱にして款待に及ぶるなく、年來の御親交を更に厚うせられ、其友情の温きこと、傍者をして感激措く能はざらしめた。而かも明日は再び海を超えて戰場に引還さるゝ豫定なるに至つては、其御精勵一しほ敬歎に堪へぬものがあつた。

此度の御滞在は約一週間の豫定なるが、過去二旬を超えたる不休の御活動の後とて、休養を主とせられ、已を得ざる場合の外は社交及公會の席に出づることとを避けられしも、尙十一月廿二日には日本大使館に於ける日本協會に臨みて、同會の名譽總裁推戴を受けられ、二十五日には駐在財務官森賢吾、倫敦總領事山崎馨一其他在留銀行會社員の主なる者等の懇願を容れて其晚餐會に臨まれた。廿六日にはパッキナム宮に於ける英國皇帝、皇后の午餐に列せられ、同國皇太子及アルバート親王も亦同席せられしが、宴果て、後、親王は英皇室の優遇に

對し謝辭を述べ、且つ明日倫敦出發につき御別れを告げて歸館せられた。

翌二十七日午前九時半隨行員一同を隨へて旅館を出で、十時特別列車に依り
 バッデイントン停車場發退京せられた。今回は御微行の故を以て、英國側の奉
 送者なかりしも、我大使館員、總領事館員其他主なる在留邦人等の奉送盛にし
 て、珍田大使、飯田、田中兩武官、森財務官、吉田書記官及輸送指揮官ラッセ
 ル等陪乘し、午後二時半プリマス軍港ミルベイドック著、デボンポート鎮守府
 司令長官及プリマス軍管區司令官等の出迎へを受け、儀仗隊親閱の後、沖合に
 碇泊せる假裝巡洋艦オルヴィエトに乗艦せられた。同艦は曩に加奈陀より御渡
 英の際御乗用に供せられたる艦にして、艦長イングラント大佐以下悉く舊知な
 るを以て、一同恰も我家に歸りたるの想ひを爲した。四時二十分珍田大使以下
 退艦し、艦は直に錨を揚げて一路米國紐育港に向ひ航途に上つた。隨行員高橋
 事務官は病未だ癒えず、倫敦に残つて専ら醫療に努むることゝなつた。

海上風波荒
し

此度の航海は往路の平穩なりしに似ず、海上風波荒く、出港後一兩日は霧深
 くして艦は汽笛を吹鳴しつゝ進み、且膨濤長大にして艦の動搖甚しく、殊に十

プリマス御
著

オルヴィエ
トに御乗艦

艦内に於け
る款待

月二日には風力實に十一に達し、暴風猛雨、怒濤を驅つて艦を翻弄し、四日海
 上稍和ぎ天候一時恢復せしも、五日再び險惡となり、爲めに入港時日は豫定よ
 りも約一日遅るゝに至つた。斯の如く天候風浪は大に御一行を惱ませしも、往
 路に於て最も心を痛ましめたる敵襲の危険は、既に去つて氣閑かに、唯機械水
 雷に對する警戒のみは未だ緩うする能はざるを以て、艦は尙ほバラヴェンを曳
 航した。艦長以下乗員は大に御一行の接待に腐心し、艦體動搖の間に在つて、
 親王のオルダーショットに於ける御閱兵の光景、其他種々滑稽なる活動寫眞な
 どを映寫して、艦内の御無聊を慰むるに努めた。又十二月二日には、無線電信
 に依り、十一月二十八日獨逸皇帝和蘭に於て退位の宣言を發せりとの情報を、
 同四日には米國大統領ウィルソン愈平和克復に斡旋せんが爲め、佛國に向ひ發
 航せりとの情報を接受した。親王は四日五日の兩日、艦長並に主なる士官を二
 分して晚餐に召し、其勞を犒ひ厚遇を感謝せられた。

七日午前三時紐育港沖合に達し、九時十五分港内豫定棧橋に横付けすれば、
 米國々務卿代理第三國務次官ロング國務卿ランシングは大統領に隨ひ佛國に赴

きて不在、接伴員陸軍少將ヘンダスン、海軍少將ロボトスン等及大使館參事官出淵勝次、紐育總領事矢田長之助、大使館附武官海軍大佐上田良武、理學博士高峰讓吉、財務官田昌其他主なる在留邦人來艦伺候した。十一時三十分オルヅイエトを退艦せられ、午後零時二十分前記米國側奉迎者及我大使館員等を隨へ、特別列車に依りペンシルベイニヤ停車場發、華盛頓に向はれた。駐米大使子爵石井菊次郎は此日所勞の爲め紐育までの御出迎に不參した。

同日午後六時二十分御乗用列車華盛頓著、主席國務次官ボウク、第二國務次官フィリッツ等の米政府高官及石井大使以下大使館員、駐在陸海軍武官、主要在留邦人等奉迎し、儀仗隊は我國歌を奏して敬意を表し、驛外には儀仗騎兵一個聯隊堵列して警衛の任に當つた。御一行は米政府にて用意せる自動車に分乗、六時五十分旅館に著されしが、途中議事堂前を過ぎる時には、親王を迎へんが爲め特に點燈して敬意を表し、頗る壯觀を呈した。尙ほ當地御滞在中は總て米國政府の接待に屬し、旅館に於ける親王の御部屋近くには特に衛兵を配した。超えて九日午前十時ボウク國務卿代理伺候し、親王は其案内に依りて上院に

至り、マーシャル副大統領に面接せられ、懇切なる歡迎の辭を受けて一旦御歸館の上、再び御出館、バン・アメリカン・ビルディングに於ける副大統領の午餐會に臨まれた。午後八時よりは石井大使主催の晚餐會に臨席せられ、主なる米國政府員、接伴員及大使館員等亦陪席し、席上親王及ボウク國務卿代理は、互に兩國元首の爲めに乾杯した。十日午前マウント・ヴァーノンなるワシントンの墓前に花環を供へ、午後一時より國務卿代理の午餐會に赴かれ、五時半御旅館發、國務次官ロング、石井大使以下館員及武官等の奉送裏に華盛頓を發シカゴに向はれた。小栗隨行員は軍事調査の爲め、親王の許可を得て一時隨行を解かれ、桑港に於て一行に合することとなり、自餘の隨行員、接伴員及大使館附海軍補佐官海軍中佐長谷川清、大使館三等書記官縫田榮四郎等隨從した。

翌十一日午後六時シカゴ著、同地陸軍司令官バアレー、州代表者デョウンス、在シカゴ帝國領事來栖三郎等奉迎し、司令官等の案内に依り、當地名流の集會所たるシカゴクラブの晚餐會に臨まれ、席上バアレー少將は我天皇の萬歳を祝して杯を舉げ、親王は米國大統領の爲めに乾杯して之に應へられた。宴終つて

トリニダツ
ド御著ロツキ一の
高原

荒原千里

格蘭ド・
カニオン御
著

午後十時半シカゴ發、サンタ・フェ線に依りて西行し、十二日ケアンサス・シテイ及ドツヂ・シテイの兩市を過ぎ、十三日午前十時コロラド州トリニダツドに著した。此地は海拔六千呎、人口僅に五千餘の小都會なれども、米印兩種族混棲の地として有名である。此日天氣極めて晴朗、ロツキ一の高原氣澄み風冷やかに、淡雪滿地を覆ふ處、牛馬遠近に逍遙し、宛然一大畫幅を展べたるが如く頗る清快であつた。夫よりニュー・メキシコ州のラス・ヴェゴス及アルバケルケを経て、十四日拂曉アリゾナ州ウインズロウ驛を通過せしが、此地方一望千里、荒涼瘠薄の原野にして、芝屬の一種生ひ茂れる外また綠翠の眼に入るものがない。

午後零時十分ウイリヤムスに著し、支線に入つて有名なる格蘭ド・カニオンに向つた。行くに従ひ荒原は何時しか變じて蔚々たる松林となり、樵路樹間に隱顯して人跡の漸く通ずるを見る。午後四時四十分格蘭ド・カニオン著、直にホテル・エル・トウヴァに投宿、丸太を積重ねて屋壁を造れる家屋の構造、恰も露國の村舎の如くにして頗る雅趣に富み、屋内亦素朴なるも瀟洒として設備好く整ひ、旅館の前面は即ち格蘭ド・カニオンにして、坐ながら此天下の奇勝を觀

千仞の溪谷

鬼神の岩窟
ボビ・ハウ
ス

勝景周覽

格蘭ド・
カニオン御
發

る事が出来る。屋を出でて數十歩すれば、脚下忽ち斷絶して千仞の溪谷奈落より起り、谷底遙にコロラドの暗流隱見し、對岸相距つる、廣き所實に十三哩に達し、無數の突巒溪間に簇立し、姿態萬様、其色亦地質に應じて赤綠黃青、或は一峰にして層々色を異にするものもある。天然の妙、造化の奇、眞に是れ鬼神の岩窟と謂ふべきであらう。旅舎に隣りしてボビ・ハウスと稱する一屋あり、ボビ族印度人の屋舎を模し、内に其製作品を販賣す、親王は其數種を買上げられ、出でて白雪を踏んで絶壁上より四周の觀賞を恣にせられた。

十五日午前九時半、隨行員を隨へ探勝の爲め御旅館發、馬車に分乗してカニオン西側の遊覽道路を進み、十時マニトバ・ポイントと名づけられたる突角に達した。此處にカニオン探檢者メイヂア・ポウエルの碑がある。更に進んでボビ・ポイント、プリマ・ポイント等の突角に下車して勝景を賞し、十一時ハーミット・レストの雅致愛すべき一茶亭に憩ひ、路程約十五哩にして午後零時五十分歸館、午食後再びボビ・ハウスに於て西班牙古代の茶具類を觀覽せられた。午後六時二十分格蘭ド・カニオン發、八時半ウイリヤムスに還り、九時二十五分同驛發西

行の豫定なりしも、御乗用列車を連結すべき汽車の延著三時間餘に及び、夜半に至り漸く發することを得たりしが、其後途中に停車すること數次に及び、旅程益遅延した。

十六日午後三時四十五分、豫定に後ること約五時間にしてサン・バーナデイノ著、ロス・アンジェルズ領事大山卯次郎奉迎隨行し、在留日本人會長上村喜太郎等伺候して果物一籠を獻じた。六時十五分ロス・アンジェルズ著、同地領事館員、日本人會長及邦字新聞社長等約十名伺候謁を賜ふた。初め當地に於ては五時間の停車時間を利用して市内を巡覽せらるゝ、豫定なりしが、列車著しく遅著せし爲め、停車僅に十五分にして午後六時半發車、路を海岸線に取り、十時二十分サンタ・バーバラを過ぎ、翌朝八時三十分太平洋岸の勝地デルモンテに著いた。昨日來通過し來れる所多くは赭乾荒蕪の地、旅人の眼を慰むべき何物もなかりしが、此地に來るに及び巨樹鬱蒼として天を摩し、時は十二月中旬なるに、百花尙ほ艶を競ひ、太平洋の水は淼茫として眼前に展開し、近く長汀曲浦の眺を擅にするを得て、北米の西海岸に於ける大樂園なるを感せしめた。親王長途の

ロス・アン
ジェルズ御
著デルモンテ
御著待船旁御靜
養

御旅情を慰し、兼ねて御歸朝の船待場所として、米國政府が特に此地を選びたる好意は、深く感謝すべきであつた。

富豪の遊覽
地

桑港總領事代理藤井啓之助、加州馬鈴薯王の稱ある牛島謹爾及東洋汽船會社桑港支店長土井慶吉等停車場に奉迎し、親王は御下車後直にホテル・デルモンテに入られた。同ホテルは室數約四百を數へ、富豪等の各地より來り遊ぶ者多く、周圍の遊歩地の如きは甚だ贅美を極め、設備完整せる大旅館である。當地滯在中隨行員等は、或はゴルフに汗を流すもの、或は郊外に騎乗を試みるもの、或は自動車を探りて勝を探るもの等、思ひ／＼に旅情を慰する處ありしが、親王は此日午後二時より自動車を驅り、モントレイ灣に沿ひて十七哩ドライブを試みられ、次日は一部の隨行員及接伴員を隨へて、自動車を羊腸たる山路に走らせ、カメル・ヴァレーを越えて旅館の別業に一日の清遊を樂まれ、其翌十九日には午前中自動車にて郊外周遊を試み、午後は日本漁夫の操縦する石油發動漁舟に召して、モントレイ灣沖合に出漁、親ら尺餘のキング・フィッシュ二尾を釣上げられた。二十日午前亦自動車にて周遊あり、斷崖上の一茶亭カメル・ハイラ

十七哩ドラ
イヴ日本漁舟に
て沖合に出
漁

ンド・インに小憩、崖頭に立つて望めば、脚下に太平洋の白浪岩礁を噛み、老松臥龍に似て斷崖に懸り、眺望極めて佳である。午後一時御歸館、夜は接伴員、隨行員及太田總領事を召して晚餐を賜ひ、卓上和氣藹々、笑聲堂に満ちた。小栗隨行員及曩にロス・アンジェルズに於て暫く御一行に別れたる前田隨行員は共に本日を以て歸投した。

午後九時半旅館を出て再び汽車に投じ、翌二十一日午前六時二十分デルモンテ發、十一時半桑港北太平洋鐵道第三停車場に著せられた。要塞司令官陸軍少將マリスン及主なる在留邦人十數名特に總領事の承認を経、桑港警察廳にて許可せる者等奉迎し、同少將の先導にて停車場より、自動車にて直にサイベリヤ丸に乗船せられしが、途上に於ける米國官憲の警衛頗る嚴重にして、制私服の警官を配すること五十名以上に達したと云ふことである。是れ近時此地在住の東洋人間に不穩の思想を有するものあり、其識別困難なるの故にして、邦人と雖も停車場又は御乗船附近に在つて奉迎送することは、特許なき限り之を許さなかつた。御乗船後直に接伴員、隨行員、太田總領事、縫田書記官、長谷川海

軍中佐及御著米以來終始警衛の任に當り來れる探偵オーコンヌル等を召して告別の杯を舉げられ、又別に本邦銀行會社の各支店長、邦字新聞社長等十數名に賜謁の上、別杯を舉げられた。尋で桑港海軍司令官及桑港市長來り伺候し、終つて船は棧橋を離れ、金門海峡を過ぎて太平洋上に出た。

十二月二十三日正午、平和會議に特派せらるゝ我使節一行の乗船天洋丸と東西相距る三百哩にして、牧野使節は一行を代表し、無線電信にて親王の御機嫌を奉伺し、兩船の一行亦互に健康を祝した。午後十時二十五分左舷約半海里を隔て、同船と反航、火箭を揚げ汽笛を鳴らして相祝した。翌二十四日夜は耶蘇降誕祭前晚クリスマス・イーヴなるを以て、外人船客等の舞踏あり、二十五日の降誕祭日は外人等に依りて盛に祝せられ、舞踏正子を過ぎ、船内大に賑ふた。船客の一人デイアリ夫人は、客年米國陸軍少尉としてソアツソン戰場に斃れたる子息の遺著をば、クリスマス・プレゼントとして親王に献上した。

海上平穩、サイベリヤ丸は愉快なる航海を續け、二十七日午前七時布哇ダイアモンド・ヘッドを過ぎて、八時半ホノルル港口に停止し、水先案内者、檢疫吏

軍艦淺間在泊

棧橋の奉迎

陸上御巡覽

等乗船、米國官憲よりは御警衛打合せの爲め一海軍大尉を派し、且平服警官一名を常に親王の左右に附隨せしめ度き旨申出でた。同時ホノルル總領事諸井六郎は副領事等を帶同し、又當時太平洋警備の任に在りたる在泊軍艦淺間艦長海軍大佐古川弘は副長以下上長官を率ゐて來船伺候した。九時過船は再び航進を起し、十時棧橋に繫留すれば、ホノルル在住の邦人、學校生徒等多數奉迎し、橋上には群集雜踏した。布哇總督及布哇軍司令官よりは、各副官を派して敬意を表したるを以て、此等に對しては松平隨行員を遣はして答訪せしめられ、又淺間乗員慰問の爲め、小栗中將を同艦に派して酒肴料を下賜せられた。親王は隨行員を隨へ、總領事の案内に依り御上陸、一旦總領事館に少憩の後、選抜邦人のボー・スカウトを親閲せられ、ヌアヌ・バリ、ワイキキ公園及水族館等を巡覽後、總領事の催に係る午餐に臨まれ、隨行員一同及淺間艦副長陪席した。三時總領事館を出で、デイモン公園を経て、アイルア及ワイバハの砂糖耕地を觀覽せられ、四時三十五分御歸船、五時十五分船は横濱に向ひ解纜せしが、奉送盛大を極め、棧橋附近立錐の餘地なき有様であつた。

歳末の御禮

洋上の除夜

大正八年元旦の祝詞

甲板上の遊樂

ホノルル出港以來海上平靜、三十一日は午前二時頃西經より東經に入る豫定にて、一日を早め元旦と成るを以て、大晦日に當る三十日午前十時隨行員一同通常禮装にて親王に伺候し、歳末の御祝詞を言上した。夕食時外人等は假装して食卓に就き、奇装怪粧、人をして抱腹絶倒せしめた。食後井上隨行員審判委員長に推され、行進を檢して假装の巧みなる者に賞を與へ、終つて假装のまゝにて舞踏深更に及び、又圍碁、將棊、デツキ・ビリアド等の競技盛に行はれ、大正七年最終の夜は斯くして和樂の裏に更けて行つた。

翌午前一時三十五分、船西經より東經に入り、明くれば大正八年の元旦、太平洋心旭日麗かに、水天一碧海波殊に靜かである。親王は午前九時、隨行員一同、高等船員及日本人船客總代の捧ぐる新年の賀詞を受けられた。九時半邦人一等船客は食堂に集合し、船長祝詞を述べ、井上隨行員の發聲にて天皇陛下の萬歳を三唱し、君が代の奏樂あり、終て一同歡喜の裏に祝膳に就き、午後二時半より運動會を開き、歡樂を盡して殆ど日の没するを覺えなかつた。二日また天候平穩、午前は前日に引續き運動會を催し、夕食後は船員の演劇があつた。

此夜より本邦と本船間の無線電信の通信可能となり、四日海軍省副官及川島別當より、親王の横濱御入港當日、軍艦生駒及第三驅逐隊は東京灣に御乗船を奉迎し、横濱迄随伴せしめらるとの無線電信に接した。

東京灣に入る

五日天候悪化し、風力増加して寒冷を感せしも、六日に入りて恢復し、七日午前六時野島岬を航過して東京灣内に入る頃には、天氣晴朗風亦風ぎ、相房の岬角山色鮮やかに、無事御歸朝を歡び迎ふるが如くであつた。劍崎を過ぐれば生駒及第三驅逐隊は本船の右舷に近づき來り、生駒艦上には横須賀鎮守府司令長官名和又八郎幕僚を随へて坐乗し、各艦は總員登舷の禮を行ひて祝意を表し、觀音崎を過ぐる頃、飛行機二機追濱より飛來し、船上を高翔して奉迎の意を表した。九時横濱港外に假泊し、檢疫終つて十時十分拔錨港内浮標に繫留、在港の艦船は滿艦飾を施して御歸朝を祝した。

妃の御出迎

是より先き依仁親王妃は親王を迎へらるゝ爲め、午前八時東京御本邸發横濱に赴き、神奈川縣廳にてサイベリア丸の入港を待たれ、井上、前田兩侯爵夫人、仙石宮内事務官、武井式部官、岩倉公爵家總代南岩倉男爵、川島別當及宮岡御

横濱入港

用取扱等之に隨從した。十時二十分に至り御乗船浮標に繫泊するや、妃は前記の人々を從へて同船に赴き、親王と御對顔あつて祝辭を述べられ、尋で山階宮武彦王は名和横須賀鎮守府司令長官等と共に上船御對顔あり、加藤海軍大臣、伊集院元帥、出羽軍事參議官、島村軍令部長、有吉神奈川縣知事、久保田横濱市長及英國大使館附武官海軍少將デエムス・リイ等も亦奉迎、船内に伺候した。十時四十分親王は隨行員を隨へて妃同道御退船、陸上に出迎へたる有栖川、伏見、華頂、梨本、竹田各宮の御使に御挨拶あり、石原宮内次官、西郷侯爵其他多數官民及國旗を打振り萬歳を唱へて沿道に堵列せる小學校生徒等の奉迎裏に、特別列車にて十時五十五分横濱發、十一時五十分無事東京驛に著せられた。

東京驛御著

東京驛にては勅使次で皇后及東宮の御使は、列車内に入つて御沙汰を言上し、終つて親王は步廊に下り立たれ、御出迎の閑院宮、伏見若宮、久邇宮、同妃、朝香宮、東久邇宮、北白川宮、李王世子に御挨拶あり、原總理大臣、波多野宮内大臣、床次内務大臣其他の奉迎者に會釋を賜ひ、自動車にて午後零時十分葵町御邸に歸還せられ、直に原總理大臣以下奉伺の諸官竝に御親族と祝杯を舉げ

御歸邸

られた。此時波多野宮内大臣一同を代表して祝詞を奉り、更に別室に於て諸員に立食を賜はつた。又隨行員一同を引見、犒の御詞を賜はり、一同は茲に任務を結了して解散した。

參内復命

親王は南郷御附武官を隨へて、午後一時四十五分出門參内せられ、天機奉伺の上御復命あり、尋で皇后宮に奉伺し、三時十分歸邸、今回の御重任茲に全く結了を告ぐるに至つた。

第十七章 軍事參議官時代及英國皇太子御接伴

用務御繁多

親王英國より御歸朝後は引續き軍事參議官として在職せられ、軍務は稍御閑散なりしも、日常の御用務は年と共に御繁多を増し、海軍に御在職の皇族少きと、御年長との爲めか、海軍諸學校卒業式、軍艦進水式等に御差遣の數も多く、又御祭典は素より宮中様々の御催に御參列、外國使臣等の引見並に御招宴、其他公共團體總裁としての地方御旅行なども少からず、偶御閑暇の折は妃と共に葉山の御別荘に成らせらるゝ事ありしも、落つきて御靜養の暇もなく、誠に御繁忙の日を過された。

御賜宴

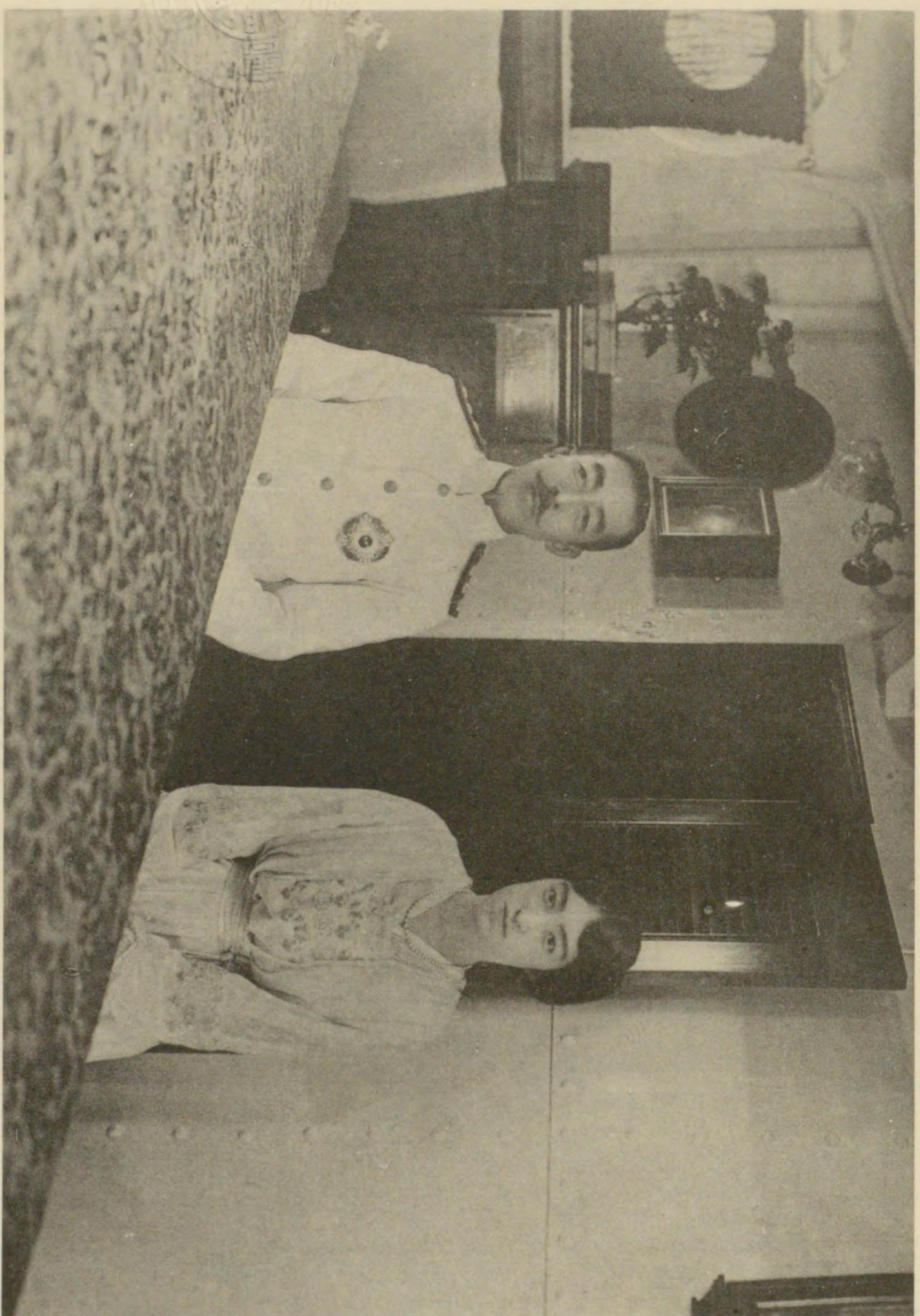
遣外艦隊の
親閱供奉

大正八年一月英國より御歸朝あるや、重任完了御披露旁、二月廿日、廿一日兩日に分ち、各國大公使及内閣各大臣以下百餘名を御本邸に召して饗宴を催された。又大戰中遠く異域に出でて長日月の間征戰に従事し、國威を揚げて凱旋したる遣外艦隊に對し、同年七月九日を以て天皇御親閱のことありしが、親王は横須賀に先著して之に陪せられた。

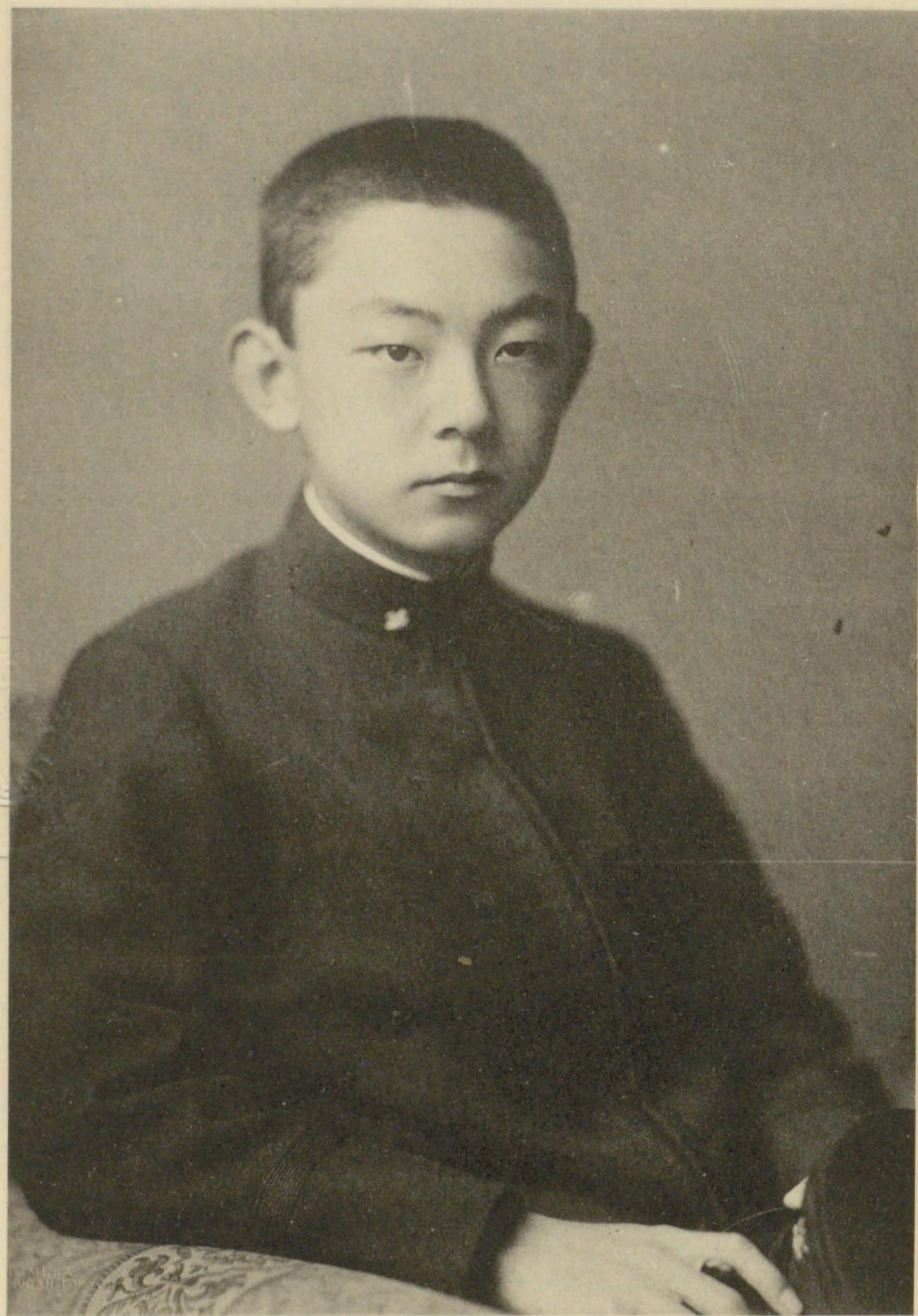
北海道御旅行

同月末よりは約二週日に亙り、水難救済會總裁として北海道支部發會式に御臨場の爲め、妃を伴ひて小樽に赴かれ、八月三日其式に臨まれたる後、同會演習場に於て救助作業を閲せられ、尙ほ小樽築港、北海道大學(札幌)、王子製紙會社工場(苫小牧)、日本製鋼所(室蘭)、北海道製鐵會社(室蘭の對岸輪西)等を視察し、登別溫泉、大沼公園、支笏湖等の勝地を遊覽せられ、支笏湖にてはアイヌの生活及姫鱒養殖の狀況を御覽になつた。此の御旅程中青森小樽間及室蘭函館青森間の御渡航には、特に第三艦隊司令長官黒井悌次郎麾下の軍艦伊吹に御乗艦、長官旗艦鞍馬は警衛の任に當り、航海中は種々の演習を行ひて御覽に供した。青森より御歸京の途中、八月十二日朝松島驛に御著車あれば、豫てより御子の如く慈まれし久邇宮第三王子邦英王は、東京より同驛に先著御待受あり、三殿下御同伴にて風光明媚なる松島に車を驅り、旅館白鷗館に入られ、附近山水の美を長閑に御觀賞あつて、十八日夜同所發翌十九日早朝歸京せられた。親王は御齡既に知命を越させられたるも未だ御繼嗣なく、圓滿なる御家庭も常に最と御寂しく拜せられた。されば此度久邇宮と御相談調ひ、當年九歳なる

邦英王同伴
松島御遊覽

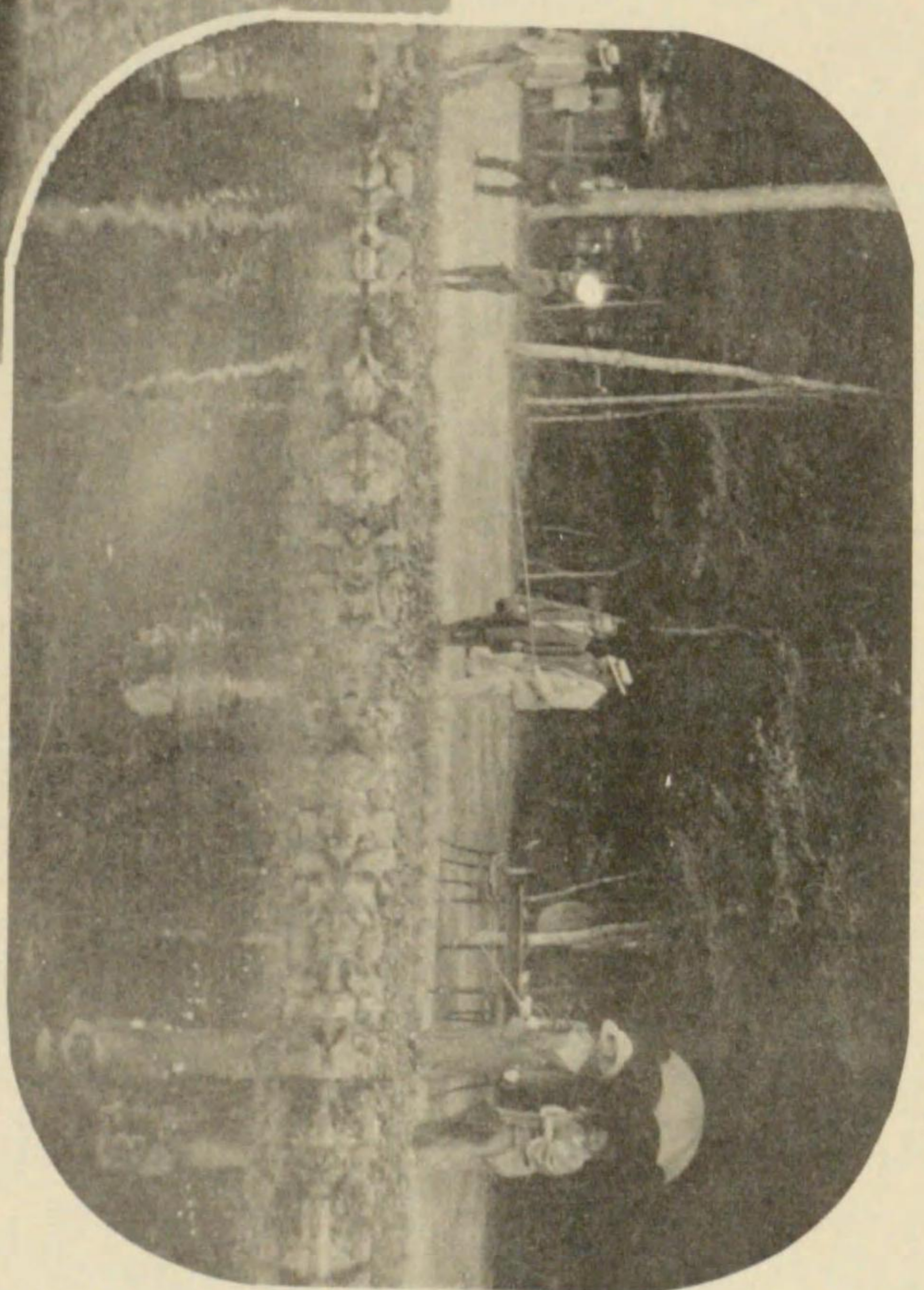
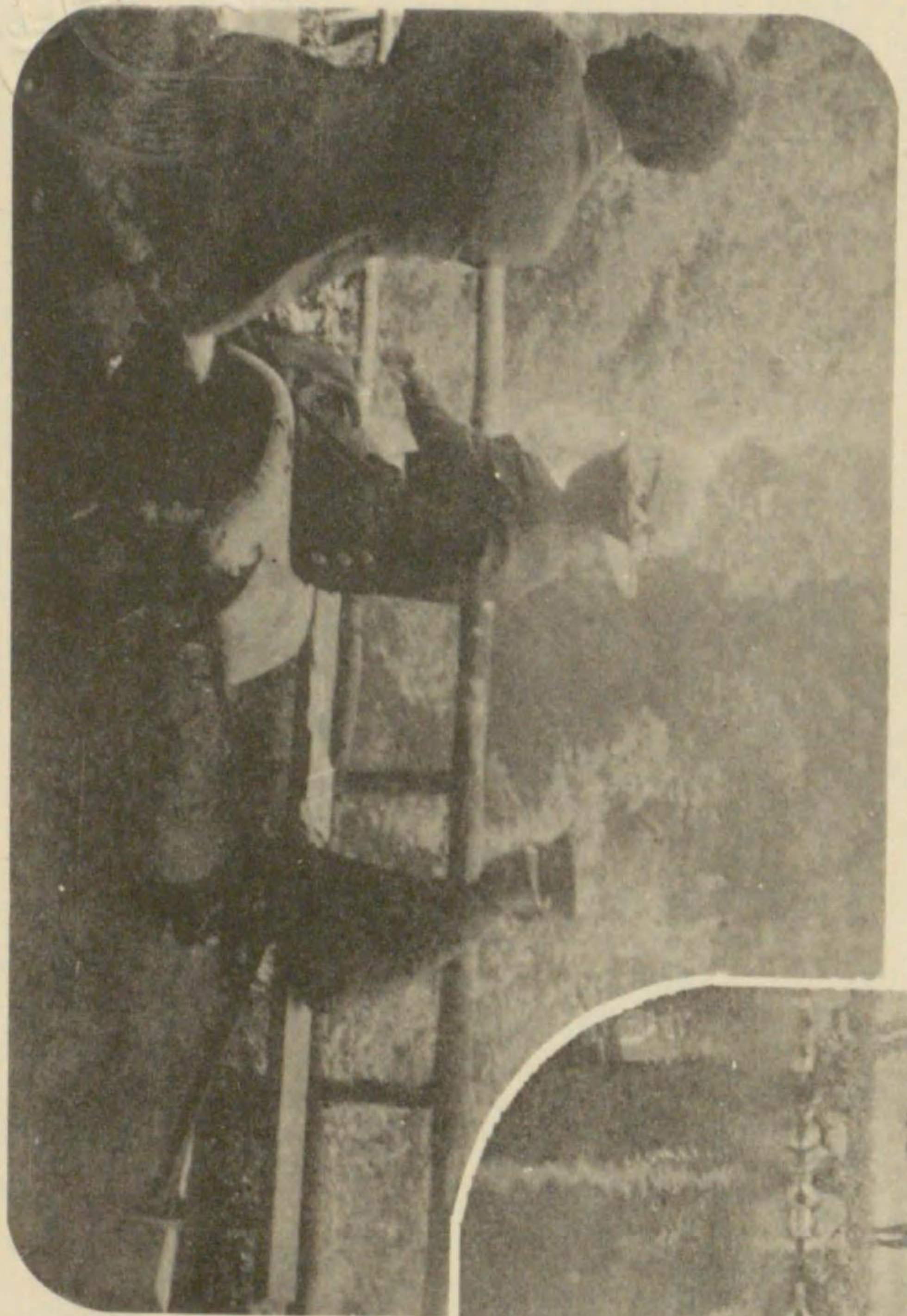


下殿兩ルケ於ニ吹伊艦軍



王 英 邦





日光(上)及
箱根(下)ニ
於ケル三
殿下



邦英王御預

海軍大演習
並に觀艦式
供奉

姉君村雲尼
公遷化

香川縣へ御
旅行

平和克復御
親告祭參列

外交團御招
待

邦英王を永く御預りの形を以て宮に迎へらるゝことゝなり、此年十月廿六日の吉辰を卜して、王は東伏見宮邸に移轉せられ、朝夕賑はしく團樂せらるゝこととなつた。

是より先き十月十五日親王は海軍大演習の御見學に出でられ、引續き同月下旬、天皇の海軍特別大演習御統裁並に觀艦式御親閱に供奉せられ、翌九年二月には御姉君村雲尼公の重患を京都に見舞はれしに、三月下旬遂に遷化の悲報に接せられ、四月二日妃御同列にて再び入洛、尼公の葬儀に列せられた。尋で六月月初には水難救濟會香川支部發會式に臨まるゝ爲め、妃を伴つて高松市に赴かれ、途次日本海員掖濟會大阪普通海員養成所を御視察、尙ほ香川にては屋島及象頭山御登攀等の事あり、七月初旬には平和克復御親告祭に參列の爲め、伊勢大和及近畿地方へ旅行せられた。又十一月八日には外交團を主賓とし、東郷元帥以下文武の諸官を加へ内外人二百九十餘名を召し、御本邸に園遊會を催された。是れ清遊談笑の間に彼我の親交を圖らるゝの御意思に由れるものにして、常に國際關係に深き注意を拂はせらるゝ一端の顯はれであつた。

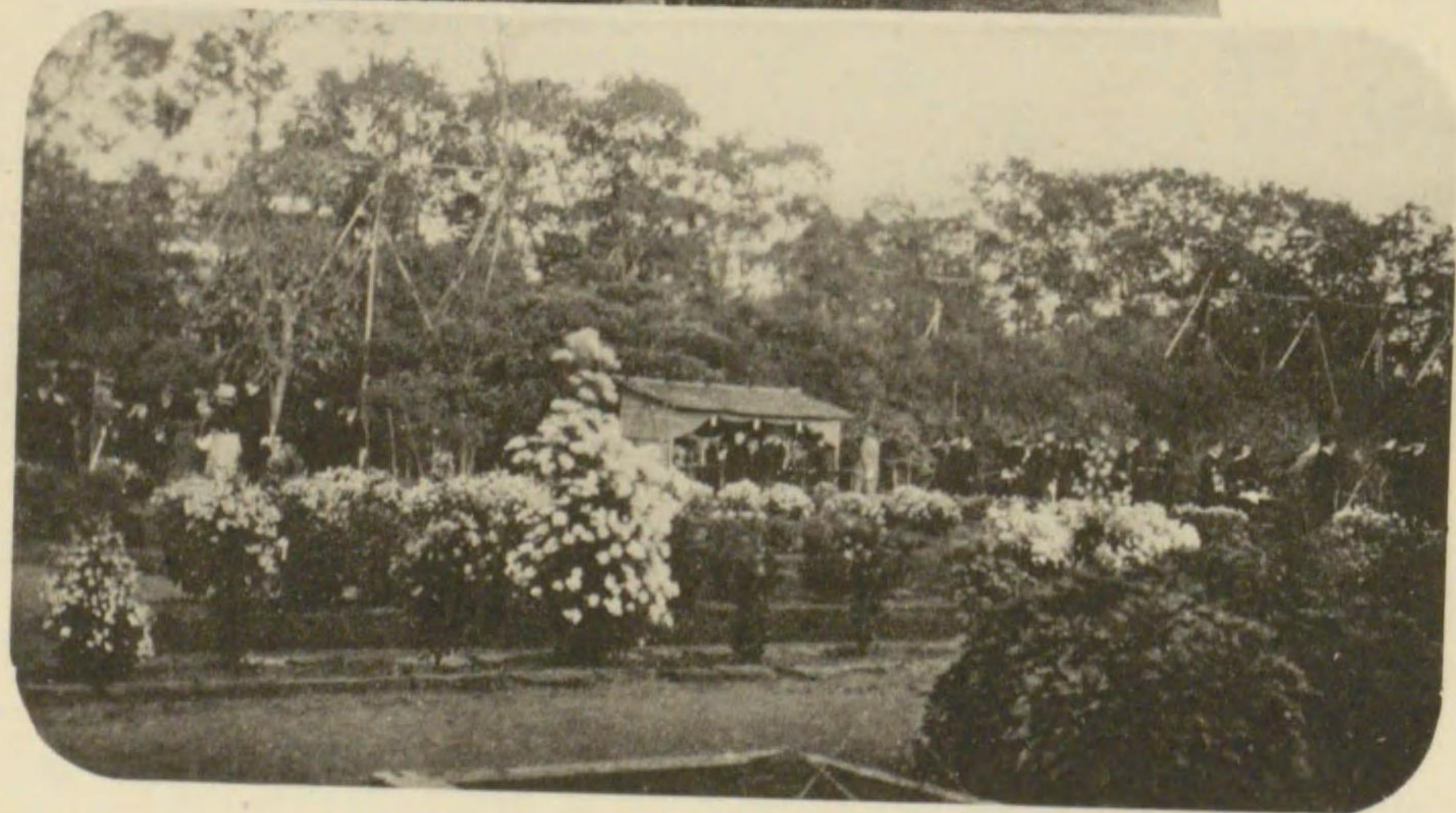
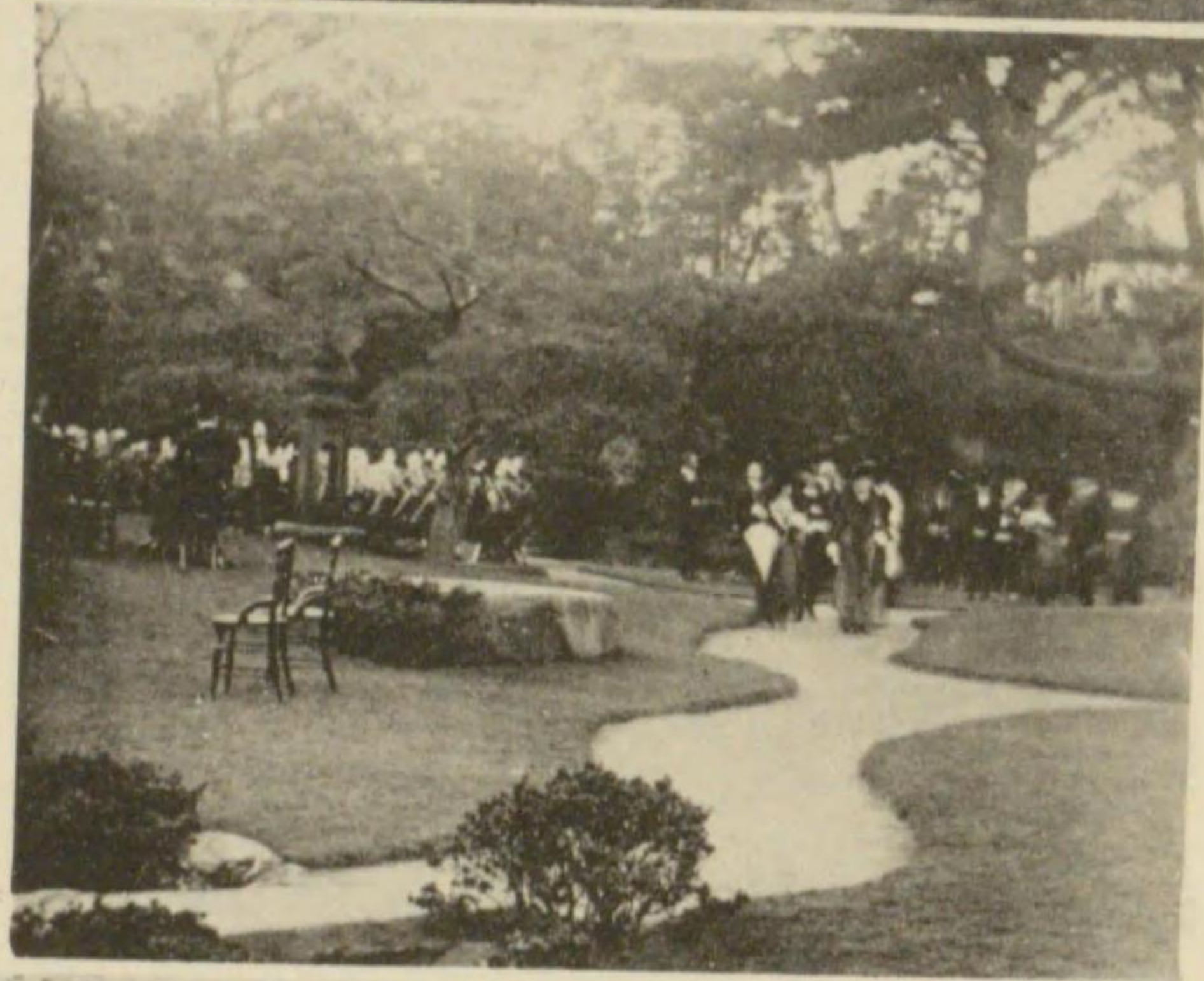
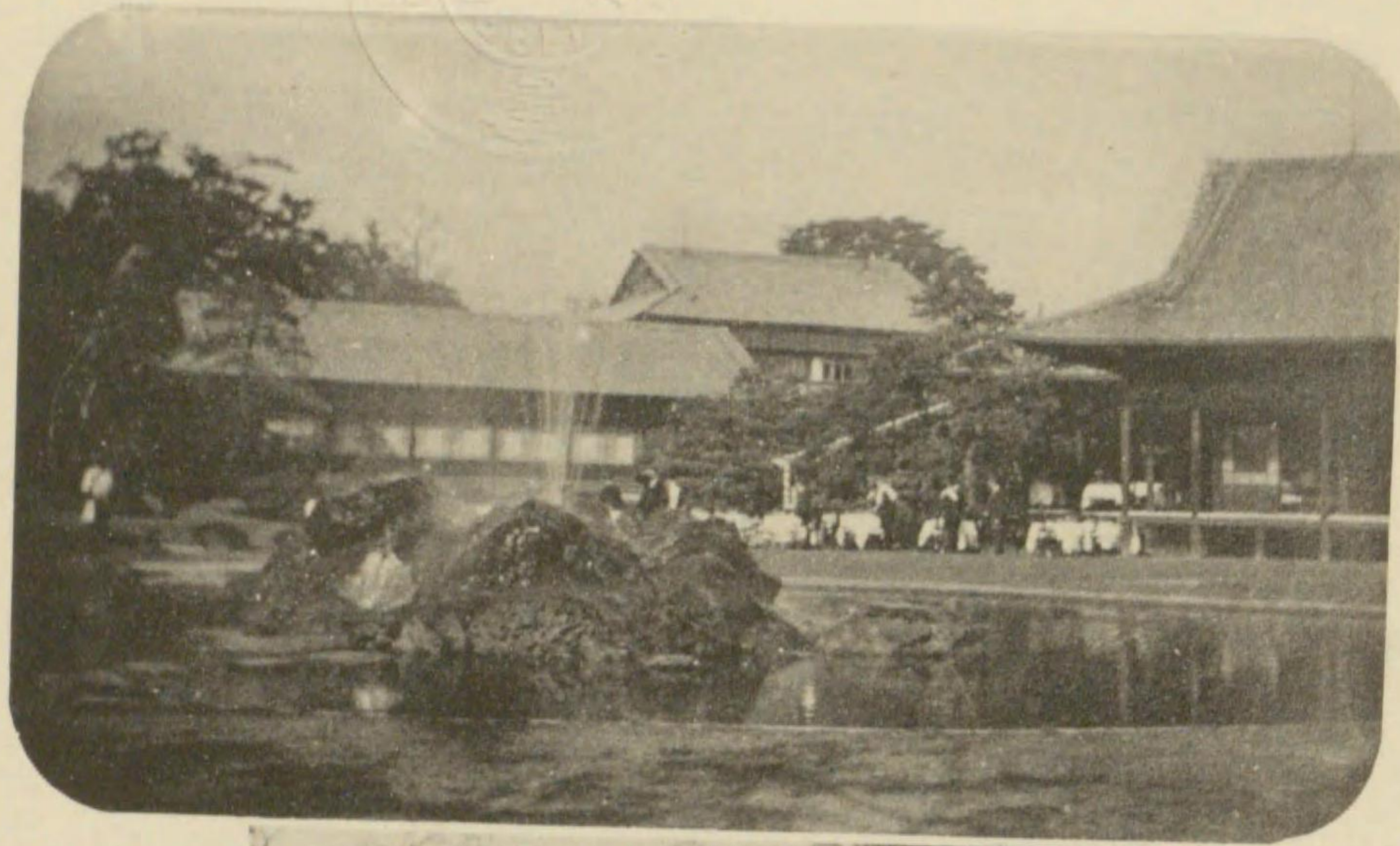
社會事業御研究

外交に對してかく御注意深きのみならず、由來平民的にして仁慈に富まれたる親王は、夙に意を民衆生活の上に注がれしが、歐洲大戰に依つて激成せられたる社會人心の急變に就いて深く懸念せられ、殊に露獨其他の現狀に鑑み、皇室と社會事業の關係を研究せらるゝ爲め、之に關する多數の書籍を態々歐洲より取寄せて一々閱讀し、「流竄中の前獨逸皇帝」の如きは特に深き興味を以て讀まれたるなど、社會問題に對しても深き理解を有せられた。而して妃も亦親王と御志を同しうせられ、屢々特殊小學校等を訪はせられて此種事業を御獎勵あり、殊に親王薨去後は種々の社會事業に携はられ、大正十三年には愛國婦人會の總裁となられ、翌十四年には社會事業關係者内外人約三十名を御邸に召して其業績を聽き茶菓を賜はり、同十五年には東京日日新聞社の願出に依り、皇孫御生誕記念こども博覽會の總裁たらせられたるなど、故親王の御遺志をも思召され、ての御事と拜察せられる。

妃と社會事業

白耳義協會總裁

大正十年三月二日、日白和親の爲め兩國有志の組織せる白耳義協會の推戴に依り其總裁たることを受諾せられ、翌三日、皇太子の外遊御出發を横濱に御見



葵町御邸ニ於ケル
外交團招待園遊會

箱根に御避暑

三重縣御旅行

英國皇太子御接伴

送あり、八月に入りては妃及邦英王を伴ひ箱根小涌谷なる男爵三井八郎右衛門別邸に避暑せられ、山水の美に浴して日頃の勞を醫せらるゝこと二旬半にして同月末御歸京、九月三日には横濱に皇太子の御歸朝を迎へられた。

十月十日妃を伴ひ東京を發し、十一日三重縣津市に於て開かれたる水難救濟會三重支部發會式に臨場、此機を以て大廟兩宮御參拜の上、三重縣志摩郡多徳島に在る御木本眞珠養殖場、名古屋市内外の諸工場等御視察、十六日歸京せられ、十一月二十六日には賢所に參して皇太子の攝政就任奉告祭に參列せられた。

大正十一年一月二十一日佛國特派使節ジョツフル元帥參邸敬意を表したるに對し、使を遣して之に答禮せられた。同年三月七日近々來朝せらるゝ英國皇太子接伴の任を拜命せられしが、超えて四月十二日同皇太子は軍艦レナウンに坐乘、我官民の盛大なる歡迎裏に横濱港に著せられた。此日親王は之を同港頭に迎へ、特別列車に同乗して午前十時四十五分東京驛に御著、此處に親しく出迎へられたる我皇太子と共に三殿下御同車にて參内あり、終つて御旅館赤坂離宮に英國皇太子を案内せられた。夕刻再び英國皇太子を御誘導參内ありて、宮中

英國皇太子
を晚餐會に
請ぜらる

一日四回英
國皇太子を
御誘導

の晚餐會に列せられ、宴後更に御旅館迄見送られ正子を過ぎて御歸館あり、妃も亦當夜の晚餐に參列せられた。翌十三日午前は帝國大學へ、午後は霞ヶ關東宮假御所午餐會へ、何れも英國皇太子を案内せられ、又午後四時三十分よりは英國大使館に於ける同大使のレセプションに御參列、更に午後七時三十分よりは英國皇太子を葵町御邸に招じて手厚き晚餐を進められ、引續き舞踏數番の催あり、隨員一同亦陪席の榮に浴した。此日の晚餐會には、我皇太子にも台臨ありて親しく英國皇太子と歡晤せられ、その御懇親の情は折柄酣なる春色と共に愈濃やかなるを覚えしめた。

超えて十五日午前、赤坂離宮より兩皇太子と同乗にて、代々木練兵場に於ける觀兵式に臨まれ、一旦離宮に還られたる上、午後再び英國皇太子を誘つて公爵徳川家達の午餐に參會、宴後餘興相撲を御覽せられ、午後二時四十分御歸邸、午後四時三たび英國皇太子を導きて侯爵井上勝之助邸に於ける英國協會のレセプションに、午後七時四たび英國皇太子と共に、英國大使の催せる晚餐會及夜會に臨場せられた。十六日午後我皇室は國賓を新宿御苑に招待して觀櫻會を催



英 國 皇 太 子 接 伴



コ ン ノ ト 親 王 接 伴

新宿御苑に於ける觀櫻會

され、天皇御不例につき皇后のみ行啓あり、兩皇儲と肩を並べて睦ましく御物語あらせられつゝ、諸皇族、宮内大官、英皇儲隨員並に接伴員等を隨へ、爛漫たる花の下道を巡りて園内を逍遙せられた。空も紅に、今を盛りと咲亂れたる櫻の花の、一ひら二ひら春風に誘はれて、高貴の御肩に散りかゝるも風情あり、遠來の貴賓の旅情を慰むるに十分であつたであらう。夜は又英皇儲と共に總理大臣の晚餐に臨まれた。

濱離宮の鴨獵

十七日正午親王は濱離宮に於て、兩皇儲と午餐の卓を俱にせられたる後鴨獵を試みられ、夕七時よりは妃同列にて赤坂離宮に於ける英皇儲の晚餐會に參列あり、宴撤せられて後、兩皇儲と共に更に東京市の歡迎會場たる帝國劇場に赴き、正子を過ぎて歸邸せられた。翌十八日午前英皇儲を御案内、平和記念博覽會を觀て、宮中午餐に參會せられ、吹上御苑に於ける武術打毬等御觀覽の後、靖國神社に詣で、日比谷公園に於て催されたる學生の英皇儲歡迎會に台臨、諸種の競技を御覽になつた。

諸所御案内

十九日親王は連日御多忙なる中に、海軍候補生として英艦乗組中なる白耳義

白耳義皇子
御招待軍艦陸奥へ
御案内

第二皇子チャールズ親王を招待して、本邸に茶話會を催され、同國大使及其家族も亦參殿陪席した。二十一日夜親王は英皇儲と共に男爵三井八郎右衛門邸に於ける晚餐會に列席せられ、二十二日は横濱在泊の軍艦陸奥に先著して同艦上に英皇儲を迎へ、海軍大臣の案内に依り艦内御巡覽の上、僚艦長門艦上に於ける海軍大臣主催の晚餐會に臨み、同夜御歸京、此日午後妃は白耳義皇子を主賓とせる宮中茶話會に參列せられた。

箱根へ御誘
導

二十三日親王は午前十時半品川驛を發し、横濱驛に於て英皇儲と會同せられ、御同車にて午後零時半小田原著、宮の下より來り會せられたる我皇太子と共に閑院宮載仁親王の御別邸に於て催されたる午餐會に臨まれ、終つて湯本福住旅館に入られた。二十四日富士屋ホテルに御投宿の英皇儲と共に、箱根離宮に於て我皇儲と會せられ、午餐後は湖上に御閑遊の豫定なりしも、前夜來の降雨に山中靄霧深く、且時々猛雨の來るありて、惜しくも御取止めとなりたれば、富士屋ホテルへ英皇儲を送られたる後、親王は直に旅館に歸られた。然るに心なき天候は翌日も尙ほ不良にて、遂に英國皇太子の富士山麓湖畔地方への御旅行

御歸京

御健康勝れ
ず英皇儲に御
告別御精勵と御
病氣

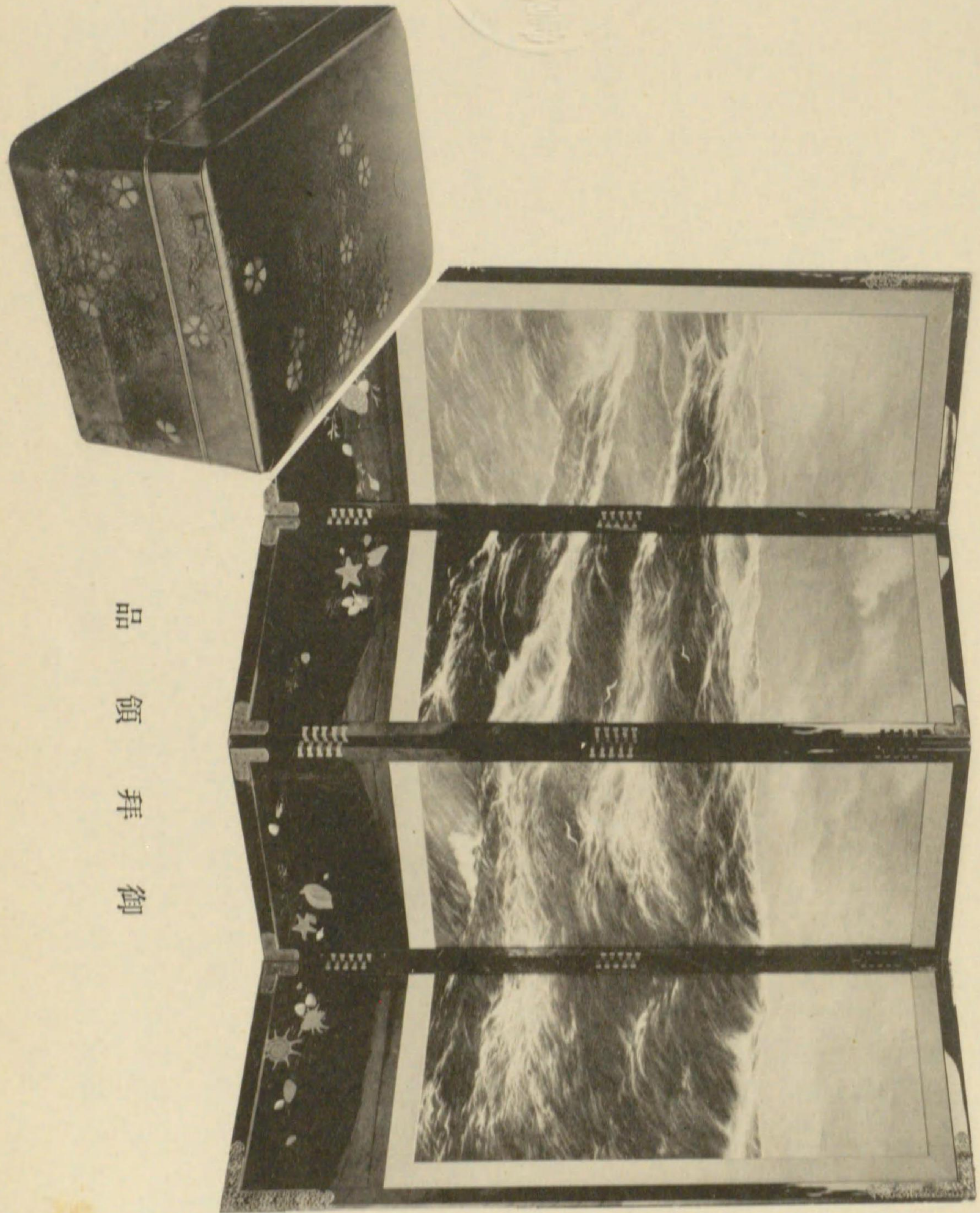
は中止となりしを以て、午後四時宮ノ下御用邸に兩皇太子と御會合あり、之れより西下せられんとする英皇儲に暫しの別れを告げられ、同夜御歸京になつた。當初の豫定に據れば、親王は月を越え五月七日、東京を發して再び英皇儲接伴の事に當らるべき筈なりしも、前月末御歸京以來御健康勝れず、今は御靜養一日も怠り難きにより、御附武官海軍大佐子爵田村丕顯を遣はし、宮島に於て英皇儲に謁し、其後健康思はしからず再び相見ゆるの機を得る能はざるを深く遺憾とする旨を傳へて、懇に暇を告げしめられた。英皇儲は之に對し深く親王の御病狀を憂へられ、來邦以來の篤き御懇情を謝し、速に平癒せられんことを祈る旨を答へられた。

資性格勤にして責任を重んぜらるゝ親王は、英國皇太子接伴の大命を拜せらるゝや、内には御自身と英皇室との間に於ける多年の御懇誼を懷はれ、外には日英兩國皇室並に兩國臣民間の和親を増進すべき、大なる使命の御自覺を以て其任に當られ、御自身の疲勞を顧みず、心身を傾けて連日連夜、誘導懇待の勞を取られたる御精勵には、國賓の満足は素より、國民上下を舉げて感佩措く能

はざるところであつた。殊に當時既に内に御發病の兆ありたるに拘はらず、之を冒して任務に盡瘁せられたる事を想ひては、只管恐懼と感激との外はない。

天皇深く其勞を嘉せられ、特に思召を以て海波飛鳥の圖を刺繡せる御屏風を賜ひ、後皇后亦妃の英皇儲接伴の勞を慰する爲め、御紋章附蒔繪撫子模様の手宮を賜はつた。

兩陛下より
御下賜品



御 拜 領 品



御體質と御健康

御發病

過重の御任務

異常なる御決心

第十八章 薨 去

親王の御體質は元來御強健とは申し難き上、過去長き海上の御勤務と、日常の御繁忙とに、心身の御勞苦尠からざりしにかゝはらず、幸に著しき御疾患もなく今日迄過されしは、一に不斷の御攝生と、堅忍剛毅なる御氣象の齎らしたる結果であると拜察せられる。然るに大正十年十一月下旬感冒に罹られ、聲帶を痛められて御發聲困難を來し、翌十一年一月醫師拜診の結果、右側聲帶に麻痺あることが認められた。されば同年三月英皇儲接伴に従事すべき大命を拜受せられたることは、其御健康状態より推して過重の大任なりしも、資性忠誠なる親王には、御不例の如きは氣振にも示されず、敢然病を押し、國家と皇室との爲め連日繁務に盡瘁せられた。幸にも英國皇太子の到來せられたる四月には、一時殆ど平癒せられしが如く拜せられしが、是れ蓋し異常なる御決心が、病魔を一時制壓したるに外ならずと申すべく、其忠誠剛毅なる御精神と、恪勤黽勉なる御精勵とは、眞に國民の模範と仰ぐべく、感激に堪へぬ次第であつた。

御病勢増進

葉山へ御轉
療

胸腔内の腫
瘍

滋養品下賜

妃の御看護

御容態書發
表

英皇儲御滯京中、親王は日夕行を共にせられ、接伴慰勲を極めたるは、前既に述べたるが如くである。從て其御精勵と御心勞とが御病軀に累を及ぼしたるもの、如く、四月廿五日御任務の大半を了へて、一先づ箱根より御歸京あるや、御疲勞頓に發して御病勢増進の兆あり、爲に五月初旬關西に於て再び英皇儲と會合の御豫定も中止せらるゝに至り、其月十日御療養の爲め葉山御別邸へ轉地せらるゝことゝなつた。爾來海軍々醫少將醫學博士雨宮量七郎主治醫と成り、醫學博士本多忠夫、同入澤達吉等専ら診療に奉仕し、萬般の治術を盡せしも、御病勢益々加重し、六月に入りては、更に胸腔内に腫瘍の存するを發見し、爲に脈搏増加、食機不振を來し、胸内御苦痛をさへ訴へらるゝに至つた。御病狀斯の如く容易ならざること叡聞に達し、天皇には深く御心を惱ませられ、滋養品を賜ひて慰問せしめられた。御發病以來妃には日夜御病床に侍せられ、親しく進藥其他御看護に盡されしも、其效果も顯はれず、御疾患日増しに進んで御衰弱益加はり、同月二十五日には御症狀極めて重態に陥られ、悲しくも最早御回春の望なきに至り、同日午後二時を以て初めて御容態を公表せられ

侍醫御差遣

愁雲葉山を
鎖す

御危篤

御歸京の途
に就かる

た。御容態發表の斯く後れしは、親王の御意識終始明確にして、病重らせられて後も、尙新聞紙を手にせらるゝこと常の如く、之を通じて悲しき豫想を喚起せらるゝ事の、あまりに御痛はしきを思ひ上げての故であつた。同日兩陛下よりは侍醫西川義方を遣はされ、翌日御病更に進むに及び、再び御使を以て物を賜ひ、病床に親王を慰問せしめられた。皇太子の御使を始め皇族並に著名の士の參邸踵を接し、英國皇太子其他諸方より御見舞の電報引きも切らず、葉山の空は愁雲深く鎖して森戸の汀、波も音を忍ぶばかりであつた。斯くて二十六日午後は、御苦痛稍薄らざたりと見えしも、御容體は益危険を増すばかりにて、遂に夜八時に至りて御危篤に陥らせられ、同十一時二十五分には全く絶望の御状態となられしが、宮中よりは特に侍従子爵松浦靖を遣はされて葡萄酒を賜つた。翌二十七日午後八時自動車にて妃及側近者隨從、葉山御別邸を出で、沿道居民の哀愁の涙に送られつゝ、御歸京の途に就かれた。杜鵑血に泣くさみだれの雲低き夕間暮、車窓の覆深く垂れさせて、常には愛でられたる沿道の景色も眺めさせられず、車の音もいと濕やかに、之ぞ最後の御旅行